

遂に【蹉跎】した	さてつ
【錚錚】たる顔ぶれ	そうそう
恙無い十余年を襲う鬼の【霍乱】だった	かくらん
【明礬】の水溶液は酸性である	みょうばん
無かつた子出来たを抱きて【炬燵】かな	こたつ
山中に【梵唄】を聴く	ぼんばい
亡骸は【荼毘】に付された	だび
【痘癰】のような薄笑いを浮かべる	けいれん
暴虎【馮河】の猛将	ひょうが
革命の【嚆矢】となる	こうし
臀部に【褥瘡】ができる	じょくそう
【婉娩】として聞き従う	えんべん／えんばん
神と御心と人間の心は天地【霄壤】の差	しょうじょう
【罨法】の繯帶を巻いて患部を静める	あんぽう
【腱鞘】の一部を切り開く手術	けんしょう
書斎に過ごす【静謐】なひと時	せいひつ
軍閥が【跋扈】していった	ばっこ
【鍼灸】院に行き手当てを受けた	しんきゅう
来る【雷霆】の震怒を収めるべし	らいてい
宿の庭の池に【鶴鵠】が来る	せきれい
まことに【忸怩】たるものがある	じくじ
【拈華】微笑、示すも大衆黙黙たり	ねんげ
狐疑【逡巡】してチャンスを逃がす	しゅんじゅん
雄大な【真鎰】製の燭台	しんちゅう
【慙愧】に堪えない	ざんき
背を【駱駝】のように僂める	らくだ
窮乏を極めた【惨憺】たる生活の態	さんたん
幼時からの【痼疾】に悩む	こしつ
森林内を暫く【逍遙】する	しょうよう
巨蛇の【蜿蜒】として至るを見る	えんえん

肺の為に【喀痰】検査に臨む	かくたん
【駄蕩】たる春光	たいとう
【潺湲】たる流水を渡る	せんかん／せんえん
目付きの悪い【不逞】の輩	ふてい
【瀟灑】な洋館に住む	しょうしゃ
師の【警咳】に接する	けいがい
華道家の【剪刀】が光る	せんとう
【掉尾】の勇を奮う	とうび／ちょうび
目的を弁ずること実実着着慇懃【叮嚀】なり	ていねい
【襯襷】百結の行乞僧に喜捨する	らんる
世態十年看ること【爛熟】す	らんじゅく
東海の彼方に【流謫】せらる	るたく／りゅうたく
社会福祉の【均霑】化	きんてん
【蜉蝣】の命を慈しむ	ふゆう
薪を集め【炊爨】の準備にとりかかる	すいさん
臍臓の管を【結紮】する	けっさつ
【証憑】を湮滅する	しょうひょう
眼前に【千仞】の崖が聳り立つ	せんじん
官吏を二十歳に【挂冠】した	けいかん／かいかん
顔色【憔悴】し、形容枯槁せり	しょうすい
記念碑に詩句を【鏤刻】する	ろうこく／るこく
孤魂故城に翔り、【靈柩】京師に寄す	れいきゅう
【駢驥】も一躍においては、十歩なること能わず	きき
手甲【脚絆】を身に付ける	きやはん
治水の為の【浚渫】工事が行われる	しゅんせつ
師の遺訓を【服膺】する	ふくよう
青天の【霹靂】のような出来事	へきれき
朝暾六合に【瀰漫】し明光を放つ	びまん
生豆を浅く【焙煎】する	ばいせん
弱小国の領土を【蹂躪】する	じゅうりん

【刮目】に値する	かつもく
敬服に値する【剝切】な考え方である	がいせつ
靈地を剽掠せんとする者を【膺懲】する	ようちょう
腹をゆすって【哄笑】する	こうしょう
非常に病弱で頻りに【喀血】する	かっけつ
無辜の民が擾乱の廉で【縲絏】にかかる	るいせつ
温顔【靄靄】として子を見る	あいあい
咀嚼して【嚙下】する	えんげ／えんか
【瞖隠】にて眼を掩えば細字明らかなり	あいたい
炉端にある古い【屏風】の絵	びょうぶ／へいふう
疾呼の【譴責】に遭う	けんせき
敵軍の【旗幟】を燃やす	きし
【恫喝】と懷柔を駆使した手口	どうかつ
顔に【危惧】の色が浮かぶ	きぐ
陽光麗らかな【崑崙】の空	こんろん
両者とも【鶴蚌】の争いで利を奪われた	いつぼう
度重なる躊躇に切歎【扼腕】した	やくわん
【穹窿】に雲雀の囀りが響く	きゅうりゅう
意識が【朦朧】とする	もうろう
老いてなお【矍鑠】としている	かくしゃく
旧弊が新たな発想の【桎梏】となる	しつこく
酷寒と【脚氣】が身体を襲う	かっけ
放佚【奢侈】を尽くす	しゃし
門前の【偃蹇】たる松の枝が見事だ	えんけん
【窈窕】たる淑女は、君子の好逑	ようちょう
【肯綮】に中たった見解である	こうけい
【巫覡】卜相の言に頼る	ふげき
雨天により【急遽】中止となった	きゅうきよ
電話口から【狒狒】旦那が喚いている	ひひ
甲高い【喇叭】の音色が響く	らっぱ

月を瞻仰し惆悵として【咨嗟】す	しき
古い槧木の判読に【脳漿】を絞り尽くす	のうしょう
【嘲嘆】たる鐘声が響き渡った	りゅうりょう
全国制覇に向け勇往【邁進】する	まいしん
敵に【邀撃】された	ようげき
【蒟蒻】を千切って煮る	くじゃく／こんにゃく
【顰蹙】を買う行為を慎む	ひんしゅく
一日沙上に【徘徊】す	はいかい
一億の値が付いた【稀覯】本	きこう
温和【怜俐】で好奇心に富む	れいり
【幽邃】なる山間に居を構えた	ゆうすい
【惻隱】の心は仁の端なり	そくいん
【縹緲】恋恋の情を断ち切れず苦悶した	ちゅうびゅう
【慟哭】して柴荊に返る	どうこく
彼は門前に立ち【慄然】と呟いた	ぶぜん
両者に【截然】たる仕切りがある	せつぜん
仇敵の言が彼の襟懐を【攬拌】させた	かくはん／こうはん
事情を【斟酌】する余地はある	しんしゃく
理の【明晰】と語氣の鋭さが文句に閃いている	めいせき
兄弟は【対蹠】的な性格である	たいせき／たいしょ
機動隊が【警邏】する	けいら
【絨毯】を敷く	じゅうたん
涙【滂沱】として流る	ぼうだ
挙動の【胡乱】な者たちだ	うろん
因果応報、天罰【覲面】	てきめん
紙の端で指を切ったので【絆創膏】を貼った	ばんそうこう
老牛、【舐犢】の愛を懷く	しとく
明星【煌煌】たり	こうこう
【邯鄲】の夢	かんたん
【閘門】を開閉して水位を調節する	こうもん

大きな【牛蒡】の葉が茂っている	ごぼう
目的地は【咫尺】の間だ	しせき
船檣の帆には【髑髏】が描かれている	どくろ／どくろう
古い曝えた【耄碌】の老人	もうろく
容姿【嬉媚】とした女性である	せんけん／せんえん
【舳艤】千里、旌旗空を蔽う	じくろ
未踏の【島嶼】を調査する	とうしょ
人質に罪の【幫助】を強制する	ほうじょ
【微恙】のため休暇をとる	びよう
【惰氣】は恋の命	りんき
猿臂を伸ばせる者、【蹲踞】して煙草を吹く者	そんきょ
中世【縉紳】の佚居の風を素描する	しんしん
往時を【鬢鬚】させる	ほうふつ
罪業を【懺悔】し天地に跼蹐す	ざんげ／さんげ
夙に起きて【看經】す	かんきん
【豌豆】の茎を撮んで口に入れる	えんどう
外で称讃し、内で【揶揄】する	やゆ
本心常に【韜晦】して明らかにせず	とうかい
水に臨んで【蝦蟇】に擲つ	がま
智慧と理窟が【内訌】する	ないこう
何物かに【拉致】された	らち／らっち
闖賊は勢い益々【猖獗】になり、軒て都も危うし	しょうけつ
殿様の【耳朶】に触れる	じだ
人里離れた【辺鄙】な土地	へんぴ
抹香嘗めた【閻魔】のよう	えんま
連環の【艨艟】は悉く舵を曲げた	もうどう
【剽輕】な動作が笑いを誘う	ひょうきん
酷く【酩酊】して蹠蹠踉踉たる足運びである	めいてい
【怪訝】な顔をするな	けげん／かいが
今の少年は不遜なり【輕躁】なり	けいそう

舞台の【緞帳】が下りる	どんちょう
【眈眈】として辺りを睨め廻す	たんたん
生真面目で【朴訥】な人柄	ぼくとつ
瑠璃も【玻璃】も照らせば光る	はり
少しも【躊躇】の色を示さない	ちゅうちょ
柄杓半杯の湯を入れ【茶筅】で攪拌する	ちゃせん
狭隘なる者は【粗鬆】なる筆を走らす	そしょう／そそう
【琥珀】は腐芥を取らず	こはく
【噴噴】たる名声を博した	さくさく
【迂闊】にも口を滑らす	うかつ
全くもって【不埒】千万である	ふらち
【蛇蠍】の如く忌み嫌う	だかつ／じゃかつ
【貌】の絵を描いてお守りにする	ばく
今も昔も自由【闊達】な校風である	かたたつ
余韻【嫋嫋】として絶えざること縷のごとし	じょうじょう
やまあらしは【齧齒】類に属する	げっし
我が家には【貌】の絵が飾ってある	ばく
【睚眥】の怨みも必ず報ゆ	がいさい／がいし
【恍惚】の域に逍遙する	こうこつ
鮑は【蠕動】運動によって移動する	ぜんどう
仏像の【瓔珞】が燭光に煌めく	ようらく
梵刹に祈る【阿闍梨】、威容を漂わす	あじゃり／あざり
町の人々から【懲懃】されて会長になる	しょうよう
心の【懊惄】を憇える友を持つ	おうのう
該博な知識を持ち、【端倪】すべからざる才人である	たんげい
大きな【琺琅】の鍋で煮込む	ほうろう
【蕁麻疹】が発症する	じんましん
戎馬【倥偬】の間に身をおく	こうそう
鬢に【璫瑁】の笄を挿す	たいまい
立てば【芍薬】座れば牡丹歩く姿は百合の花	しゃくやく

【昇汞】水を用いて消毒した	しょうこう
関東一円を【睥睨】していた	へいげい
親戚から慶事の【招聘】状を貰った	しょうへい
しばらく都門【熱鬧】の地を離れた	ねつとう／ねつどう
一級過去問題集は【垂涎】の資料である	すいせん／すいせん／すいえん
見知らぬ者が【闖入】してきた	ちんにゅう
目が【瑪瑙】のような硬い光を放っている	めのう
両者に【軋轢】が生じる	あつれき
凡そ民に喪有れば、【匍匐】してこれを救ふ	ほふく
事態は【闡明】になった	せんめい
猛る百獸の【咆哮】	ほうこう
黙然として【罵詈】讒謗を浴びる	ぱり
他人を【指嗾】して騒動を喚起せり	しそう
【開闢】以来の出来事	かいびやく
【屹度】次はいけるさ	きっと
愚政に対して【瞋恚】の炎を燃やす	しんい／しんに
ある【箏曲】家の次男として生まれる	そうきょく
江戸の町を【彷徨】する	ほうこう
虫害や【旱魃】に因る被害が甚大である	かんばつ
【捏造】記事を摘発された	ねつぞう／でつぞう
【微醺】を帯びた赭ら顔	びくん
憐憫の念から自己【欺瞞】に陥る	ぎまん
朝廷に奏上せり、諸侯に【諮詢】せり	しじゅん
水際に【欸乃】の声を聴く	あいだい／あいない
山には魑魅、水には【魍魎】	もうりょう
【涅槃】に達する	ねはん
【玲瓏】たる美声で歌いはじめた	れいろう
雨水を【濾過】して飲料水にする	ろか
【餳飪】一枚笊に盛る	うんどん／うどん
この災禍、【魑魅】の戯れか	ちみ

【囂囂】たる輿論は大雷雨の如し	ごうごう
【呱呱】の声を上げる	ここ
辛うじて【余喘】を保つ	よぜん
【傀儡】政権は間もなく転覆した	かいらい
【放埒】な行動をとる	ほうらつ
帰国する人の気持ちを【忖度】する	そんたく
【輓近】の世界情勢から目が離せない	ばんきん
忿懣遣る方無い弁駁は明らかな【齟齬】であった	そご
【齟齬】にして法学に長ける	ちょうしん
雪嵐が見る見る【輜重】を埋没した	しちょう
甘味屋で【餡蜜】を頂く	あんみつ
それは【覇扈】の引き倒しである	ひいき／ひき
啜泣は波打つ【歎歎】へと変わった	きよき
【貪婪】な金銭欲	どんらん／たんらん／とんらん
奉仕活動によって【贖罪】する	しょくざい
和服に【繻子】の帯	しゅす
二年間、始終【齷齪】していた	あくせく／あくさく
【焙烙】で豆を炒る	ほうろく／ほうらく
【衲衣】と袈裟を着ている半身像	のうえ
万一の【僥倖】を願う	ぎょうこう
【齶齒】の孫娘笑わんとして成さず	うし／くし
【啖呵】を切る	たんか
雑務が【輻輳】する	ふくそう
子どもたちが公園で和氣【藹藹】と遊んでいる	あいあい
些細な鬱端から【刃傷】沙汰に及んだ	にんじょう
華容【婀娜】として、我をして餐を忘れしむ	あだ
彼の欲は耿耿として【須臾】も熄まず	しゅゆ／すゆ
皓白たる【襦袢】姿	じゅばん
父の面影を【彷彿】とさせた	ほうふつ
公爵を【誣告】した罪を咎める	ぶこく

【轆轤】を回転させて食器を形作る	ろくろ
人を喰ったような【慇懃】無礼な文章	いんぎん
暮し向きの【慳貪】な男	けんどん
京都で薯蕷【饅頭】を頂く	まんじゅう
不平が社会に【胚胎】した	はいたい
いつか【懈怠】来て腐儒となり果てり	けたい／けだい／かいたい
彼女の伎倆は進み【儕輩】を擢んでる	せいはい／きいはい
荒怠相諱め、【自彊】息まざるべし	じきょう
天から【隕石】が落ちてくるかのよう	いんせき
【膀胱】の緊張が限界に達する	ぼうこう
【螺鈿】細工の上等な文箱	らでん
【鰥寡】孤独を愍れみ救う	かんか
【無辜】の学問に弾圧があった	むこ
他人の【疝氣】を頭痛に病む	せんき
武事に文事に【切磋】琢磨する	せっさ
彼の付和雷同ぶりには殆【辟易】している	へきえき
弁士は聴衆の前で【獅子吼】した	ししく
【茗荷】の餅を仏壇に供える	みょうが
良心の【呵責】に苦しむ	かしゃく
千人の諾諾は、一士の【謗謔】に如かず	がくがく
二人は【伉儷】の約を結んだ	こうれい
至尊の【忌諱】に触れる	きき／きい
厳しい詮議立てに【放屁】で返答する	ほうひ
気散じに【諧謔】の一匁を詠む	かいぎやく
やつとの思いで錠剤を【咽下】した	えんか／えんげ
【執拗】に自説を張り上げる	しつよう
歌舞伎界の【巨擘】と称えられる	きよはく
世相を【諷刺】する	ふうし
【駄舌】の人、先王の道を非とす	げきぜつ
街中で旧師と【邂逅】する	かいこう

元気【潑瀾】たる青年	はつらつ
【洒脱】な風格	しゃだつ
重い【疱瘡】に罹る	ほうそう
改革の気運が【澎湃】として起こった	ほうはい
名匠の手捌きに【瞠目】する	どうもく
臣は君の【猜疑】心の強さを知悉している	さいぎ
真夏の如き【溽暑】が続く	じょくしょ
最後【通牒】を発する	つうちょう
長兄の警句を【咀嚼】する	そしゃく
曩祖より紡がれる【煩瑣】な系図	はんさ
曠野の【落暉】に駒驥は駛せる	らっき
【狡猾】たる籌策の成功に北叟笑む	こうかつ
この方とは【昵懃】の間柄です	じっこん
他人事に【容喙】するものではない	ようかい
能く成すには【先蹤】を肆うべし	せんじょう
佛聖に【親炙】して弟子となつた	しんしゃ／しんせき
大宰府への下向は官位【褫奪】に等しい	ちだつ
【逆睹】しがたい形勢である	ぎやくと／げきと
金属製の【艦裝】を施す	ぎそう
春寒【料峭】の候に發つ	りょうしょう
愈々【啓蟄】の候を迎える	けいちつ
【敬虔】の意を以て福音を説く	けいけん
【肇國】の記念日を休みとする	ちょうこく
官僚間の繁文【縛礼】に縛られる	じょくれい
【麾下】の將兵数万に達する	きか
この【黎明】を齎した英傑	れいめい
疑懼の念が【蠢動】する	しゅんどう
洋風の【瀟洒】な家に住んでいる	しょうしゃ
天譴【天誅】の下に泰平在り	てんちゅう
伯曰わく、【猥亵】は憂き世に必要である	わいせつ

その瞳睛に王位【篡奪】の意を巡らしている	さんだつ
洋上に【対峙】するは百艘の艨艟	たいじ
夜叉王が【眷属】を従えてやってくる	けんぞく
恩師の忠告を【反芻】する	はんすう
密航中の貨物船を【拿捕】する	だほ
唐草模様の【袱紗】に漆器を包む	ふくさ
身の丈程の【棍棒】を振回す膂力	こんぼう
新聞の批評に【反駁】を加える	はんばく
【登攀】技術が高い	とうはん／とはん
秕政なれば文武は【凋落】す	ちょうらく
この【稀有】の機会を逃さず	けう
心身【羸弱】し悄然として嘆く	るいじやく
人口の【稠密】な地域である	ちゅうみつ
【老獏】も処世の筌蹄である	ろうかい
日がな一日【無聊】を託つ	ぶりょう
経済弱者を【裨益】する	ひえき
道徳的【誤謬】に陥る	ごびゅう
人間が人間を裁くことは【僭越】である	せんえつ
弱冠にして【痔瘻】を患う	じろう
血を見て【癱瘍】を起こす	てんかん
【社稷】を憂うる臣少なし	しゃしょく
古人の粉本を摸し意匠を【剽窃】する	ひょうせつ
市史の【編纂】に従事する	へんさん
檄書を【封緘】して捺印する	ふうかん
先生の輝かしい生涯を【縷縷】切切と語る	るる
他からの【掣肘】を受けない	せいちゅう
日月【荏苒】として代謝す	じんぜん
呼ぶ声に【莞爾】として片手を上げた	かんじ
鑄びた【薬莢】が散逸する現場	やっきょう
【巔然】として頭角を見す	ざんぜん

大いに【逕庭】有りて、人情に近からず	けいてい
倒れ行く幕府の【大廈】	たいか
終身【膠漆】心まさに在るべし	こうしつ
赤ん坊が唸り声や【喃語】をあげる	なんご
【幙幕】の内にて籌を廻らす	まんまく
錦を衣て【尚絅】す	しょうけい
酔溺し【蹠踉】蹣跚として歩く	そうろう
橋の袂に【擗坐】した戦車	かくざ
傾城傾国をどうする【了簡】もなかろうに	りょうけん
心の中の塵埃や【渣滓】を吐き出す	さし
非望を【覬覦】するの愚を犯していた	きゆ
目の前の激務に【鞅掌】している	おうじょう
旌旗林の如く風に翻って【喊声】天地に震う	かんせい
麒麟児の【崑玉】の詩を詠む	こんぎょく
亟遊の地に【縊死】す	いし
【尺蠖】の屈するは、以て信びんことを求むるなり	せっかく／せきかく／しゃっかく
声を嚙んで【動悸】を抑えている	どうき
漢字の【偏旁】を楷書で書く	へんぼう
文壇的人非人として【擯斥】される	ひんせき
【斗筲】の人、何ぞ算うるに足らんや	とそう／としょう
【薰蕕】は器を同じくせず	くんゆう
【琴瑟】相和す	きんしつ
【聚斂】の臣あらんより寧ろ盜臣あれ	しゅうれん
先民言うあり、【芻蕘】に詢る	すうじょう／すうぎょう
【薏苡】の謗、自ら明らかにするあたわづ	よきい／よくし
寸間も【苟且】に過ぎなかつた	こうしょ
これを【毫釐】に失すれば謬るに千里を以てす	ごうり
九仞の功を【一簣】に虧く	いっき
早起【盥漱】して本堂に籠もる	かんそう
あの大学者は【僻陬】の地に育つた	へきすう

悪漢を捕らえて【囮】に錮す	れいご／れいぎよ
彊大な颶風が日本を【震撼】させた	しんかん
天神【地祇】の冥助を蒙り給う	ちぎ
彼【裸裎】すと雖も、安んぞ能く我を汚さん	らてい
【鶴唳】を聞いて軍兵は退却した	かくれい
関関たる【雎鳩】は、河の洲に在り	しょきゅう
朝菌は晦朔を知らず、【蟪蛄】は春秋を知らず	けいこ
泥醉し【蹣跚】として跋歩する	まんさん／はんさん
一月、【馥郁】たる梅の香	ふくいく
奢侈輕薄は亡国の【鳩毒】となる	ちんどく
酒色に顧慮を闕いては【沈湎】は免れず	ちんめん
勝利の栄冠は【炳】として頭上にある	へい
話をして伶俐【侏儒】を甄別する	しゅじゅ
大河の潤す【膏腴】なる大地である	こうゆ
志氣の無さゆえ【巾幘】を贈られる	きんかく
濁穢を【蟬蛻】し、もって塵埃の外に浮游す	せんせい
嘔啞【嘲哳】、聴くを為し難し	ちょうたつ／とうたつ
雄弁に【瞞著】一切なし	まんちゃく
慢性的な【譴妄】状態が続いている	せんもう／せんぼう
濃霧の中に【倏忽】として冰山が現れた	しゅくこつ／しゅっこつ
長身【白皙】の紳士である	はくせき
人世の繫縛を【斫断】する	しゃくだん
【絨緞】の上に餉台を一つ置く	じゅうたん
【螻蟻】の誠、拠を信ずる処無し	ろうぎ
【姐姪】のお百	だっき
むやみに【打擲】するな	ちょうちゃく
孔の字の右側は【乙繞】という	おつにょう
ほしいままに大臣を【黜陟】するの非をせめる	ちゅっちょく
形影相弔い五常【愧赧】す	きたん
【矻矻】として少しも怠らない	こつこつ

敬事有らずんば、敢えて【袒褐】せず	たんせき
旧弊を廃却して新しい道徳を【提撕】する	ていせい／ていぜい
夜は【卓袱】料理で有名な店で食事をした	しっぽく
【卓犖】たる論弁の才が具わる	たくらく
理非曲直を【甄別】する	けんべつ
出席者に【忌憚】のない意見を促す	きたん
【辣腕】家として有名だ	らつわん
【忽焉】として逝く	こつえん
人心から【乖離】する	かいり
全くの【冤罪】だ	えんざい
【倉廩】実ちて礼節を知る	そうりん
【麝香】は薬料にも使われる	じやこう
【獺祭】書屋主人と称した	だっさい
名を【竹帛】に垂る	ちくはく
利益の【壟斷】を許すな	ろうだん
十分に【推敲】を重ねた	すいこう
色紙に【揮毫】する	きごう
一面に緋【毛氈】を敷く	もうせん
【阿吽】の呼吸	あうん
【纖細】な神経	せんさい
【瑕疵】のある商品だ	かし
【緘默】して語らず	かんもく
【吝嗇】な人だ	りんしょく
【寂寥】とした境内	せきりょう
ここで【熾烈】な戦いがあった	しれつ
二十歳代で【夭折】する	ようせつ
血管が【収斂】する	しゅうれん
今日の空は【群青】色です	ぐんじょう
地方きっての【素封】家だ	そほう
白萩の垣根は【禰宜】の軒端らし	ねぎ

策を【帷幄】の中にめぐらす	いあく
座ると早速【帙】をひもといた	ちつ
饑饉には【救恤】の備えをなす	きゅうじゅつ
【咄嗟】の間の出来事だった	とっさ
劬労を【羈束】とするべきではない	きそく
眼光は【炯炯】として人を射る	けいけい
悲惨の境に【沈淪】する	ちんりん
この原稿はまだ【書肆】の手に渡していない	しょし
冷戦の【終焉】という事態に対応する	しゅうえん
【蜂薙】の毒に犯さるるが如し	ほうたい
【夙夜】おこたらず机に向かう	しゅくや
【瓦礫】の中から再び起つ	がれき
潮は月の【虧盈】に隨う	きえい
師の処る所、【荊棘】生ず	けいきょく
海原が【縹渺】として眼前に広がる	ひょうびょう
経済弱者を筆頭に政府を【騒擾】した	そうじょう
泣いて【馬謖】をきる	ばしょく
【伽羅】枕に香を仕組む	きやら
【讒謗】律により言論に弾圧を加える	ざんぼう
なかなか旧体制の【残滓】が抜けない	ざんし／ざんさい
はるか山の彼方を【瞻望】する	せんぼう
万事好調ですっかり【有卦】に入った	うけ
虚誕妄説を排して、人心の【蠱惑】を払う	こわく
門下大いに驚いて【擾乱】す	じょうらん
一子相伝の秘術の筈が暗暗裏に【伝播】していた	でんぱ
厭離【穢土】と対をなす欣求淨土	えど
巷を騒がす【剽悍】無比の鼠賊共	ひょうかん
事業に頓挫して失望【落魄】の日々だ	らくはく
ひどく【頤使】されていた時期があった	いし
富貴なれば【驕奢】を生ず	きょうしゃ

海上の静謐を擾す【烏滸】な密漁者どもめ	おこ
【牛頭】阿傍は地獄の番人である	ごず
国家を【肇造】する	ちょうぞう
歯骨の内側が【壞死】状態となった	えし
【這般】の情勢に緊急対応を図る	しゃはん
【弥縫】の策を講じる	びほう
宮殿の石畳に列して【一揖】する	いちゅう
国際的な【紛擾】に発展した	ふんじょう
強い【輻射】を受ける	ふくしゃ
捏造記事と文書【改竄】が滔っている	かいざん
釈尊を弟子たちが【囲繞】する	いにょう／いじょう
後の御来駕により竟日【殷賑】の巷となった	いんしん
仕事の【間隙】を縫って帰郷する	かんげき
【平仄】が合わない話	ひょうそく
二十六聖人が【磔刑】に処せられた	たくけい／たっけい
開店準備で【忽忙】の極みだ	そうぼう
【俎上】の魚、江海に移る	そじょう
【万斛】の熱涙をそそぐ	ばんこく
古い【破風】造りの家並が美しい	はふ
古代文明の遺産の数々が【目睫】の間に在る	もくしょう
石畳に【戛然】と馬蹄が響き渡る	かつぜん
整然とした【街衢】が続く	がいく
世俗の【塵埃】にまみれた生活を送った	じんあい
衣裳は【素襖】、上下、熨斗目を用いた	すおう
盆栽が【一掬】の風流を醸し出している	いっきく
陰に【苞苴】を収め便宜をはからせた	ほうしょ
【縷説】するまでもなく明らかなことだ	るせつ
【操觚】界の見識が問われるところである	そうこ
印章を【小篆】で彫り上げる	しょうてん
作品に【褒貶】を加える	ほうへん

【飄風】に砂が巻き上げられた	ひょうふう
胸中の【恐懼】が霧散した	きょうく
巫女のもとに【翕然】と村人が集まつた	きゅうぜん
【豺狼】の如き無慈悲な行為だ	さいろう
主に【扈従】して旅を続けた	こしょう／こじゅう
木食して枯木宛らに【羸瘦】する	るいそう
恋愛は人生の【秘鑰】であると言われる	ひやく
【邏卒】が警備に駆り出された	らそつ
自由平等の【大旆】を翳す	たいはい
薬石効なく【溘焉】として逝く	こうえん
【偈】を作つて悟境を提示する	げ
初めて【膂力】の衰えを自覚した	りよりょく
隣国と【干戈】を交えることとなつた	かんか
【目睹】した者は少なくない	もくと
燭を【仏龕】に点じた	ぶつがん
【斃死】した旅人を荼毘に付する	へいし
正岡子規の命日を【獺祭忌】という	だっさいき
禍乱を【戡定】し四海を治める	かんてい
スペイン【駐箚】大使として赴任した	ちゅうさつ
【疇昔】の訓戒を服膺している	ちゅうせき
【兵站】部に伝令を飛ばした	へいたん
松林の【別墅】で病を癒やした	べっしょ
強か呑んで頭【岑岑】たり	しんしん
【歎獲】した兵器を使用する	ろかく
多項式の各項を【降幕】の順に排列する	こうべき
【杳】として原ぬべからず	よう
【發兌】号から欠かさず購読している	はつだ
兵士達が【呐喊】の声を上げた	とっかん
脇付に几帳面な字で【貌下】とあつた	げいか
彼奴の粋狂には【之繞】が掛かっている	しんにゅう／しんにょう

往昔の街衢が描かれた【鳥瞰図】である

ちょうかんず

はつらん

きょうだ

てっけつ

せきばく／じゃくまく

---

そさい

しゅうらん

ごうごう／きょうきょう

じゅそ／ずそ

---

そうぼう

こうきょ

かんすい

らんだ

どうきん

せんべつ

---

とうとう

さい

かんぱつ

かんぱつ

しっぴ

---

ぞうぶつ／ぞうもつ

よじん

ほうしん

かんがん

せいけい

---

とうつう

そうもう／そうぼう

あゆ

いしゅう

かくしゅ

【撥乱】反正の人となる

逡巡を払い【怯懦】を拭う

宮廷の癌を【剔抉】する

彼の一聲が【寂寥】を破る嚆矢であった

種種の【蔬菜】を品嚮する

王は人心の【収攬】に努めた

輿論は【囂囂】と沸き上がっている

峻烈な【呪詛】の意志を罩める

仁政が【蒼氓】の労劬を減輕する

宝算四十九を以て【薨去】された

臥榻の側ら他人の【鼾睡】を容れず

厲精なる者と【懶惰】なる者の畛畦を設けない

渦中の雌雄が【同衾】する諷刺画である

同郷の友からの【餞別】の品を携える

無用の弁を【滔滔】と垂れる

運は【賽】の目次第

終戦の大詔が【渙發】された

彼の才氣【煥發】な質を見た

宏壯な建物が【櫛比】している

【贓物】故買の容疑で逮捕された

兵燹の【余燼】が惨きを物語る

顔に【庖疹】が出る

皇帝の祭服を【宦官】が運ぶ

淨く苔無くば【成蹊】の如く花木繚乱たり

刺すような【疼痛】を感じる

農人は【草莽】の臣なり、商工は市井の臣なり

歯の浮くような【阿諛】を弄する

捕手の影が一団に【蝟集】する

葉書一枚で【馘首】された

頭の鋭い【狷介】な毒舌家	けんかい
世に対して半ば【慷慨】し、半ば冷嘲した	こうがい
造次にも【顛沛】にも国体を貶めるべからず	てんぱい
疾風に【勁草】を知る	けいそう
一家の【団欒】を大事にする	だんらん
斯学を【搖籃】を綴る稀覩本であった	ようらん
【蜃氣樓】のように朦朧と現れ出る	しんきろう
新型の感冒に【罹患】してしまう	りかん
一つの主張から【演繹】せず、無数の事実から帰納する	えんえき
銅鑼の音とともに午時に【解纜】した	かいらん
様々な臆測と【揣摩】が交錯した	しま
余生を【謳歌】する	おうか
背黃青【鸚哥】を飼う	いんこ
衰老を養うに【糜粥】飲食を行う	びしゅく
陰陽を【燮理】して靖寧を獻る	しょうり
【屎尿】を汲んで肥やしとした	しにょう
君子の【好逑】となるべき資格	こうきゅう
論説に乱離【牴牾】を生ず	ていご
【稟賦】の才能を發揮する	ひんぷ
我が心の憂いは日月【逾邁】して、而して云来せず	ゆまい
妖しく光る【姮娥】	こうが
【鷦鷯】深林に巣くうも一枝に過ぎず	じょうりょう
【譬喻】表現を用いて説明する	ひゆ
【腋窩】に冷や汗をかいだ	えきか／えきわ
野合は【驟雨】で中止となった	しゅうう
【寤寐】の境に斯く逍遙す	ごび
間宮海峡の旧称を【韃靼】海峡という	だったん
他人の私生活をあれこれと【穿鑿】するな	せんさく
幕府の【紊亂】につけこみ無頼者が簇出する	ぶんらん／びんらん
【警蹕】の声が四圍に響き渡った	けいひつ

【蘭麝】の香りが四辺に漂う	らんじや
字義を学ばずして漢字検定一級に挑むは即ち【蠟螂】の斧	とうろう
大哥より【庭訓】を教わる	ていきん
道路交通法に【触撃】する行為	ていしょく
酩酊の【猩猩】に肩を叩かれる	しょうじょう
四弦の一声【裂帛】のごとし	れっぱく
仏の【闕伽】棚に花を供える	あか
山は虚無【縹渺】の間に在り	ひょうびょう
昭和三十三年は【戊戌】の年	ぼじゅつ
庭に濃く吹く【橄欖】の香	かんらん
【汨羅】の鬼の哭声が聞こえるようだ	べきら
十二月【己巳】、東都に至る	きし
遐域に冤家【蟠踞】す	ばんきょ
昨年は【乙亥】の歳だった	いつがい／おつがい
【瓦缶】を敲き楚辞を呻く	がふ
【聊爾】の沙汰を起こす	りょうじ
昭和十三年は【戊寅】の年	ぼいん
古典を暗誦【訓詁】する	くんこ
その人の偉勲と【懿德】を仔細に語る	いとく
町の【参差】錯落たる美觀	しんし
【馬棟】で擦って版画を仕上げる	ばれん
昭代に【瑕瑾】生ず	かきん
籠鳥【檻猿】俱に未だ死せず	かんえん
国の為に質素儉約を率先【躬行】する	きゅうこう
顛顛は【顫動】し、顔色は蒼褪めていた	せんどう
同門に【閨牆】の事が有った	げきしょう
寒氣【凜冽】たり	りんれつ
谷鳥の哀鳴【啾啾】たるを聞くのみ	しゅうしゅう
【釀金】を募り記念碑を建てた	きょきん
学業を【抛擲】する	ほうてき

【轄軻】にして数奇なる生涯を送った	かんか
法眼禪師に【啐啄】同時の機有り	そったく
青緑色の【釉薬】を使用した陶器	ゆうやく
【簞篋】の響きが鳴り渡る	ひちりき／ひつりつ
【先妣】の形見	せんぴ
【管鮑】の交わり	かんぱう
【棕櫚】縄で垣根を設える	しゅろ
【茴香】の実を生薬に用いる	ういきょう
【斧鉄】を加える	ふえつ
進出の【橋頭堡】とする店	きょうとうほ
【輶転】反側しては周章狼狽する	てんてん
道徳の標準【彝倫】は国民の常智常識なり	いりん
【万籟】歎みて子夜の寂寥	ばんらい
山国の闇恐ろしき【追训】かな	ついな
【鍾馗】大臣の棚から落ちたよう	しょうき
厩戸皇子の【諡号】は聖徳太子である	しごう
四季の【花卉】を以て綵衣の如し	かき
一度【耕耘】機を曳けば五挺の鋤に勝るとも劣らず	こううん
祖母より譲り受けた【布帛】には愛着があります	ふはく
【敷衍】して説明する	ふえん
直線状の【瘢痕】を残す	はんこん
庠校の建設を官衙に【稟請】する	りんせい／ひんせい
【稼穡】懈らずおのずと産を成した	かしょく
父子ともに【謇諤】の節をつくした	けんがく
【吮疽】の仁を尽くす	せんそ／せんしょ
腹水の【瀦溜】が著しくなった	ちよりゅう
輩に別れ群を超え、絢練【夐絕】す	けいぜつ
畸形な【跛行】文化	はこう
神殿が真っ先に【焼燬】された	しょうき
講義に欠伸し【倦憊】を示す	けんぱい

奇策を以て敵兵の【褫魄】を謀る	ちらく
斗筲の人と雖も【駑駘】にあらず	どたい
落日が五彩の【虹霓】を染めた	こうげい
往年米国の義挙を【贊襄】する	さんじょう
社稷に【禳禱】して五穀豊穰を祈る	じょうとう
【槽櫪】の間に駢死し、千里をもつて称せられざるなり	それき
【鵝鴨】起ち赤幟奔る	がおう
間者に対する【鞫訊】は酷烈を極めた	きくじん
賀詞は敬頌【新禧】と書いた	しんき
彼は【鄒魯】の学に関心が深い	すうろ
人事【紛紜】として会社は落ち着かない	ふんうん
寺院の鐘が【鏗鏗】と鳴り響く	こうこう
穹窿に【杜鵑】の行方を追う	とけん
謫落して【跼蹐】の日々を送る	きょくせき
七夕の夢の浮橋は【烏鵲】かな	うじやく／うしゃく
卑しき村邑に【謫徙】される	たくし
一介の【廝養】の身であった	しよう
愛弟子の【駸駸】たる上達ぶりに瞠目する	しんしん
【誼鬧】の場から逃れた	けんどう／けんとう
狗肉を【搏噬】す	はくせい
難病が【痊癒】する奇蹟	せんゆ
兵士は皆青窄の【襯衫】を着した	しんさん
東天に昇る【朝暾】を拝する	ちょうとん
悲歎心痛のあまり【毀瘠】骨立している	きせき
【遐陬】僻壤と雖も学校が設置された	かすう
打嚏して【涕洟】飛ぶ	ていい
【遐邇】の民は王に帰属する	かじ
潺潺として泉が【瀉出】する	しゃしうつ
比類なき【丕績】を残した	ひせき
【登遐】の日に際して諸王の葬に会する	とうか

善は【勁力】を須要とす	りくりょく
宝幡及び【鏡匣】を寺に施入する	きょうれん
機警なる【諂詐】に乗せられる	けっさ／きっさ
怒鶴此に來たりて【腥羶】を窺う	せいせん
眉宇に【鷙悍】の氣を漂わせる	しかん
草茅を焚き、【榛莽】を斫る	しんもう／しんぼう
節義を守って【村墅】に余生を送る	そんしょ
【癪癖】が強くて接しにくい	かんぺき
【臍下】三寸に在り	せいいか／さいいか
【齒莽】にして漏らす所多し	ろもう／ろぼう
状貌【峯峯】として峨峨たり	ぎんぎん
薄暮に紛れて【遯竄】する	とんざん
【覗汗】しとどに背を濡らす	てんかん
山路【葩卉】繁く野田風日好し	はき
【蝸廬】、客を招きて幽なり	かろ
上【狃習】して其の事を知る	じゅうしゅう
縞衣【綦巾】いさか我を楽しましめん	ききん
四月の山に【嘉卉】を見出す	かき
武を以て【歎掠】する者討ち取る	ろりやく
【蒹葭】玉樹に倚る	けんか
首筋の【癰疽】を切除する	ようそ
美麗【姚冶】なる姿に心を奪われた	ようや
【翩翻】とひるがえる日章旗	へんぽん
老僧は【塵尾】を振って話し始めた	しゆび
【仇讐】の如く貴族階級を憎んだ	きゅうしゅう
【寥落】たる寒山虛牖に対する	りょうらく
得得たる感情が心のうちに【洶湧】する	きょうゆう／きょうよう
諸侯が皇帝に【朝覲】する	ちょうきん
寡婦が揮毫した【閨怨】の句である	けいえん
日月逾邁、【粉榆】を回顧す	ふんゆ

久しく大兵を屯し供費【殫竭】す	たんけつ
山巔山腹白雪【皚皚】たり	がいがい
右手に酒杯を持ち左手に【蟹螯】を持つ	かいごう
凡て【閨巷】猥瑣の事には能く通曉している	りょこう
上京して三年、郷の【尊羹】を思う	じゅんこう
話の通じない【慳吝】屋	けんりん
毛髪【鬚髯】共に薄栗毛色の人物である	しゅせん
【棣鄂】の情を全うする	ていがく
蕪蔓にして、【耘鋤】すること少なし	うんじょ
【樊籠】の裏にあった男が野に下った	はんろう
糊口を凌ぐに【齎塩】を以てす	せいえん
人生【根蒂】無し	こんてい／こんたい
百の【筌蹄】を以て万事の權衡を保つ	せんてい
宴安は【酙毒】と心得よ	ちんどく
いまだ【識闇】に達していなかった	しきいき
半生をかけて【冤枉】を雪いだ	えんおう
【巉巖】峨峨として嶮岨を極めた	ざんがん
目、鏡を失えば以て【鬚眉】を正すこと無し	しゅび
垣間見た美姫に【眷恋】する	けんれん
後宮を【詛詈】し主上に及ぶ	そり
深さ二尺許りの【地窖】を穿つ	ちこう
【夕暉】すでに斜めに西山に入らんとする	せっき
【横杆】でも動かない巖のような權幕	こうかん
大は棟梁と為し小は【檻桷】と為す	すいかく
凱風南よりして、彼の【棘心】を吹く	きょくしん
人生相見えざること【參商】の如し	しんしょう
国に【巫蠱】の事あり	ふこ
【薤露】の悲歌を手向ける	かいろ
連璧【賁臨】、家内賑やかす	ひりん
我を生みて【劬勞】す	くろう

方趾と【円顱】を持つのは人間	えんろ
【齧齶】にして漢籍に親しんだ	しんちょう
【纖嗇】筋力は生を治むるの正道なり	せんしょく
【白堊】の砂漠	はくあ／はくあく
【羈輶】を脱して別世界の人となる	きやく
松籟【颯颯】、谿声淙淙、相和して暎暎たり	さっさつ
【孩提】の童も、その親を愛するを知らざる者無し	がいてい
【謠詭】や不正不義が跋扈跳梁した	けっき
運斤成風を以て【巍乎】たる樓閣を起こす	ぎこ
いまだ【厭飫】するに至らない	えんよ
【牆】の壊るるは隙においてす	しょう
【扈蹕】する者百人を下らなかつた	こひつ
痛烈な【詬罵】を浴びせられた	こうば
緯武経文を励行し、【賚予】驕侈を節減せよ	らいよ
【鼴鼴】と太鼓が鳴り渡つた	とうとう
満架の【薔薇】一院香し	しょうび／そうび
交誼を絶ち、【親昵】をも屏けて隠栖する	しんじつ
動もすれば狂蕩を以て【規箴】せり	きしん
【蜘蛛】の網に捕らわれる	ちちゅ／ちちゅう
悪鬼どもに【誅戮】の刃を酬いいる	ちゅうりく
【眼瞼】がぴくぴく痙攣している	がんけん
【嫋娜】たる麗人が歌いつつ舞う	じょうだ
呂蒙【囁語】して周易に通ず	げいご
【裹頭】の僧兵が狼藉を働く	かとう
【輒然】として四枝形体有るを忘るるなり	ちようぜん
從容として【易簱】の時を迎える	えきさく
いつしか【肚裡】に荊棘を生じた	とり
宜しく【庠序】を興すべし	しょうじょ
【拂鬱】として籠居していた	ふつうつ
詩文から【肅齋】を刪除する	ゆうせい

虜囚を【擒縦】して間諜と作す	きんじょう
山道は【輓馬】輸送で行く	ばんば
冒瀆【鄙陋】の悪行	ひろう
人馬【絡繹】として絶えず	らくえき
未練を【擺脱】して精神を集中させる	はいだつ
【旌倪】婦人の琢磨せざる者有り	ぼうげい
丈夫玉碎して【甄全】を恥ず	せんぜん
忝く臣等が【曩祖】を思えば、本願の余裔といつづべし	のうそ／どうそ
玉輦【巷陌】を通過し畢わんぬ	こうはく／こうばく
古の風儀は【泯滅】に帰した	びんめつ
【渭浜】の器、落落たり	いひん
神階の【陞叙】を受ける	しょうじょ
【鯨鯢】の大なる者は長さ千里	げいげい
一座を【流眄】して徐に席についた	りゅうべん／りゅうめん
【僂指】すれば既に六星霜を経たり	ろうし／るし
【掀髯】として色紙に揮毫した	きんせん
四海に【讒誣】して紊す狼藉者	ざんぶ／ざんぶ
【渺】たる海原を眺めて居った	びょう
この【鯤鵬】の説も寓言ではないというか	こんほう
旧習の【誣罔】を弁じ蒙を啓かんとす	ふもう
【擅恣】の譏りを免れない	せんし
【愁愁】然として相知るなし	ぎんぎん
爾に誨えること【諄諄】たり	じゅんじゅん
【掎角】の勢いを為して敵に迫る	きかく
かの嶺に【躋攀】せんと擬る	せいはん
新都の【広袤】旧都に倍せり	こうぼう
君に【諂諛】しているのではない	てんゆ
すでに【擣礎】の音も絶えた	とうちん
【唧唧】たる虫の声が人を愁殺する	しょくしょく
功臣の【塚上】に桜木が植えられた	ちょうじょう

村の衆庶から【銓衡】して司直を右く	せんこう
都に四年、【蓴鱸】を思う	じゅんろ
銀子が嚴重に【苞裹】してある	ほうか
灯明の傍らに【兀坐】して読書する	こつざ／ごつざ
【惆悵】としてひとり悲しむ	ちゅうちょう
帝国憲政の将来に【裨補】する	ひほ
【拮据】二十余年を以て筆を擱いた	きつきよ／けつきよ
洪図は【蹉跎】し切歯扼腕する	きた／さだ
黄金【銷鑠】し、素糸変ず	しょうしゃく
嘉辰令月を【揅択】する	かんたく
故郷の友と【袂別】する	べいべつ
寄港地での【淹留】を余儀なくされた	えんりゅう
【嚼蠟】無味の日録を通見する	しゃくろう
不夜の花巷に【耽湎】する	たんめん／たんべん
流水【濺濺】として両陂を度る	せんせん
槐の幹に巨大な【癟瘤】が出来ている	えいりゅう
僵禽斃獸、爛として【磧礲】の若し	せきれき
山は太地の彩色を【絢煥】す	けんかん
不当な貶斥は御【宸翰】により免れた	しんかん
蘭湯に浴して身体の【垢膩】を盪う	こうじ／くに
【瓊葩】綉葉の春日に遊ぶ	けいは
【蒿里】、誰が家の地ぞ	こうり
河水【匯滯】して湖と成る	かいたい
【歛】たり、かの晨風	いつ
豪放【跌宕】の気性で狩りを好んだ	てつとう
項王【喑噁】叱咤すれば、千人皆靡す	いんお
時ならぬ【雹霰】が五穀を傷害した	はくせん／はくさん
乱世に乘じ【鴟梟】の欲を逞しくする	しきょう
【卸事】して幽邃なる深林に隠栖する	しゃじ
古代の【塋域】に暫し佇んだ	えいいき

青磁色の【鵠尾】を載せた屋根	しひ
好言口よりし【莠言】口よりす	ゆうげん
官吏怠慢にして【羇羈】の煩を厭う	てきちょう
長閑な村に【碓春】の音が響く	たいしょう
【千鎰】の値に当たる	せんいつ
夢に胡蝶と為る、【栩栩然】として胡蝶なり	くくぜん
【霎時】にして事の重大なるを知った	しょうじ
茅茨翦らず、【采椽】削らず	さいてん
【泛駕】の馬に喩うべき逸才である	ほうが
村は【兵燹】に罹り灰燼と化した	へいせん
無人の街衢を【獰飄】が吹き過ぎる	どうひょう
此の時惟れ短剣、【仍世】尽く双旌	じょうせい
青天【閃爍】して暉を停むる無し	せんしゃく
【噴嘆】する時は則ち人我を道う	ふんてい
みずから耕耘【刈穫】のことを課して人人をはげます	がいかく
麒麟の【蹠躅】は駒馬の安歩に如かず	きょくちょく
【羔羊】の何物たるかを知らざるなり	こうよう
妻の【胎孕】を案ずる	たいよう
誰にも逢わずに【屏居】の日を送る	へいきよ
たとい曠野に【仆斃】すとも悔いなし	ふへい／ほくへい
【巻纏】料理で客をもてなした	けんちん
【蟾蜍】両歳、秋林を照らす	せんじょ
互いに有無を【懋遷】し利を作す	ぼうせん
群下の中央にある【大達】に店を構えた	たいき
午睡を謂いて【攤飯】と為す	たんぱん
千官、【鷦列】して席につく	ぼくれつ
碧潭、委蛇として【隈澳】に傍う	わいいいく
頻りに鴻慈に浴し、未だ【鶴退】の歎有らず	げきたい
日が傾き山の【皺襞】が際立ってきた	しゅうへき
【犂牛】の喩えどおり世に出る時が来た	りぎゅう

謀叛の報に急ぎ【旋踵】して城に戻る	せんしゅう
【蚊蚋】膚を咬み虎狼を喰らう	ぶんぜい
【遒勁】無比な筆勢に圧倒され尽くす	しゅうけい
骨董品を左見右見【品嚮】する	ひんしつ
【犇散】して人っ子一人見えぬ	ほんさん
このごろ【譜毀】すること多し	しんき
命令を心中に【鐫録】する	せんろく
出陣に臨んで【馬條】を締め直す	ばとう
時々官吏の【鐫黜】あり	せんちゅつ
前人【恁地】に説くも亦未だ尽くさず	じんち／いんち
心を竭くして自ら【勛厲】す	きょくれい
詩人の墓碑銘を【掲本】に採っておく	とうほん
【杲杲】たる落日が連山を紫に変ずる	こうこう
人倫に善しと雖も、危言【覈論】を為さず	かくろん
疵瑕【蹉躡】は己の成長を扶く	さち
清幽求めて【覓索】す	べきさく
花綻びんとして【靨笑】を含むに似る	ようしょう
鳥の腹は【毳毛】でおおわれている	せいもう
人生は朝露に譬え、居世は【屯蹙】多し	ちゅんけん
詞藻の枯れるを悟り、なお筆鋒は【奢靡】する	きんしゅく
可憐な【丫鬟】が目に留まった	あかん
【竇窖】を穿ち秘仏を藏める	とうこう
已に【呶呶】を要しない	どど／どうどう
悉くその質を【串殺】す	せんきつ
【鷦鷯】大鵬を笑うに異ならない	がくきゅう／かくきゅう
人皆【七竅】有りて視聴食息す	しちきょう
【嶷然】として人馬を容れない	ぎょくせん
飢饉【荐臻】、民これを愁う	せんしん
【怡怡】たる中堂の笑い声	いい
【阜隸】同然に遇された	そあれい

人を【潛伏】させる姿を巍然と備えている	しょうふく
一山の豺狼【麋鹿】畏れ従わぬものとてなかつた	びろく
突風【霾翳】を起こして天を暝くす	ぱいえい
千金の珠は【驪龍】の頸下に在り	りりょう／りりゅう
徐に【摺扇】を開き、うちあおいだ	しょうせん
【昊天】成命あり	こうてん
將軍の【驍名】が語り伝えられた	ぎょうめい
顯官の妻と雖も手ずから【春簸】した	しょうは
饑渴せる四方の民が【麿集】する	くんしゅう／きんしゅう
【歛丐】の跋扈する格差社会	かんかい
【棗脩】を携えて入門を乞う	そうしゅう
【卯角】にして詩文に長じた	かんかく
齡五十に垂とし、【俛焉】として刻厲す	べんえん
【蓖麻】を栽培して油をとる	ひま
【幕幕】たる雲を裂いて閃光が走った	べきべき
【卮酒】に月を浮かべる	しじゅ
人を差わずに【自售】せよ	じしゅう
屋根が【森風】に巻き上げられた	ひょうふう
注文と【涓埃】も違わぬ出来である	けんあい
【盍簪】の間に自説を披瀝する	こうしん
【鞭笞】百打を与えて之を懲らす	べんち
一語中たらざれば、則ち【愆尤】駢び集まる	けんゆう
古人の意を知って【説懥】する	えつえき
闔国の【黔黎】が鴻化に浴した	けんれい
【酒盞】を傾けていい機嫌になった	しゅさん
正に病翼の【鶡粘】に遭うが如し	ちでん
一文で博奕するも【搏景】の日であった	はくえい
悉く【亥豕】の譌有り	がいし
天子の【棺椁】に七重とされた	かんかく
孔子に【黔突】無く、墨子に煖席無し	けんとつ

唯唯【鋪歎】するのみ	ほせつ
宮室を卑しくして、力を【溝洫】に尽くす	こうきょく
駿馬を【豢擾】する主	かんじょう
民をして【盼盼】然たらしむ	けいけい
不尽の長江は【滾滾】として來たる	こんこん
婦人の【髻鬟】の風、巴里より流行す	けいかん
天下【乂安】、万里を行くも兵刃を持たず	がいあん
飛鳥も故郷を過ぐるや、猶【躊躇】徘徊す	てきちょく
【奸黠】の悪人が見事に描かれている	かんかつ
【貂裘】を以て酒に換える	ちょうきゅう
【老耋】と侮って痛棒を喰らった	ろうてつ
【簪珥】を脱して叩首する	しんじ
舞や【婆娑】として、歌堂に満つ	ばさ
【便嬖】の臣を遠ざける	べんぺい／べんへい
眼前に【崔嵬】たる岩山が逼る	さいかい
【闌寂】とした夜の巷を歩む	げきせき
この四方を【朶頤】せんと欲する	だい
北辺の【鎖鑰】に勁兵を集め	さやく
【貽厥】に違い三代を経ずして断滅した	いけつ
【題簽】を自筆で書いてある	だいせん
【卜筮】して然る後に大事を決す	ぼくせい
母親謹製の【搏飯】を携える	たんぱん
恣の奸臣を【貶黜】す	へんちゅつ
【馬鬢】斜めに傾きて毛は瑟縮す	ぱりょう
【詒謀】を循守して家名を挙げた	いぼう
予予その【佼黠】が知れ渡っていた	こうかつ
車馬【虯至】して熱鬧を極めた	くんし／きんし
州に孟瀆有り、久しく【淤闕】す	おあつ
王、【輟食】吐哺して之を罵る	てっしょく
冕旒其の頭を束し【黼黻】其の身を拘す	ふふつ／ほふつ

折しも【灑涙雨】が降っている	さいるいう
【良賈】は深く藏して虚なるがごとし	りょうこ
甕で【醯醢】を製する	けいかい
人心を【羈縻】する思想を排する	きび
灯火をかかげて【芸帙】を繙く	うんちつ
書画骨董が【糴糴】売買される	ちょうてき
【醯鷄】甕裏の天	けいけい
園内の雑草を【芟除】する	さんじょ／せんじょ
【蛙鼈】の声、啾啾たり	あぼう
戎僕、王の【倅車】の政を掌る	さいしゃ
寸暇を惜しんで【鼈勉】する	びんべん
【尠少】ならざる痛手となった	せんしょう
午睡より醒め【欠伸】至って快なり	けんしん
一顧だに值しない【亥麼】である	ようま
【罅漏】を補うに断簡を以てす	かろう
【龜鼈】の小堅、自らを救うに暇あらず	きべつ
陳列されていた【器皿】を収納する	きべい
邪な気持ちが筆端に【纏繞】する	てんじょう
法制は必ず行い【壅隆】すべからざるなり	わりゅう
もし薬【瞑眩】せづんば、その疾癒えず	めんげん／めんけん／めいげん
【叶洽】の歳、歳陰末に在り	きょうこう
【鼈俛】事に従い敢えて勞を告げず	びんべん
二国間に【釁隙】を生じた	きんげき
貧窶【困阨】の甚だしきに驚く	こんやく
両蛇の穴を争い【蟄鬪】するが如し	せきげつ
壁の掛け時計が【鏗然】と鳴った	こうぜん
行くに臨んで訝る者を【啜賺】す	せったん
面作品にさしたる【軒輊】はない	けんち
步步に足を止め【瞻矚】に遑あらず	せんしょく
鄭重なる【賻儀】を賜る	ふぎ

官を辞し【粥文】す	いくぶん
一隅に【囁囁】の語が起こった	しょうしょう／じょうじょう／しょうじょう
善悪を二つながら【吞噬】して憚らない	どんぜい
武員を崇重し、文職を【藐視】した	びょうし
皇門より入り【達路】に到る	きろ
【公衙】とは役所のことである	こうが
【艱窘】に耐えて節義を全うする	かんきん
西欧の文物に感化【甄陶】される	けんとう
法廷で【輸贏】を争う	しゅえい／ゆえい
【坡陀】たる白砂の岡阜を眼前にする	はだ
質素な【午餉】を摂る	ごしょう
【柊葉】の状は芭蕉の如し	しゅうよう
举止【蘊藉】にして礼節あり	うんしゃ
合格を【抃躍】して喜ぶ	べんやく／へんやく
【岌巍】たる山嶺が聯亘している	きゅうぎょく
【甌窯】篝に満ち汗邪（おや）車に満つ	おうろう
【摺殺】の跡がみられる	きゅうさつ／こうさつ
百木【黝藪】として涼涼たり	ゆうあい
【偃僂】して君門に入る	うる／うろう
諸川を浚渫して【舟楫】の便を図る	しゅうしゅう
日本の原像を求め【藐焉】たる上古に遡る	ばくえん
百骸【九竅】の中に物あり	きゅうきょう
鷲鳥に遭い懼懼として【簞食】を失す	たんし
文質【彬彬】其宜を得る	ひんぴん
【饗餮】厭くを知らざる人物であった	とうてつ
智愚一視して【畛畦】を設けない	しんけい
【輦轂】の下に一大祭典を催す	れんこく
【孱顔】に足を投げ出し空山に蟲を捻る	さんがん／せんがん
社長は創業者の【仍孫】である	じょうそん
【哽噎】極めて切なるものがあった	こうえつ

封豕長蛇の如く天下を【荐食】した	せんしょく
【圧状】ずくめに承知させる	おうじょう
太祖崩じて【抔土】未だ乾かず	ほうど
簿書案牘の間に【汨没】していた	こつぼつ
【蔚薈】たる叢林に歩み入る	うつわい／いわい
国策の概要と【楔子】を摘要する	せっし／けっし
軀て宇内を【綏撫】するに至らん	すいぶ
川辺に遊び【軫憂】を上ぐ	しんゆう
東に覆敗の軍有り、西に【殮没】の将有り	えいぼつ
爵禄なる者は人臣の【轡銜】なり	ひかん
忠慤能なく、【寒窶】依るなし	かんく
大小無数の【冢塋】を見る	ちようえい
【勵勉】して経書に精通する	きょくべん
【罍子】に珍果を盛ってある	らいし
屑屑として【鎰銖】の利を争う	ししう
農夫が【隴畝】で耕作する。	ろうほ
【櫂歌】が川面に響き渡る	とうか
【崎嶇】たる道が延延と続く	きく
【幘冒】を為りて乃ち死す。	べきぼう
池に遊ぶ【鳧翁】を飽かず眺めていた	ふおう
民は【悚懼】して非を唱えず	じょうく
秘藏の【青瓷】の壺を譲り受けた	せいじ
俊彦を求めて後人を【啓迪】せしめる	けいてき
木の【罌缶】を以て軍を渡す	おうふ
【頽檐】破屋に自適の日々を送る	たいえん
幾条もの【薜蘿】が危巖を匍う	へいら
【枳棘】は鸞鳳の棲む所に非ず	ききょく
王妃が【宝祚】を承継する	ほうそ
【泛泛】たる輩勝つことを得ず	はんぱん
【砌下】に立って梅花を望む	せいか

積弊の【蕩滌】に肺肝を摧く	とうでき
【讒緯】に基づき改元を断行する	しんい
【篡弑】相次ぐ下剋上の世となった	さんし／さんしい
【徼幸】は、性を伐つの斧なり	きょうこう／ぎょうこう
この【澆漓】芸術に情熱の迸出は感じられない	ぎょうり
【粉齋】せられて迹だに留めなかつた	ふんせい
【蟹戸】の連綴する入り江を望む	たんこ
【黝然】たる海が眼前に広がる	ゆうぜん
信徒の多くは【磔罪】を申し渡された	たくざい
悪水沈澱して溝渠を【淤塞】す	おそく
【茅簷】の下に終日寒山と対坐す	ぼうえん
極秘のうちに【籌策】をめぐらす	ちゅうさく
収穫物を【筐筥】に入れた	きょうきょ
初夏の候、【蓑笠】著け齶齧と鋤く	さりゅう
百丈の祥雲【縹繞】す	りょうじょう
徒に日を【玩愒】して縛切るべからず	がんかい
独り【耿介】にして隨わず	こうかい
群鳥【胙余】を幸いに云う	そよ
国の未来を謬らせる【荼毒】となる	とどく
雨露の恩により【萌蘖】が生ずる	ほうげつ／ぼうげつ
【恁麼】に学び来らば道に達せん	いんも／にんま／じんも／じんま
大学で【楔形】文字の研究に携わる	せっけい／けっけい
粉頭鶯声を囀じて【一鵠】の賀曲を唱う	いっせき
名家は苛察にして【繳繞】す	きょうじょう
奸臣の陥窓に陥り【轅駒】と成り果てる	えんく
【謫所】に月を賞す	たくしょ
急に【亢奮】した	こうふん
乱世の【奸雄】の一人だ	かんゆう
心から【冀求】します	ききゅう
【戛戛】と馬蹄の音が響く	かつかつ

【清暉】空に満つ	せいき
杖を曳く【老嫗】に会う	ろうおう
年度別の【彙報】を発行します	いほう
【蚕繭】は有力な産業だった	さんけん
始皇帝は【鷲鳥】のような胸だった	しちょう
【鳬燕】明らかにし難し	ふえん
上に【蔚藍】の天有り、光を垂れて瓊台を抱く	うつらん／いらん
【貞岩】をはがしてみる	けつがん
晩年【奕棋】をこよなき楽しみとした	えっき／えきき
師の遺稿の【刪修】につとめた	さんしゅう
美女のことを【繭眉】という	けんび
【恤兵】金を募る	じゅっぺい
【瀛海】に舟を浮かべる	えいかい
【牝鷄】晨に鳴く	ひんけい
【疇輩】十余人あり	ちゅうはい
家鶏を厭い【野雉】を愛す	やち
衆人【熙熙】として楽しむ	きき
音楽は人を地上の【羈絆】から切り離す	きはん
諸侯を【翕合】する	きゅうごう
【甕天】に沈淪する	おうてん
二人の間に苦しい【砥礪】の日が続いた	しれい
【梟鸞】は翼を交えず	きょうらん
昔は浴衣をつけたまま【盥沐】した	かんもく
読者を【眩暈】の彼方へ誘いこむ	げんうん
演説に【譬類】を多用する	ひるい
【棗栗】を手みやげに出掛けた	そうりつ
人、生まれて六十を【耆】という	き
八十、九十を【耄】という	ぼう
【冤家】の為に射らる	えんか
掌を指して治世の務めを【譚論】す	たんろん

鶴【九臯】に鳴き、声天に聞こゆ	きゅうこう
この一条は【不謬】のものと確信する	ふびゅう
先人の字句を【補綴】した	ほてい／ほてつ
乱世の【梟雄】と称せられた	きょうゆう
【悚然】としてこれを聴いた	しょうぜん
稚子は針を敲いて【釣鉤】を作る	ちようこう
山は遠く【空翠】に在り	くうすい
【寵辱】ともに忘る	ちようじょく
【奄忽】として物に隨いて化す	えんこつ
御恵みを【黔首】までに及ぼし給う	けんしゅ
これを教うるに【灑掃】、応対、進退の節を以てす	さいそう
【曉闇】陸続と鳥の大群が舞いおりる	ぎょうあん
得意気に【綾羅】を着て歩く	りょうら
ひろく【謗言】を伝布する	かげん
【万朶】の山桜に目をうばわれた	ばんだ
【茆茨】は剪らないままであった	ぼうし
【噬犬】は歯を露さず	ぜいけん
【悖戾】の氣銷すれば世途畏るべきを見ず	はいれい
【牖中】に日を窺う	ゆうちゅう
大風吹き起こりて【牖戸】を撲つ	ゆうこ
娥娥たる佳人、【瓊玲】たる佳月	ろうれい
【咳唾】珠を成す	がいだ
【獮】多ければ即ち魚擾る	だつ
【打嚏】人の説く有り	だてい
【杳杳】として天は低し	ようよう
【二堅】に冒される	にじゅ
【城砦】のような造りの館に住む	じょうさい
人の鼻息をうかがう【佞利】の術に長ける	ねいり
【封豕】長蛇を為す	ほうし
礼楽は【斯須】も身を去るべからず	しきゅ

【蘿上】の露何ぞかわき易き	かいじょう
【羆】にあらず虎にあらず	ひ
盜賊起こり 【弥年】定まらず	びねん
天竺国酒を謂いて 【酥】と為す	そ
【螽斯】は則ち百福の由りて興くる所なり	しゅうし
人生は白駒の【郤】を過ぐるが若し	げき
【紐釦】に意匠を凝らした衣装を着た	ちゅうこう
味有る物、【蠹虫】必ず生ず	とちゅう
この【蠹害】を公卿に挙ぐ	とがい
精神生活を【蠹毒】する虞がある	とどく
弟子は【屑然】として対えた	せつぜん
英雄を【播弄】し豪傑を顛倒するところなり	はろう
【噎】に因りて食を廢す	えつ
清を揚げ【津穢】を蕩去す	しわい
酒色没溺の【汚穢】に触れるべからず	おわい／おあい
【黠鼠】機辟に陥り痴蠅蛛網に墮つ	かっそ
大臣たちは【哂笑】し皮肉を言った	しんしょう
今千金の【玉卮】有り、通じてそこ無し	ぎょくし
自ら【牙籌】を執り経営に腐心した	がちゅう
新興勢力の擡頭に【一籌】を輸される	いっちゅう
巧笑【倩】たり、美目盼(へん)たり	せん
【鬱鬱】の天皇は古には未だ有らず	ちようしん
愚臣、【不諱】の朝に処る	ふき
嫡男が父の【偏諱】を継いだ	へんき
震百里を驚かすとも【七鬯】を喪わず	ひちょう
貌下の【眷顧】を蒙る	けんこ
五十年経つと【艾】と言い重要な政務に従う	がい
【魑】は虎の形をした山の神である	ち
冠は【阜絹】を以てこれをつくる	そうけん
春風吹き【枳殼】の花咲く	きこく

【丘壑】の美なる別天地を旅す	きゅうがく／きゅうかく
帝に獻ぐる誄を聴いて堪らず【嗚咽】唏嘘と歎傷す	おえつ
暴悖を【殄熄】し乱賊滅亡す	てんそく
悲嘆至極、涙【潸然】と下る	さんぜん／せんぜん
渓谷を進むこと【阨狭】百里なり	あいきょう
幸いに【案牘】無し、何ぞ酔うを妨げん	あんとく
文は【短雋】を以て人に勝る	たんしゅん
【一臠】の肉を嘗めて味を確かめる	いちれん
【犖犖】として孤立し、形影相弔う	けいけい
【臥榻】の側らを堅固に守る	がとう
【謹飭】なる友に対する	きんちょく
【鰥】なるものはその鰥なるにまかす	かん
互いに【揖謝】を交わして別れた	ゆうしゃ
鼻息呼吸、【頃刻】も風を去る能わず	けいこく／きょうこく
天地震動し日月【蔽虧】す	へいき
十五にして【笄】し、二十にして嫁す	けい
纖纖伐たざれば必ず【妖孽】を成す	ようげつ
先代の【遺孽】の元に旧臣が馳せ参じた	いげつ
道は一原に出で、九門に通じ、【六衢】に散ず	りっく／りくく
彼におとせる【秉】あり、此にのこれる穂あり	へい
民の【秉彝】は君の懿徳なり	へいい
寝穢く眠り呆けて【秉燭】に及ぶ	へいしょく
あそこは【沢齒】の地で住める所でない	たくろ
【鎌府】を散策して頼朝を偲ぶ	れんぶ
食後に【荔枝】を味わった	れいし
【雕琢】して朴に復る	ちょうたく
【忠謇】を納れて以て自ら正す	ちゅうけん
官は【私昵】に及ばず	しじつ
垢塵玉を汚さず、靈鳳【羶】を啄まず	せん
天下の至柔は、天下の至堅を【馳騁】す	ちてい

校外の【岡阜】から町を見渡す	こうふ
いつしか【剥棗】の季節となつた	はくそう／ほくそう
塵肆に童男【卯女】を遣わす	かんじょ
嶄然として【童卯】の時より才を揮っていた	どうかん
私欲に徇い、天命に【乖戾】す	かいれい
【亢龍】悔い有り	こうりょう／こうりゅう
【仄日】暮れ泥み喧噪息む	そくじつ
遁れて胸牆に【仆偃】する	ふえん
【斃仆】を心中に期していた	へいふ
盜賊の首領を【生擒】し民衆の前に晒した	せいきん
宗廟の前に【磬折】して中に入る	けいせつ
既に筆力【扛鼎】の域に達した	こうてい
【不腆】ながら微意を表したい	ふてん
肩摩【轂擊】眼を眩し耳を聾し	こくげき
【勿翦】の歎として遺愛の木を残す	ぶっせん
虎の視るや【眈】たり	たん
ブナ林は国民の【宝匣】である	ほうこう
貌は柔恭にして人と語るに【嬉怡】微笑す	きい
三十輻【一轂】を共にする	いっこく
【翼与】の言は能く説ぶこと無からんか	そんよ
政事乱るるは、即ち【冢宰】の罪なり	ちょうさい
顧客に【諛言】を呈する	ゆげん
背信の徒が各方面に【舛馳】した	せんち
【岑壑】景色、よく遠遊の心を慰む	しんがく
【尨】をして吠えしむるなかれ	ぼう
決行しなければ【噬臍】の悔いとなろう	ぜいせい
異香【冉冉】として春風に薰ず	ぜんぜん
飢寒に陥り【凍餒】に危うし	とうだい／とうたい
忠正なる者は言わず、【邪詣】なる者は日に進む	じやてん
門人まさにこれに【誅】せんとす	るい

その徳を【聿修】す	いっしゅう
坤は土なり、【翼】は風なり	そん
【擣衣】の詩五首を詠む	とうい
荒涼たる【朔塞】の防備につく	さくさい
毒水に【獰鱗】多し	どうりん
友愛の情、篇章の外に【藹然】たり	あいぜん
子墨子の【守圉】余り有り	しゆぎよ
尽忠匡翼し、終に能く【輯穆】す	しゅうぼく
皇太子は【践祚】して皇位を継承した	せんそ
本葬にあたる【斂葬】の儀が行われる	れんそう
忠臣達は【袂接】し肩摩して媧集した	べいせつ
【鑰匣】に入れる	やくこう／やっこう
不用意な発言が【釁端】を啓く結果となった	きんたん
【孤犢】、乳に触れ、驕子、母を罵る	ことく
臥木は【蠹】を成し易し	と
至治の【馨香】、神明に感ず	けいこう
悲惨なる光景、千里に【連亘】す	れんこう
花下、【一禾】を生ず	いっか
【僕傑】にして議論今古に証拠す	しゅんけつ
汝【猷念】を分かちて以て相従いて、各々中を乃の心に設けよ	ゆうねん
出游して田野【桑柘】の間を泛観す	そうしゃ
一瓢を携えて【白髯】の老人が現れた	はくせん
黄禾、【羸馬】を起こたしむ	るいば
小人の交わりは甘きこと【醴】のごとし	れい
朕甚だ【愍焉】たり	びんえん
境内【闌然】として人無きがごとし	げきぜん
古寺の【高甍】が夕靄に映える	こうぼう
硯箱に纖細な【象嵌】を施す	ぞうがん／ぞうかん
塔が【兀然】と聳えている	こつぜん／ごつぜん
道真は讒言により【貶謫】の身となった	へんたく

【弊袴】すら左右に以て賜わずして之を藏す	へいこ
【露簾】清瑩として夜を迎えて滑らかなり	ろてん
精を得て【麿】を忘る	そ
漢籍に【雕題】をつける	ちようだい
その年の干支は【癸亥】である	きがい
惨状を前に【喟然】として嘆息する	きぜん
【簪笏】を百齡に舍（す）つ	しんこつ
君能く過ちを補わば【衰】廃れざらん	こん
芸術家は人生に無数の【琳琅】を見る	りんろう
それは【炳乎】として実在している	へいこ
安心と【怡樂】の満ちた楽天地を目指した	いらく
風は【粉膩】を撲って艶めかしい香りを漂わせた	ふんじ
【只管】打坐は坐禪の真髓とされる	しかん
雲は心無くして以て【岫】を出づ	しゅう
万国を【叶和】す	きょうわ
生涯は【匆忙】の間に勞し終わんぬ	そうぼう
俗累の【羈縛】牢として絶ちがたし	きせつ
吾あに【匏瓜】ならんや	ほうか
大貴族の【擅權】が流血の惨事を呼んだ	せんけん
母猿【黠】にして致すべからず	かつ
善は【戮力】を須要とす	りくりょく
駅舎の【甍瓦】を眺め遣る。	ぼうが
朝夕皇皇として惟民の【餒饉】を憂う	だいきん
【銀鑰】もて香閣を開く	ぎんやく
ただ【諂佞】を行い悦譽を求む	てんねい
遺稿集に【誄文】を寄せる	るいぶん
工事は予定通り【進陟】している	しんちょく
机上に【巻帙】を繙く	かんちつ
【憫諒】の念が募る	びんりょう
【芳卉】として珍重された	ほうき

【佇眄】して去りし人の佛を追う	ちょべん
【衰竜】の袖に隠れる	こんりょう
【鞏固】な意志をもつ必要がある	きょうこ
合図の銀鈴を【鏗錚】と打ち鳴らした	こうそう
山野に禽獸を【豢養】する	かんよう
【廓寥】とした秋の空だ	かくりょう
【嫩芽】は霜の害を受けやすい	どんが
足るを知る者は【藜羹】も膏粱より旨しとする	れいこう
聖母像に【跪拝】する	きはい
多くの【衙門】が建ち並ぶ	がもん
【山巔】から霧が滑り降りてきた	さんてん
【浮萍】の如く妄想が去来する	ふへい
【兜率天】宮さながらの宮殿樓閣であった	とそつてん
仏前の【龕灯】が揺らぐ	がんとう／がんどう
議論は【粗歎】にして誤謬が多い	そろ
窓かに【赧然】として羞じろんだ	たんぜん
野菜が【庖厨】に転がっている	ほうちゅう
【病羸】の身ながら毎日筆を執った	びょうるい
手巾を目に当て【歛歟】するばかりである	ききょ
【闔國】の民が大王の死を悼んだ	こうこく
志士は【溝壑】に在るを忘れず	こうがく
斯道の大家に【贊】を執る	し
松の根元に【箕踞】して海を眺めた	ききょ
【奕奕】たる神女の幻を見た	えきえき
両者の価値観に大きな【罅隙】がある	かげき
【煢然】として独り身の生活を続けた	けいぜん
月々の時評に【椽大】の筆を揮う	てんだい
昔の日記を【篋底】に秘する	きょううてい
【嬋妍】たる美女達が舞い踊った	せんけん
詩的な【頌辭】を手向ける	しょうじ

哲学の研究に【孜孜】として励んだ	しし
情勢について【検覈】を加える	けんかく
珍しいお香を【数炷】焚いて聞き比べた	すうしゅ
諂諛を【臚列】した批評が多い	ろれつ
【埃氣】に満ちた世を遁れる	あいふん
【罪咎】の軽重を量る	ざいきゅう
特使は恰幅のよい【赭髯】の男だった	しゃせん
玉露、【朝暉】に消ゆ	ちょうき
村の【嫗嫗】の昔語りを聞く	おうう
徳政を求めて【噭訴】する	ごうそ
涙ながらに親子は【分袂】した	ぶんべい
【夐然】たる彼方に灯火が見えた	けいぜん
戦力は大国に【匹儔】している	ひつちゅう
博学にして【俊髦】であると賞讃された	しゅんぱう
觀衆に【嗤笑】された身の置き所もない	ししょう
武人の心をも【震懾】させた	しんじょう
【舅姑】に機嫌を窺う	きゅうこ
詩稿に【刪潤】を加える	さんじゅん
氏の【淹博】な学識に驚嘆した	えんぱく
主は【縲緼】のうちに在った	るいせつ
異国風の【瑰麗】な建物が目を引く	かいれい
現下の経済界は【壅塞】の極にある	ようそく
故人の【斌斌】たる人柄が偲ばれる	ひんぴん
一行の【嚮導】と保護とを任とする	きょうどう
納税制度の【釐正】が求められる	りせい
隠れもなき【寧馨兒】である	ねいけいじ
漆黒の【雲鬢】を梳る	うんびん
【孳孳】として学業に勉励する	しし／じじ
【竈煙】に燻された梁に家の歴史を見る	そうえん
法廷で【贏輸】を決する	えいしゅ／えいや

都の中央に【官衙】が集中している	かんが
【安佚】遊冶な生活を送る	あんいつ
【東瀛】の島嶼を歴巡した	とうえい
太孫が【儲位】に即いた	ちよい
【嬖愛】する臣下の言を用いる	へいあい
蔬食【菜羹】と雖も必ず祭る	さいこう
肅肅と【歛簿】は進んだ	ろぼ
嫂の【懷孕】を喜ぶ	かいよう
詩行から【贅胱】を削ぎ落とす	ぜいゆう
【爺娘】妻子に別れを告げる	やじょう
【涓滴】も余さず飲み乾した	けんてき
幽邃の地に【山墅】を営む	さんしょ
成年に達し【婚娶】に至った	こんしゅ
金的を射止め【抃舞】して喜ぶ	べんぶ
【瞿然】としてその場に立ち竦んだ	くぜん
天体の運行を【考覈】する	こうかく
【孱弱】な軀で長途の旅に出る	せんじゃく
其の【敗衄】の因由を闡明する	はいじく
罪人を辺疆の【戍卒】に充てる	じゅそつ
【鶉衣】百結の修行僧に喜捨する	じゅんい
鹹水を【煎熬】して食塩を精製する	せんごう
【羶肉】を日々の糧とした	せんにく
法を定めて【禁遏】を加える	きんあつ
【擊柝】の音が夜道に響いた	げきたく
【凶歉】により徳政を布く	きょうけん
既に【墳塋】の彼方の人である	ふんえい
【潸潸】たる涙が袂を濡らした	さんさん
朋党比周して【擠陷】讒誣を事とする	せいかん
先師の遺稿集に【誣詞】を寄せる	るいし
人を払って【耦語】する	ぐうご

【延袤】万余里に及ぶ	えんぼう
心静かに【一盞】を傾ける	いっさん
開化の【弊竇】を逸早く洞見した	へいとう
【奕葉】相承して今日に至る	えきよう
【杙】を以て檻と為す	よく
【紅裙】を翻して艶やかに舞う	こうくん
救い米が領内の窮民に【贍給】された	せんきゅう
老臣が幼君を【傳育】した	ふいく
今回の【耀壳】では無比の逸品である	ちょうぱい
【大纛】に隨従して本營に趣いた	たいとう／だいとう
金銀【楮幣】が広く流通した	ちょへい
主君の乱行を【諫諍】する	かんそう
室に忿嫉の声無く、【和煦】の色有り	わく
【酒醴】を作るとせば爾はこれ麴蘖なり	しゅれい
所従を伴い遠国の【衙府】に向かう	がふ
海内に【兀立】する強国となった	こつりつ／ごつりつ
精根尽き果てるまで【搏鬪】した	はくとう
四隣【闕】として眠れるがごとし	げき
嶮路を辿り【開啟】せる海水に達した	かいしょう
講師は晨鐘と共に【聾堂】に赴いた	こうどう
【寰中】塞外ともに万歳を謳う	かんちゅう
【疆界】の内側は外国人居留地である	きょうかい
病を得て【偃臥】数旬に亘る	えんが
【簾帯】を携えて庭に向かう	きそう／きしゅう
巧緻な文体で一家を【機杼】する	きちょ
【杳然】として天界高し	ようぜん
【嫩綠】の目にしみる時節となった	どんりょく
瀟洒な欧風家屋が【連甍】している	れんぼう
独酌する毎に【一甕】を尽くした	いちおう
【騁望】弋猟の事を廃す	ていぼう

乱れた胸中は【靄然】として和らいだ	あいぜん
縁に坐して【簷滴】を見る	えんてき
【廟謨】顛倒して四海揺らぐ	びょうぼ
洛中に【肆臺】を構えた	してん
寧ろ【鷄鶩】と争うを為さんか	けいばく
【閑雎】の楽しみを享受する	かんしょ
容易なことで落ちる【賊寨】ではない	ぞくさい
九天の【雨潦】一時に降るかと思われた	うろう
殿には【上廁】の際にも護衛がついた	じょうし
【糧餉】が乏しくなった	りょうじょう
周辺に【陪冢】数基を見る	ばいちょう
【蒼朮】を飲み発汗を促す	そうじゅつ
【鈕釦】に意匠が凝らしてある	ちゅうこう
【殄滅】の宿運を免れなかつた	てんめつ
【鳧脛】短しといえども之をつがば則ち憂えん	ふけい
近世の俳論を【瀏覽】する	りゅうらん
辺境【遐壤】に至るまで巡幸された	かじょう
中納言の【捐館】の事を録した	えんかん
民衆の間から【懽呼】の声があがつた	かんこ
【左袴】蟹文の風を蔑んだ	さじん
久しく各地に【令尹】を務めた	れいいん
無数の【頭顱】の先に凱旋將軍を見た	とうろ
凡そ【誠慤】ならざる者は無かつた	せいかく
雨に煙る【遠巒】を望む	えんらん
【窓櫺】を射る曙光が離床を促す	そうれい
【警柝】が場内に鳴り響いた	けいたく
【嬖臣】の重用が朝政を乱した	へいしん
【僉議】する迄もない事である	せんぎ
新帝即位の後、【奎文】大いに興つた	けいぶん
施薬院建立の【懿旨】が下つた	いし

【鄙醜】野肴を一夕の饉応に充てる	そんじょう
譴責されて【俛首】流涕する	ふしゅ
領主の【裔胄】を名乗る者があった	えいちゅう
【酪漿】と乳醋酒で渴きをいやした	らくしょう
陛下の【軫念】あらせ給う所である	しんねん
深窓に育って【笄年】に及んだ	けいねん
夜半に【瑟瑟】たる松風を聞く	しつしつ
執拗な【推鞠】にあった	すいきく
宦官に【閨奴】を用いる	えんど
軍士沢中に於いて馬草を【鎌取】す	れんしゅ
朝猿【甍棟】に響き、夜水帷薄に声す	ぼうとう
文字と思しき【楔状】の刻印が認められる	けつじょう
【果乎】として天に登るが如し	こうこ
巨大な【丘垤】が点在する	きゅうてつ
村の【翁嫗】を訪ねて昔話を聞いた	おうおう
【甲戌】の歳には都に大火があった	こうじゅつ
側近の【佞諂】を厭惡した	ねいてん
【冕旒】の珠玉が風に揺らぐ	べんりゅう
罰金若しくは【笞刑】に処せられた	ちけい
【覩然】として恥ずるところがない	てんぜん
【駄】たる彼の飛隼其れ飛んで天に昇る	いつ
石窟寺院の【龕像】を礼拝する	がんぞう
王には【夭殤】した王子があった	ようしょう
導師は徐に【磬】を打ち鳴らした	けい
【淫祀】に惑溺する者もあった	いんし
信者たちの多くは【磔殺】された	たくさつ
著名の作を手厳しく【評讐】する	ひょうしつ
地の裂け目から熱水が【迸散】する	ほうさん
当家に代代伝わる【識文】である	しんぶん
苔むした【墓碣】が点在する	ぼけつ

博学にして【雋髦】と熱讚された	しゅんぼう
日麗らかにして碧波【氈】の如し	せん
【籬垣】を廻り表門に到る	りえん
京城の【丐者】を禁ずる布令が出た	かいしゃ
時を移さず残賊を【剿絶】する	そうぜつ
風声鶴唳を以て【勅敵】となす	けいてき
【葦中】の奇は松茸に若くは莫し	しんちゅう／じんちゅう
気風春日の【煦育】するがごとし	くいく
側らに面差し美しい【丫頭】が侍していた	あとう
【村媼】にいっぽい喰わされた	そんおう
【胙肉】を賜って退出した	そにく
【躡足】附耳して注意を促す	じょうそく
万牛【鬱炙】し万甕酒を行う	れんしゃ
【播遷】の止むなきに至る	はせん
太后の還暦を駕して【寿讌】を催す	じゅえん
【刲業】の大事に尽瘁する	そうぎょう
亡国は【筐篋】を富まし府庫を充たす	きょうきょう
微歩して【羅襪】軽塵を生ず	らべつ
日、【下春】を加うるも往来多し	かしよう
【繭紬】の洋傘を差す	けんちゅう
【靄迺】の声が夜の静寂を破る	あいだい／あいない
花の下で【村醪】を酌む	そんろう
牡蠣は【柔腴】にて滋養分多し	じゅうゆ
【濡艾】の馬を好んで馴らした	はいがい
自ら【釣鼈】の客と号した	ちょうごう
双童【簾牀】を昇く	てんしょう
聖に【謨訓】有り、明徵定保す	ぼくん
我が意識は至って【明鬯】であった	めいちょう
贅を凝らした【香匱】を挙領した	こうれん
天資、【彫鐫】の術に巧みであった	ちょうせん

【纛下】に諸侯が馳せ参じた	とうか
堂内に【斎廟】を敷き並べる	しゅうせん
【歯齦】炎に悩まされる	しぎん
【金罍】から美酒を酌む	きんらい
【媒娉】を設けて長女を妻わす	ばいへい
聰明特達、今古を【籠罩】す	ろうとう
【日昃】の労を惜しまない	にっしょく／にっこく
【朏魄】の西海に沈むを見る	ひはく
儼然たる婚姻【娶嫁】の掟があった	しゅか
外圧に【俛伏】を余儀なくされた	ふふく
万事左大臣の【指麾】に随った	しき
【梳盥】の後に寝に就く	そかん
遺族は徒步で【輶車】に付き従う	じしゃ
厳冬に【皴裂】の痛みは極まった	しゅんれつ
英國【駐紮】日本公使を拝命した	ちゅうさつ
朕【眇身】を以て至尊を承く	びょうしん
【銜恤】の思い満ちたり	がんじゅつ／かんじゅつ
【羔雁】を持参して面会を乞う	こうがん
孔子を祭って【胙】を献ずる	そ
隧道掘鑿は領主の【刲意】による	そうい
洛中に宏壯なる【臺肆】を構えた	てんし
兜鉢【貂蟬】共々海の藻屑となつた	ちょうせん／ちょうぜん
盛讌を設け【忱恂】を表す	しんじゅん
【胼胝】の労を憚らず老親を養う	へんち／べんち
【餓殍】野に満ち飢人地に倒る	がひょう
【岡隴】の緩やかな起伏を辿る	こうろう
田圃の【惡莠】を芟除する	あくゆう
【刲造】の大業に尽瘁した	そうぞう
【蓖麻子油】を下剤に使用する	ひましゅ
大濤が【白鬚】を振るって押し寄せる	はくりょう

【羸瘠】の身で諸国遊説に出立した	るいせき
【耨耜】の具を入念に手入れする	どうし
先師の凜烈たる【遺偈】に接する	いげ／ゆいげ
【縉銭】を投げて寄越した	びんせん
【醴泉】を飲み竹の実を食う	れいせん
怪光を放つ【孛星】が天空を掠めた	はいせい
両者の間に【蟻垤】と山岳の差がある	ぎてつ
危梁蘚剥し【漬墨】虫穿す	しほく
一村の老幼【抃踊】して捷利を祝う	べんよう
【柝擊】の音が夜道に響く	たくげき
双鬢に霜を置く【耋翁】であった	てつおう
今猶【残燹】のうちにある	ざんせん
【瓊筵】を開いて花月を翫ぶ	けいえん
先程の【喧闐】が嘘の如くである	けんこう
【龐眉】皓髪の老叟がその人らしかった	ほうび
韋馱天の【輓夫】に人力車を曳かせる	ばんぶ
兵三万を引いて官軍と【鏖戰】した	おうせん
家郷を離れて【戍役】に就く	じゅえき
聊か【捫蝨】のきらいがある	もんしつ
王和議の成らざるを窺かに【悽愴】す	えんゆう
薄饌を供して以て【鄙忧】を表せんとす	ひしん
知情の悖反が生の【裂罅】を生む	れっか
荊榛を抜き【蒙茸】を侵す	もうじょう
【謨猷】を巡らし国家百年の大計とする	ぼゆう
【鼯鼠】さながらの身の軽さであった	ごそ
將軍自ら傷口を【浣滌】した	かんでき
谷中暗水響くこと【滝滶】たり	ろうろう
【廩粟】を発きて以て衆貧に賦つ	りんぞく
山野に自生する【菌蕈】の類を珍重した	きんじん／きんしん
大地が【皺曲】して山岳を造る	しゅうきょく

脳髄中に奇怪な想念が【蟠結】していた	はんけつ／ばんけつ
日ならずして匪賊は【勦殄】された	そうてん
書状の冒頭に【寒暄】を叙する	かんけん
【澹】として水の如き交わりである	たん
【畚土】の基其の高きを成さず	ほんど
転た相【因仍】し其の本を正す莫し	いんじょう
【茜衫】年旧り蓬鬢霜新たなり	せんさん
【勘率】を忘るる無く以て人倫を厚くせよ	きょくそつ
【不辜】の人であることが死後判った	ふこ
【牆垣】を隔てず貧を恥ずることもない	しょうえん
余輩の【蠡測】したる所を笑覧に供する	れいそく
帝都に向かう者日に輻湊し月に【薈萃】す	わいすい
恵沢を【瀛表】に流し仁風を区外に被らす	えいひょう
洞宮儀として以て【嶷峩】たり	ぎょくきゅう
誘われて【貝闕】絳宮の客となる	ぱいけつ
文明開化を妨礙する【屏嶂】となった	へいしょう
【胥吏】風情が口を出す事ではなかった	しょり
【窖中】深く藏するが如く曖にも出さぬ	こうちゅう
熊羆【拿攫】の様を活写し得ている	だかく
女院の御幸には確たる【縦迹】があった	しょうせき
【芸籤】一几をこよなき友とする	うんせん
【巒截】した遺骸が棄ててあつた	れんせつ
【截】するに長鎗を以てす	たく
伏して読み跪きて歎じ五情【惶怛】す	こうだつ
碑史の類を書き散らして【自鬻】する	じいく
魚疾く走りて【梭影】縦横するが如し	さえい
帝の【外舅】が政を擅にした	がいきゅう
大道の【埋晦】せるを悼み悲しむ	いんかい
酒宴【郢曲】酣となり大きに興に入る	えいきょく
陰暗なる【陋巷】に悠悠自適する	ろうこう

先生【莅職】廿年を祝し一文を呈する	りしょく
【玉笄】初めて紫皇の君に侍す	ぎょっけい／ぎょくけい
万象秋氣至り【礎杵】風に入りて清し	ちんしょ
劫盜の患いために【弭息】す	びそく
今は建国の縁由を【麤述】するに止める	そじゅつ
龍頭【鷁首】の舟で伶人が船樂を奏する	げきしゅ／げきす
【嘴喙】の甚だ大なる水禽を豢養せり	しかい
我が【覃耜】を以て載を南畝に俶む	たんし／えんし
【倚門】の望	いもん
叢生する野卉【短矮】なり	たんわい
【羽觴】を飛ばす	うしょう
祖父の言を痛切に【感佩】した	かんぱい
春祺廟より發して遐邇に【鬯浹】す	ちょうしょう
空を仰いで【長嘯】漫歩している	ちょうしょう
弁當に【田麌】を使い彩りを添える	でんぶ／でんぶ
村間に臻るを【壅遏】して之を大壑に注ぐ	ようあつ
北に奔り軍師【摧衄】す	さいじく
【箴諫】の御詫を佩服する	しんかん
【阮籍】青眼	げんせき
【杞梓】連抱にして数尺の朽あるも良工は棄てず	きし
胥吏を使嗾して証拠を【湮滅】せしめる	いんめつ
煢煢として【子立】し、形影相弔す	けつりつ／げつりつ／げつりゅう／けつりゅう
毫も志を【屈撓】することなし	くつとう／くつどう
嫩し樹木を【撓屈】す	とうくつ／どうくつ
四方を【祓禳】し、火災を振除す	ふつじょう
槽櫨の間に【駢死】す	へんし／べんし
御稜威の下に皆【懾服】せざるなし	しょうふく
親故次いで駕を廻らし、【妻孥】未だ閑を出でず	さいど
慘惨として【肺腑】を愁えしむ	はいふ
【刎死】を以て屍諫を進める	ふんし

君父を【弑逆】する	しいぎやく／しぎやく
【間歇】泉に注意する	かんけつ
言葉に毒を塗り、心の無垢なる部分を【麿殺】する	おうさつ
狂飆波を掠ち茅店【隕漬】す	いんかい
孫の手で背中を【搔爬】する	そうは
【恬然】として思うことなし	てんぜん
神経組織が【壞疽】を起こす	えそ
新たな【炸薬】を用いる	さくやく
満城の【飛絮】、軽塵に混ず	ひじよ
携帶用の【引磬】を鳴らす	いんきん／いんけい
用は済んだので【匆匆】と退却した	そうそう
討幕の【綸旨】を発した	りんじ／りんし
【檳榔樹】は瑪雷西亞原産	びんろうじゅ
【淅瀝】と降り頻った霖雨が霽れた	せきれき
【鞭辟】して裏に近づく	べんぺき
昭和六十年は【乙丑】の年	いっちゃん／おっちゃん
社会のありかたを【抒情】詩として認めた	じょじょう
昭和六十一年は【丙寅】の年	へいいん
昭和六十二年は【丁卯】の年	ていぼう
昭和七年は【壬申】の年	じんしん
昭和八年は【癸酉】の年	きゆう
一人淡淡と【薬研】を碾く	やげん
昭和十八年は【癸未】の年	きび
昭和二十一年は【丙戌】の年	へいじゅつ
【頷聯】と頸聯は対句の関係にある	がんれん
昭和五十七は【壬戌】の年	じんじゅつ
都市の【頽廃】を描いた作品	たいはい
一月に及ぶ【侃諤】の議論を終え、漸く結論に至る	かんがく
【衡輶】の陣	こうやく
今後の研究に【俾益】するところが大きい	ひえき

【俯伏】して待して食を取る	ふふく
九重の天に【魂魄】は翕まる	こんぱく
【勁風】牖戸を揺らす	けいふう
持病の【脱肛】に悩まされる	だっこう
饑えを療やすに【諸糜】を以てす	しょび
喉がつまるので【含嗽】する	がんそう
【茉莉】独り立ちて、幽更に佳し	まつり
【宿禰】の姓を与える	すくね
恭しく礼拝して【香奠】を供えた	こうでん
朝に夕に【誦経】する	じゅきょう／ずきょう
思わず【匕箸】を失う	ひちよ
【作務衣】姿のご住職	さむえ
山腹を掘り抜いた隣村への【隧道】がある	すいどう／すいどう
山手線各の各駅名を【諳誦】する	あんしょう／あんじゅ
吾は舜を以て【疣贅】と為す	ゆうぜい
天日のうつりて暗し【蝌蚪】の水	かと
【黄疸】病みには何でも黄色く見える	おうだん
【兌換】紙幣の金札	だかん
【膏粱】の子弟	こうりょう
白磁の如き【腓骨】	ひこつ
玉兎、金鳥を【掩蔽】する能わづ	えんぺい
甕の底に虫が【爬行】している	はこう
【擡頭】してきた新勢力に左袒する	たいとう
息子は【蟻虫】検査と聞いて怖じける	ぎょうちゅう／じょうちゅう
受検者を【熬煎】する難問である	ごうせん
死後に弘宗禪師と【勅謚】される	ちょくし
巡邏に鋭く【誰呵】される	すいか
【奄冉】として暇を過ごす	えんぜん
【痒癆】に悩み苛立つ	ようあ
禍根を【剔除】して末裔を沾わす	てきじょ

反乱分子を【勦除】する	そうじょ
余殃殲くして【襟腑】を保んずる	きんぶ
捕虜を客人のごとく【渥暭】する	あくべん
行歌【野哭】両つながら悲しむに堪へたり	やこく
相手の敵愾心を【煽熾】する	せんし
臣下は【謇謇】として物申す	けんけん
猿猴、【礧石】を抛る	れきせき
目に【焉鳥】を辨せず	えんう
【罔空】の世	ぎょくう
螢火の如く【庭燎】は幽かである	ていりょう
長松【謾謾】として蒼烟を含む	しょくしょく／しゅくしゅく
【奎運】盛んなる時代	けいうん
文章上達の【捷逕】を知る	しょうけい
茶葉の入った【焙籠】を取り出す	はいろいろ／ほいろいろ
過ぐる【隙駟】は停め難し	げきし
色溢れる【瑛瑤】を飾る瓊樓	えいよう
国境にて【峙立】する壁	じりつ
【已往】の諫められざるを悟る	いおう
人倫に【很戾】する	こんれい
【腥穢】恬として蟲を頤う	せいわい／せいえ
【忽遽】として起牀する	そうきょ
刊記も【跋文】も無い古書	ばつぶん
無実の【罹辜】を憂い日日謹む	りこ
饒かな【腴沃】を供給す	ゆよく
玄関前で頑なに【扞禦】する	かんぎょ
聖人を【謗毀】する	ぼうき
【拱木】春蘿漫たり	きょうぼく
花枝を【揅取】せんとして屢廻顧す	かんしゅ
【霓旌】南苑に下る	げいせい
暮雪の【攢巒】を雲上に瞰ろす	さんらん

【乞骸】の書を置く	きつがい
【賦斂】の鞭笞県庭赤し	ふれん
文字鬱律として【蛟蛇】走る	こうだ
身体は【瘦瘁】し、精神は憊懃する	そうすい
【跪居】して謁を賜る	ききよ
先師の【牋翰】を折に触れて読み返す	せんかん
【罷鶩】なりと雖も、また嘗て長者の遺風を側聞す	ひど
【槿域】へ訪ねる	きんいき
【謳吟】下招して、巫陽を遣わす	おうぎん
小鳥来り遊び、【秋蛩】また吟ず	しゅうきょう
英彦の【逞筆】は遒し	ていひつ
【鬱紆】として高岫に陟り、出没して平原を望む	うつう
【蜀魄】啼き孤櫂、巴陵に宿る影は暗し	しょくはく
遠觀すべくして【夔翫】すべからず	せつかん
一声を以て【淆乱】を生む	こうらん
傷口を【洗滌】する	せんでき／せんじょう
雷鳴に人馬【駭愕】する	がいがく
有事の際には欠かせない【肱臂】の品	こうりょ
独り江城に宿して【蠟炬】残く	ろうきょ
秋の【焜黃】景の色を飾る	こんこう
親しいと雖も【夔狎】せず	せっこう
頗る説く新年また【亢陽】ならんと	こうよう
自ら五体【麤戯】した遺骸有り	おうかく
貧しい村には【鵝口瘡】が流行した	がこうそう
【刪述】の難しき書史	さんじゅつ
狡兎のごとく【遁逸】して蹤跡なし	ほいつ
【嚴飭】に務めを果たす	げんちょく
家に遺産無くして、子孫【困匱】す	こんき
行き來する人は【駱駢】として絶えず	らくえき
妄りに容喙して話の【腰膂】を断つ	ようりょ

被問して寒戦し、形氣【呐吃】す	とっきつ
草を食し水を飲むに、【菽粟】を給す	しゅくぞく
四本の【株楹】を構える学堂	しゅえい
鰐魚【潜涵】して瀬を睨む	せんかん
凡人には【咬嚼】し得ない詩文	こうしゃく
饗礼に旨酒無くば、【秕稗】の如く礼は無し	ひはい
大口惡質の【逋税】犯	ほぜい
【隸圉】を召使とする	れいぎよ
見張りの【塹壘】を築く	ざんるい
如今、年世移りて久しく、制法【弛紊】せり	しぶん
屋瓦乱れ飛ぶこと【箭鏃】の如し	せんぞく
軒にかぶさる【梓榆】の葉	しゆ
その山貌はなはだ【奇峭】	きしょう
【渾敦】に突き入らず	こんとん
【掃帚】を用いて塵を掃ける	そうそう／そうしゅう
蘭人の暴横無道なる【秕政】を摘挙す	ひせい
文学【鎔鑄】として能く新ならざること無し	ぞくぞく
【弩箭】を武器とす	どせん
【脂膩】の粉黛を施す	しじ
衣、【県鵠】の如し	けんじゅん
晚冬の山、今に【菁葱】たるを見る	せいそう
雨降り【肥腴】富饒の地と成れり	ひゆ
敵兵の【鎧仗】を剥ぐ	がいじょう
重巖【疊嶂】、天を隠し日を蔽う	じょうじょう
【梅霖】の兎月、纔かに魄を盈たす	ぱいりん
浅学なれば【瓶乳】を信ず	ていにゅう
まずは【驅騁】させて銓衡せよ	くてい
夏草が【菁菁】と生い繁る	せいせい
小国に【西膠】建つ	せいこう
これを悉く【紬繹】して咎愆を求む	ちゅうえき

じっくり【揆度】して結論を出す	きたく
毎日に【旰昃】して寝れる	かんしょく
家事は【晨炊】に始まる	しんすい
【蕭牆】に禍生じて人事を変ず	しょうじょう
今俎上の肉に由り、人の【膾截】に任せせるのみ	かいせつ
威儀【棣棣】として選ぶべからず	ていてい／たいたい
豪華な【牀榻】に臥している	しょうとう
煤けたような色の【欄裙】	らんくん
垢を刮り、【瘢疣】を搜す	はんゆう
【歎歲】の村墟さらに荒惡	けんさい
山辺の湯は【痘癩】に良し	せんしゃく
讒謗の【霰弹】を浴びせる	さんだん
良質の【毫楮】を求める	ごうちょ
苛苛が募り【臀癰】を搔く	でんよう
象刑墨黥の属、【菲履】赭衣にして純せざる有るのみ	ひり
志【伉直】にして雄鷄を冠す	こうちょく
【渾天】に散布された星星	こんてん
組織の【贅瘤】を除く	ぜいりゅう
【游禽】静謐に佇む	ゆうきん
蜘蛛の糸【岩菲】の花をしづりたる	がんぴ
八竜の【蜿蜒】たるに駕し	えんえん
巖峭しくして、嶺【稠疊】す	ちゅうじょう
【晚霽】の富士を見る	ばんせい
犬には【羹献】と曰う	こうけん
狡猾能く人を【欺騙】す	ぎへん
【鶴影】低迷し、帆影は没す	こつえい
【蟠局】として顧みて行かず	けんきょく
【胄臍】が異様に大きい兜	ちゅうせい
または痛撃し、または【詆譏】す	ていき
服虔も亦た後に【瞠乎】たり	どうこ

蘭桂の香と【菱藕】を供す	りょうぐう
骨董品の【估価】を見極める	こか
飲む毎にすなわち【嘔泄】す	おうせつ
傷痕は【臉頰】の左右に見られる	けんきょう
霪霖は倏ち【旭靄】す	きょくせい
その庶人【農穡】に力む	のうしょく
衰老に及び氣力【羸憊】す	るいはい
上下を【感孚】し、その熱心を喚起する	かんぶ
特りわけて【宸遊】に奉じ朝夕を樂します	しんゆう
古今の説話を綴る【譚叢】本	たんそう
山坂の【嶮隘】に差し掛かる	けんあい
山に依りすなわち【市塵】あり	してん
饑餓と溽暑で満身【瘦羸】する	そうるい
今は漂淪憔悴して、江湖の間に【転徙】す	てんし
和平なれば則ち【忿厲】粗暴の気、自然消除す	ふんれい
澄澄として【葭葦】を映す	かい
聖心頗る【虚佇】し、時議氣は奪はれんと欲す	きょちょう
民間伝承が【民譚】化する	みんだん／みんたん
旧来の【榛穢】は醜なるを晒す	しんわい／しんあい
【矮奴】一揆して悖逆せん	わいど
恩愛は【蟬翅】に等し	せんし
漸として嶮岨を【驥越】す	ばくえつ
怪奇に墮す云うと雖も、要は常の【憫默】に勝えたり	びんもく
【花萼】相光き飾り、嚙鳴響を同じうするを悦ぶ	かがく
黙拝【拈香】、いと重重しく	ねんこう
浴し畢わり【犢鼻禪】を著ける	とくびこん
息を呑んで【掣籤】する	せいせん
都絢爛なれば、邑【靡敝】す	びへい
【撥弓】曲矢をもって中る能わず	はっきゅう
捏ち上げだと罵って【擠抑】を企む	せいよく

凱陣を迎う【鸞駕】を昇く	らんが
戒律に【攀拘】せられる	れんこう
世を【欺罔】して世間を騒がす	ぎもう／きもう／ぎぼう
【蝶結】蟻聚にして、水草に依る有らしむ	いけつ
六十頭の【駒犢】を産ます	くとく
書生の【技癢】論量を愛す	ぎよう
駱駝の毛で美しい【呉紹】を作る	ごろ
笑う莫れ農家の【臘酒】渾れるを	ろうしゅ
【棠棣】の華	とうてい
名区に到り、暫く【考槃】す	こうはん
花は【檄羽】に臨んで飛ぶ	げきう
【癰亂】に似た症状を呈して吐瀉が続いた	かくらん
強弩の末【魯縞】に入る能わず	ろこう
歳時【伏臘】、使問絶えず	ふくろう
【鼻湧】をすすり込む	びい／びてい
履に綦し【衿纓】し、以て父母舅姑の所へ適く	きんえい
被髪【侏離】の語を発し、以て駄舌と呼ぶ	しゅり
【戎狄】の間で生活し、農耕に励む	じゅうてき
少年にして疾患無く、路岐に【溘死】す	こうし
【臙膩】で潤した顔を洗滌する	えんじ
それ榮達して【鸞鷟】と成る	らんろ
鳥啼く啄啄と涙す【瀾瀾】と	らんらん
余猶其の【佻巧】なるを悪む	ちょうこう
貪狼秩序に【抑勒】されず	よくろく
羈を捌いて四辺【馳驟】す	ちしゅう
夢幻郷の【蝴蝶】	こちょう
子のこれを来くを知らば、【雜佩】をもってこれに贈らん	ざっぱい
五倍子蟻が寄生して【虫癢】だらけになる	ちゅうえい
不埒に【遽叱】す	きよしつ
【翡翠】翠帳、高堂を飾る	ひい

武帝太初元年、名を大【鴻臚】と更める	こうろ
岩を【鑽鑿】して金を求める	さんさく
殺氣を憑陵して以て相【翦屠】し	せんと
万馬朝に【騰驤】す	とうじょう
寂寞たり天宝の後、園廬にはただ【蒿藜】のみ	こうれい
国彊くして戦わざるは【蟲官】を生ず	しっかん
海上より風雨來り、【掀轟】飛電を雜う	きんごう
咄嗟の【狡詐】で活路を開いた	こうさ
前年【譴謫】に遭い、探歴して邂逅することを得たり	けんたく
五人の【夥伴】と筵席を愉しむ	かはん
性、頗る【奢蕩】なり	しゃとう
其の中【綽約】たる仙子多し	しゃくやく
誰もが国の象徴を【鑽仰】した	さんぎょう／さんごう
心を傾けて【媚附】す	びふ
無辜を【誅翦】する莫れ	ちゅうせん
村は寒く白屋【嬌嬰】を念ず	きょうえい
土地悉く【鹹鹹】し、敵裂して丘澗と成らん	かんろ
【屠沽】の家を離れず	どこ
恒常として【觀閔】多し、我が憂心は去らず	こうびん
性【狷忿】にして、大体を存せず	けんふん／けんぶん
礼無く【讌坐】して叩頭する	えんざ
【帑廩】を豊かに蓄える	どりん
文章詩賦の【点竈】を乞う	てんざん
恭しく【廉恪】な淑女	れんかく
ひとたび【錯愕】し、ひとたび慟哭す	さくがく
【蹤跡】は絶えて知れなかつた	しょうせき
流丸は【甌臾】に止まる	おうゆ
【懦夫】の志を立つを見る	だふ
【抉拾】、既に佽（かな）い弓矢既に調う	けっしゅう
【覲饗】するに時を以てし、爾の祖をこれ思え	きんきょう

都會の喧噪に【忿邑】の意を廻らす	ふんゆう
後繼者を定めて【猊座】を禪讓する	げいざ
欲求は【邃古】以来我々の中に潜む	すいこ
長矛を持して【撃戦】する	りょうせん
博徒【攫客】の類、赦を幸として悪事を成す	かつかく／かくかく
【皓首】の匹夫	こうしゅ
【竟夕】、ついに眠れず	きょうせき
【邇來】行方不明との噂	じらい
今や都は【蓁藪】と成り果てて	しんそう
【榆莢】あい催して数を知らず	ゆきょう
【覲武】を以て威を為す	てきぶ
今臣は亡国の【賤俘】	せんぶ
細草微風の岸、【危檣】独夜の舟	きしょう
心【鞶鞶】として夷らかならず	きょうきょう
蜀紙、【麝煤】に筆媚を添う	じやはい
夙に疾病に罹り、常に【牀蓐】に在り	しょうじょく
高級な【繰糸】機械	そうし
驚濤【洶涌】して、何れの処にか向う	きょうゆう／きょうよう
外の【嫌猜】を受くるなかれ	けんさい
【竽笙】を吹く	うしよう
【閔勉】に遯樂し夜が更ける	びんべん
【濺沫】飛鳥を驚かす	せんまつ
蘿蔔を【炮煮】して食う	ほうしゃ
【觚牘】を秉り、思慮を焦す	ことく
名城を墮壊し、【鋒鏑】を銷かす	ほうてき
【猖狂】妄行して、すなわち大方を踏む	しょうきょう
自らを肆に【舒暢】する	じょちょう
委細頓着なく【鎧鎧】を動かす	ついさく
【耳剽】を口銜し、色を詭り辭を淫にす	じひょう
宵に【瑤緘】附して拝誦する	ようかん

主君の【閨閣】の臣となる	けいこう
矍鑠豁如たり、未だ【衰耄】にあらず	すいぼう／すいもう
炉の中に【麁炭】を入れて火種とする	ふたん
【咄咄】たり俗中の愚	とつとつ
顔を顰めて【慍見】する	おんけん／うんけん
十年を経て漸く【豁悟】する	かつご
始めに疎慢なれば、終わりに【顛蹶】あり	てんけつ
衆人は無益な事だと【嗽噉】と批難した	ごうごう
臣に親狎すること【韋脂】の如し	いし
雁行する【舸艦】城を橦かん	かかん
爾来【闔郡】の宗祀と仰がれし	こうぐん
凶寇済らば伐ちて【黄墟】の塵とならん	こうきょ
礼楽を矜まざれば【觥撻】に処す	こうたつ
【情猴】、色好む	じょうこう
良子は【蹶蹶】たり	けつけつ／けいけい
蔓延る【奸凶】を攘除せん	かんきょう
馬に跨れば月は【娟娟】たり	けんけん／えんえん
南北【正閨】を弁ぜず	せいじゅん
骨肉間の【婚媾】は宜しからず	こんこう
伍して行軍し、【旌麾】は空を蔽う	せいき
【諸蔗】の烟を潤す	しょしょ／しょしゃ
心中【寢寢】たり	ばくばく
嬪に【孱夫】	せんぶ
乱言を雜え、【觴酌】行次を失す	しょうしゃく
これを別つに些些たる【頗僻】有り	はへき
使い古した字彙で【縲闊】する	はんえつ／ほんえつ
東京に出でて【鬢宇】に通う	こうう
苦難あれど【所怙】に依らず	しょこ
宜なり爾の子孫【蟄蟄】たり	ちつちつ
苑地賓客【猥多】なり	わいた

高麗出来の【香盒】に香を焚べる	こうごう
陳謝に言無くして【寇讐】に恨み有りし事	こうしゅう
胸のうちに【憐愍】の情が沁み拡がる	れんびん／れんみん
出火場所は【船艤】であった	せんそう
予は則ち汝を【孥戮】せん	どりく
【螳怒】是れ逞しゅうし、鵝驕不遜なるが若きだに及ばず	とうど
【芬馨】良夜に發し、風に隨いて我堂に漂う	ふんけい
傾陥【猶猾】にして、利に趨りて國を売るの徒なり	かいかつ
【捐軀】の覺悟で臨む	えんく
自家の權柄を【棄擲】する	きてき
余は詩文【笨拙】にして、その髣髴を状するに足らず	ほんせつ
【鄂鄂】たる議論	がくがく
殃い【閻閻】に逮ぶ	りょえん
【縉縉】として愚なるが若く昏の若し	びんびん
雲丹を【撈採】する	ろうさい
内閣の輔弼が国務を【總攬】している	そうらん
公衆に向かって【矇昧】の吹聴をなす	もうまい
【秋柝】沈沈として戸は扃（とぎ）さず	しゅうたく
公務に【齧粉】するを辞せず	せいふん
黄髪【垂髫】共に怡然として楽しむ	すいちょう
壯なれば【楹書】示さん	えいしょ
胸腹に【芥蒂】してこれを割裂せざらんや	かいたい
大奥の雑役に【閼人】を使う	えんじん
左衽【氈裘】塞を犯さず	せんきゅう
禪師を聘して【慶讚】する	けいさん／きょうさん
往年の【蒸溽】に困しむ	じょうじょく
【韶景】現れて下萌ゆ	しょうけい
天下より【懸瀑】怒号せり	けんぱく
【艨衝】十艘を破る	もうしょう
これを放ち四方に【蟻動】す	ぎょうどう

【軽煖】体に足らざるか	けいだん
民衆からは【豺虎】の如く恐れられる	さいこ
斯界の巨擘に【頽頏】する鳳雛である	けっこう／きっこう
檀越と為るより【匹耦】を案じよ	ひつぐう
皓齒【黛鬟】の阿嬢	たいかん
懈怠の心は【作俑】と心得よ	さくよう
鼈、【鴻眇】の想い	こうびょう
【斧劈】は山水画の画法の一つ	ふへき
【酣觴】して詩を賦す	かんしょう
言葉を陳べ、【黥首】して謝す	げいしゅ
【嘔軋】たり暮江の上	おうあつ
【蟠屈】たる大きな老松	ばんくつ／はんくつ
その辞の【鄙俚】を嫌わず	ひり
巷塵を絶した【巒壑】に隠棲する	らんがく
煥然として【縟彩】大廈に有り	じょくさい
鶴髪【髭鬚】を取ることを贖いとす	ししゅ
焉んぞ測らん【塵囂】の外	じんごう
【壅蔽】を開きて人情に達せんと欲す	ようへい
貌下の【訶詰】から遁れられない	かきつ
民【天厲】せざるは和の至りなり	ようれい
恤れんで【孥稚】を雍樹した	どち
普天の下、【寰海】の内	かんかい
【訶梨勒】とはインド原産の植物である	かりろく
未だ芬芳を厭わず、徒に【徙倚】す	しい
淇(き)の水は湯湯として、車の【帷裳】を漸(ひた)しぬ	いしょう
直ちに【驅黓】療法を施す	くばい
すなわち草野にして【倨侮】と曰ん	きよぶ
【復戾】の情が頭を擡げる	ふくれい／ひょくれい
【繆篆】を用いられた旧弊	びゅうてん
病み来りて【鬚鬢】転た蒼浪たり	しゆびん

震天動地の趨勢に皆【蠢蠢】とす	しゅんしゅん
防護盾で身を銃弾から【捍禦】する	かんぎょ
眼【凝眸】して、心沈沈たり	ぎょうぼう
【宿醒】の苦しい意識を辿って考える	しゅくてい
積善輒ち休慶生じ、積悪輒ち【冤尤】生ず	えんゆう
怯え【撼膝】して退く	かんしつ
【蟬鬢】鳳釵慵くして整えず	せんびん
過ぎ去る【旃車】は水の流るるに似たり	せんしゃ
信に中ることなく、以て【詛盟】を破る	そめい
土地【平曠】にして、屋舎儼然たり	へいこう
玄き髪は朱き顔に照り、【睇眄】は光華有り	ていべん
旧臘【闕掖】皚皚たり	けつえき
倫理觀の【根柢】に横たわる	こんてい
公車による【聘請】に謝する	へいせい
猥りに戈をとりて武を【干躉】す	かんとく
人民の【箝制】権を握っている	かんせい／けんせい
誰が為に兇惡を【殲撲】せんか	せんぼく
上下【乖繆】する者は、其の道相得ざればなり	かいびゅう
押捺した【印顆】を確認する	いんか
軽賦薄斂、以て【民氓】を寛す	みんぼう
藕糸孔中【蚊睫】の間にも這入る	ぶんしょう
円かなる【滄瀛】、濤搖蕩たる	そうえい
【聚訟】するは幾何の人	しゅうしょう
風【瀾瀾】として夙に興る	りゅうりゅう
【芒刺】背に在り	ぼうし
天、【烝民】を生ず	じょうみん
拙劣の詩、【詆訶】措く能わず	ていか
昔我が同胞、今や永に【乖別】す	かいべつ
黒曜石のような【瞳睛】	どうせい
不明瞭を【闡繹】して人心を収攬する	せんえき

樓櫓残れる【城址】に游ぶ	じょうし
その悪を陥れ、大司農を【詆劾】す	ていがい
故人の【瑜瑕】並び蔽わざる	ゆか
その徳の【辜辜】たるを知る	こうこう
諸侯【厥角】稽首す	けっかく
湖畔の【僑廬】に稿を起こす	きょうろ
鷺鳥、【咤吶】するが如く翔ぶ	たとつ
陛下の【倡優】を以て遇する	しょうゆう
錦繡の衣を着て【瓊瑤】の帶をした仙女	けいよう
御心を知りたくば之を【睹物】せよ	とぶつ
謝恩の旨を【箋檄】に記す	せんげき
【紫闇】を出でて東に望む	したつ
【顴骨】の高い白鬚の老人	けんこつ／かんこつ
東皋に登りて以て【舒嘯】す	じょしょう
その巨擘は擢んでて【聳峙】する山の如く	しょうじ
白馬は【嚼齧】す黄金の勒	しゃくげつ／しゃくけつ／しゃっけつ
【基址】を堅くして功を目掛ける	きし
【谿壑】から吹き起こる涼風	けいがく
端な【詼諧】は不興を招く	かいかい
穢れを滌い去り心神を【澄瑩】すべし	ちようえい
彼等【鈍瞎漢】は始めて自己の不明を恥ずるであろう	どんかつかん
早朝に境内の塵芥を【籌掃】す	そうそう
万柳、枝【娜娜】たり	だだ
蛮声に犬馬【聳懼】する	しようく
春に至りて【嬪儻】を求むる	ひんれい
定命の隨（まにま）に【薨奄】す	こうえん
【屠狗】を以て事を成す	とく
殊更に立談して密かに公子を【俾倪】する	へいげい
宛転【嵌空】たる隧道	かんくう
緻密たるは善であり、【瑣屑】たるは惡である	させつ

碧毛【氈幄】河曲に遊ぶ	せんあく
寂寞たり天宝の後、【園廬】にはただ蒿藜のみ	えんろ
出典を【鼈頭】に注記する	ごうとう
槐柳【蕭疏】にして郡城を遡る	しょうそ
眉に皺皺を成して【咤叱】せり	たしつ
報道の【詭妄】に踊らされる	きもう／きぼう
【弄璋】の喜び	ろうじょう
筵に【瞑臥】して夢見る	めいが
【醴漿】の氣、人の鼻を逆う	れいじょう
宝墨を払拭すれば【楚愴】生ず	そそう
【颶母】は旅客の船を襲わんとす	ぐば
項羽の人と為り【慄悍】禍賊	ひょうかん
月初の萌芽に【懽懌】す	かんえき
普く【髦彥】は後人を啓迪す	ぼうげん
雷霆擊たば【摧折】し、万鈞圧さば靡滅する	さいせつ
至尊その【縲囚】を釈く	るいしゅう
客来、七月は安舒と雖も八月は【飄疾】と成る	ひょうしつ
我が鋒鏑、汝を【擒賊】せん	きんぞく
身形は煤けた鶉衣で【芬芬】たる臭気を放つ	ふんぶん
悠悠たる【旆旌】の下に宇を御す	はいせい
霧中、先に【洲嶼】無し	しゅうしょ
崎に【呵詰】せず、仁以て諒恕せよ	かこう
春日【暄和】なり	けんわ
その木【攢柯】にして葉なし	さんか
【榦枮】を集めて竈に容れる	こつとつ／こっとつ
怒氣ある者も【飄瓦】は咎めず	ひょうが
【肆掠】すること毋く、獄訟を止めしむ	しりゃく
神徳【巍巍】たり	ぎぎ
【棍徒】この理を擾乱す	こんと
暁日に【宮槐】影西す	きゅうかい

山岳越えて【凹嶮】現る	おうけん
国は諒暗に在り、兵甲を動かさず、是に【偃息】を以て未だ捷さず	えんそく
片言も【拱璧】より崇く、一徳も華袞を踰ゆ	きょうへき
我国を尽く【遐瞰】す	かかん
【歿寿】式はず、身を修めて以てこれを俟つ	ようじゅ
【氛埃】を絶ちて淑郵し、終に其の故都に反らず	ふんあい
惑を縱にして疚しとせず、【肆侈】して違けず	しし
浅薄にして見られやすく【漏泄】して藏する無し	ろうえい／ろうせつ
自ら【鼈腸】の盈たし易きを愧ず	えんちょう
それ高僧と【偕行】して知るべし	かいこう
【鵠淪】として社稷在り	こつりん
【魍魎】の類いは屢出没す	もうみ
房中に切歯【鼻鼾】囂囂として在る	びかん
その穏やかなるは【圭璋】の如し	けいしょう
草茅を【誅鋤】して、以て力耕せんか	ちゅうじょ
親昵して【友于】の如くに遇せらる	ゆうう
涅歎を嫌うの人その【瓠犀】を愛する	こきい
枕元に【香篝】を置く	こうこう
一甲より【纏婿】を為す	れんせい
薔薇の【摘蓄】をする	てきらい
冬温【夏清】、昏定晨省	かせい
右目【篩骨】を骨折し全治三ヶ月となつた	しこつ
坐食すること【繫匏】の如し	けいほう
人に天惡無く、物に【疵虧】無し	しれい
颶風を以て河川【衍溢】す	えんいつ
誅を上りて【靈輶】の輓くを見る	れいじ
【棺槨】を以て壙穴に留む	かんかく
困餒の衆が漸く【飽飫】を得た	ほうよ
故道【堙滅】し瘡痍存す	いんめつ
日【奄藪】として西に邁く	えんあい

天然に胚胎し、物理を格知し、人道を【訓誨】し	くんかい
周室を【夾輔】せよ	きょうほ
君と【娉命】畢わんぬ	へいめい
両間の【茆廬】、亦た言に帰る	ぼうろ
【齷童】にして介然として特立す	しんどう
舞子も来り、【絃妓】も来り	げんぎ
国勢の孤立して【岌岌】たるをも顧みず	きゅうきゅう
【嶠夷】より出づる太陽	ぐうい
四顧して【層巔】より俯すれば、淡然として川谷開く	そうてん
視ること【巒巒】たり	かくかく
夜寒の候、爽籟を聴き【生魄】を見る	せいはく
その臣を【鈞枢】とは言い難し	きんすう
梵学に通じ、【繙訳】すること精審、能く及ぶ者なし	はんやく／ほんやく
放勲すなわち【徂落】せり	そらく
この時少壯みづから【負恃】し、意氣は日と光輝を争ふ	ふじ
衆遂に大いに敗れ、殺傷せらるるもの【衢巷】に満つ	くこう
帝の性、【宋襄】の仁に近きものあり	そうじょう
【雕悍】の将	ちょうかん
永く不朽に伝えて子孫の【炳誠】にそなう	へいかい
草木【槁悴】の時にして搖落す	こうすい
雨中の禁苑を【眺矚】して制に応ず	ちょうしょく
三たびこれを已むるも、【慍色】無し	うんしょく／おんしょく
汝の寒くして【凜慄】たるを救わん	りんりつ
【縹垣】堅牢として万丈なり	りょうえん
一生作すに【慵懶】なり	ようらん
【兵戈】阻絶して江辺に老ゆ	へいか
雨に打たれて【尖峭】の岩石となる	せんしょう
俗世【誑誕】多し	きょうたん
漸く脱獄犯を【拿獲】した	だかく
花は隠として【掖垣】暮る	えきえん

【寧裳】して帯を引き締める	けんしょう
方針を鑑みることなく独り【擅断】する	せんだん
静謐で【敞豁】した大聖堂	しょうかつ
正子、【衾褥】を敷く	きんじょく
地勢の【嶮岨】たるを利して応戦する	けんそ
【誥誓】は五帝に及ばず、盟詛は三王に及ばず	こうせい
扶桑の【暘鳥】出づること暉暉たり	ようう
千村万落【荊杞】を生ず	けいき
【鉄柵】の耆耋	てっかい
【鮫鰐】の淵に踏み入る	こうがく
【茵蓐】を賜い、礼を以て発遣す	いんじょく
衆木は日に【凋槁】す	ちようこう
苜蓿【榴華】近郊に遍し	りゅうか
世間に【諂諛】され、常に嘲罵囲繞す	しょうじょう
不撓【傲兀】の性質である	ごうごつ／ごうこつ
【孤懼】いづこの岸にか様（ぎ）する	ことう
【龜鈕】の金印	きちゅう
一家の【餞筵】を饗けたり	せんえん
【甘汞】は塩化水銀の通称	かんこう
樂人、朝に【誦諫】せしめる	しょうかん
空しく聴く余瀾の鳴ること【澎湃】たるを	はいはい
【矮陋】の者、機慧を知る由なし	わいろう
世俗に拘らず、心【滔蕩】たる	とうとう
足袋の【鈎鉤】をかける	ちゅうこう
一家の【餉口】に窮する	ここう
総攬即ち【瀛寰】を燻す	えいかん
秋の【茱萸】を見る	しゅゆ
これを祀るの歳、風災【熄滅】す	そくめつ
駅を通過する【車輛】	しゃりょう
近くの【鋳金】塗装店に訪れる	ばんきん

蓮心は清苦にして【藕芽】は甜し	ぐうが
【麾鉄】一たび臨めば、凶党氷の如く溶く	きえつ
蛮族侵入して【疆陲】を擾す	きょうすい
【縹縹】として来客多し	ひんぴん
身内の不幸に【嘘唏】する	きよき
方今世俗【奢僭】極まり罔し	しゃせん
祝酒に染まったく【赭顔】が綻ぶ	しゃがん
水の入った【唧筒】で消火する	しょくとう／そくとう
单家の酒筵は、すなわち【觥籌】獄なり	こうちゅう
いづくんぞ【噪噪】たる閑言語を用ゐんや	そうそう
名を馳せた建築家の【胄裔】に遇う	ちゅうえい
鯨、【鯢鮀】を呑む	げいふ
煩惱を脱し、【啓龕】して香一炷	けいがん
窮措大を迎えて【僮僕】とする	どうぼく
牢には【轍下】の駒ども	えんか
閨閣にて【保姆】我が子に誨う	ほぼ
僕が【籃輿】を昇く	らんよ
民物流遷し、【茹菽】足らず	じょしゅく
烽火【岡巒】に被る	こうらん
自筆の本を【装幀】する	そうてい
開闢以来の【凶饉】に見舞われた	きょうきん
【肥胖】の客子が厨を忙しくする	ひはん
風の音铿铿として金の光【忻忻】たり	きんきん
【悃款】として君主に尽くした	こんかん
靈れし鼓の【硼隱】たるを伐ち	ほういん
夏は【簾枕】に寐る	とうちん
医療費が【扣除】される	こうじょ
【手格】を以て鬪技する	しゅかく
車馬の声が【轆轤】として聞こえる	ろくろく
清貧を愉しみ【穿敝】を纏う	せんぺい

【蘚駁】を経行する処、猿啼き燕らかに林に坐す	せんばく
宮闕【旒綴】深し	りゅうてい
世は【晏寧】にして戈要らず	あんねい
公、独り【廷諍】して丹陛を守る	ていそう
王政を贊襄し、王朝の【儔匹】となる	ちゅうひつ
忽忙極まり【碌碌】寐る暇もない	ろくろく
白商に至り、海上は【茫昧】たり	ぼうまい
羊腸の【宛延】たるを瞻たり	えんえん
【苔蘚】生じて石戸を繞る	たいせん
皇女の帳前に【斂衽】す	れんじん
孟嘗君之が為に【於悒】す	おゆう
黍稷【疇隴】に委てらる	ちゅうろう
権力を擅にして民を【轢蹙】す	れきしづく
仁義を以て身を潤し、【牙籤】を以て屋を潤す。	がせん
瘴気に入らずんば【苛殃】なし	かおう
雲上の【磊嵬】たる楼閣	らいかい
慢罵を好み、朝臣を【毀謔】す	きてい
貴人の【饋饌】を執る	きせん
【脛脛】たる者も、惴惴たる者も、同じ人なり	けいけい
霄壤四顧【曠茫】たり	こうぼう
朝暉【晃蕩】たる湖上に沐する	こうとう
江湖に【滯淹】して顯現する能わず	たいえん
屋代に【涇厄】彙まる	いんやく
気が触れて【面疔】を搔く	めんちょう
大洋は【渺瀰】たり	びょうび
身体【隗俄】して忽ち寝入る	かいが
【饑溺】を憂いて糴を乞う	きでき
浩浩【瀚瀚】たるを揆度する能わず	かんかん
仁徳の【炳鑑】となる	けいかん
機任を【虔恪】し、死を守りて道を善くす	けんかく

城上の【烽燧】と相望む	ほうすい
小人敢て我を【掣曳】するにあたらない	せいえい
君蹈海の客と為る、客路誰か【譜悉】せん	あんしつ
十余年来、竟に未だその【藩籬】を窺う能わず	はんり
【杏臉】桃腮の美女	きょうけん
豪眠して【劍匣】を枕とす	けんこう
汚濁した湖に【杙屋】が見られる	よくおく
地は【肥饒】なり、都して以て霸たるべし	ひじょう
祝融に遭わば【脯資】燼滅せり	ほし
【蛙蚓】の争い	あいん
【哽咽】して語る能わず	こうえつ
【嗜慾】を退け、心氣を定む	しょく
老松に【隴客】来集す	ろうかく／ろうきゃく
堤の柳木に【纜舸】す	らんか
本国は決して【富饒】の地ならず	ふじょう／ふうじょう／ふにょう
麋鹿を獲りて【圃囿】に畜う	ほゆう
戦射を教え【堡砦】と為すべし	ほうさい／ほさい
我が堂堂たる鬚眉も、誠に彼の【裙釵】に若かず	くんさい
讐敵相見え、【儼然】として相眡眡す	げんぜん
雨降り地に【奨衍】す	かんえん
燦燦たる陽光、宙は【迴遼】	けいりょう
誄歌を奏して【撤饌】了わる	てっせん
【浦嶼】、漁人の火	ほしょ
米空しくして【芋粥】を烹る	うしゅく
【孺子】の井に入らんとするを見ては惻隱の心あり	じゅし
【栖鶲】の危巢に攀づ	せいこつ
【玉趾】を穢すこと勿れ	ぎょくし
【幽闇】のあなた、遼遠のかしこ	ゆうげき
銃を携えて【游弋】する	ゆうよく
【獻饌】の神事を行う	けんせん

廊下にぐるぐる【徘徊】する	ていかい
咽喉【脣吻】を併却して、什麼生か道わん	しんぶん
【違忤】なるを以て罪に抵たる	いご
空汁に【芋梗】に入る	うこう
兄弟は冤家に似、心中常に【悒怏】たり	ゆうおう
【拇趾】の爪が靭を裂く	ぼし
【鐘磬】を鼓する音を聞く	しょうけい
皓齒【粲爛】として、宜笑絶やさず	さんらん
之れ實に哲人の深慨【幽慷慨】する處のものなり	ゆうこう
この者の【菁莪】能く楽しむなり	せいが
荷台ごと【扛舉】する	こうきょ
鞋を脱ぎ足を収めて【跏趺】して座す	かふ
春来耕田、【沙磧】にあまねし	させき
蠹害は【肘腋】より起ころ	ちゅうえき
【敲朴】を執りもって天下を鞭笞す	こうぼく
【凌駁】たる羸馬鞍に勝へず	りょうきょう
【横痃】で腰のふんばりが利かない	おうげん
【曼頬】皓齒、形夸しく骨佳く	まんきょう
包藏禍心を【繩枉】せらるること少なからず	じょうおう
【俘馘】を並べて勝利を誇る	ふかく
明目【腆顏】、曾ち愧畏すること無し	てんがん
枳棘を殖えて、【椒桂】を翦る	しょうけい
【楮券】を發兌する	ちょけん
竹下に至りて【諷嘯】することやや久し	ふうしょう
天授の子を【疼愛】する	とうあい
門に【糅雜】無く、坐に号呶を闘く	じゅうざつ
【肝脾】為に爛腐す	かんび
店頭の【沽酒】を召使に遣り犒った	こしゅ
軍人皆【裨袴】無し	こんこ
浹旬の【涸旱】に苦しめられた	こかん

神に【幸冀】する	こうき
【渢爛】として其れ目に溢る	かんらん
【跖】の犬堯に吠ゆ	せき
中に異香【芬馥】たる有り、泉石明朗なり	ふんぷく
【灯炷】をかきたてる	とうしゅ
倫道に【乖歪】する不逞の輩	かいわい
君の家督薨じて亜子に【賜謚】す	しし
高句麗も【突厥】も強兵の国である	とっけつ／とくくつ
律を乱す闖入者共に【忿懣】遣る方無い	ふんまん／ふんもん
神仏の靈威に【憑恃】して自らを慰藉する	ひょうじ
雍容【揄揚】して後嗣に著す	ゆよう
激甚の颶風、濁水【浚急】を為す	しゅんきゅう
枸木は必ず将に隠括【蒸矯】を待たんとす	じょうきょう
【郊燎】の礼を修む	こうりょう
犬猿の仲は今や【瑩磨】す仲	えいま
先生の【瑰瓊】の詩は倏忽として人口に膾炙した	かいけい
綠陰の裏に【瓜瓠】の菜園在り	かこ
滄海遙かに望み、【晴眸】を凝らして呻吟す	せいぼう
矜寡を侮らず、【彊禦】を畏れず	きょうぎょ
蔚蔚として満目の【蕪穢】在り	ぶあい／ぶわい
四郊いまだ【寧靖】ならず	ねいせい
漁船は割拵し、燬然として【篝火】有り	こうか
帝より【珥筆】の位を稟ける	じひつ
古人の【糟粕】を嘗める	そうはく
簪を抽き【綸綬】を解く	りんじゅ
葉の落ちること何ぞ【翩翩】たる	へんぺん
臥牀する声を聞きて我が【聊啾】止まず	りょうしゅう
諸呂を誅し、新たに京師に【喋血】す	ちようけつ
【鶴脣】長しと雖もこれを断たばすなわち悲しむ	かくけい
酒色の【腥聞】上に在り	せいぶん

羔の角、我が【腿肚】に牴る	たいと
百隻の【幢艨】、舷舷相摩す	どうもう
庭園は雜草雜木四時【芳芬】を吐く	ほうふん
夏の【紅萼】を餞別とする	こうがく
雜餉を新製の【葦筈】に容れる	いし
簡んで【葦簾】を喫する	くんせん
桃の夭夭たる、その葉【蓁蓁】たり	しんしん
夷歌幾處か【漁樵】より起こる	ぎょしょう
船には【不虞】の備え有り	ふぐ
過去を清算し、【歛迹】して懲む	れんせき
排水溝の【匯集】に巻き込まれた髪の毛	かいしゅう
朽索の六馬を【馭】するが如し	ぎよ
詩画は【不乙】にして両様なり	ふいつ
野人は【暗啞】して欺謾に遭ふ	いんあ
【人迹】稀に、雉兎芻蕘の往きかふ道	じんせき
少時は共【嗤諧】するも、晚歳多くは因循す	ししょう
食麵麺に海老【糉薯】を挟む	しんじょ
手足【胼攣】す其の親	へんれん
銭を論じて【啾唧】すること勿れ	しゅうしょく
【嫩草】、趺坐を承く	どんそう
父は優しく【温藉】な性格である	おんしゃ／うんしゃ
苛政の【孽根】を断つ	げっこん
【虔祇】の念深く請禱す	けんし
土産の品を【罩袱】に包む	とうふく
桑椹【甜脆】にして我を喜ばす	てんぜい
諸国の現況は【寧謐】たり	ねいひつ
【廖廓】として底に無限の淋しみを藏する中世の調子	りょうかく
諸侯を【恐喝】し、以て地を割かんことを求む	きょうかつ
【慇懃】と勤しむ	げんかく
【霈然】として驟雨が来る	はいぜん

【這箇】の消息を瞥見し得たる	しゃこ
下戸一人酒に逃げたる【火燧】哉	こたつ
君臣万年、永く【祚胤】を錫(たま)う	そいん
一丈余りの【鎰石】の花瓶を鑄掛ける	とうせき／ちゅうせき／ちゅうじゃく
善人【燻胥】に遭う	くんしょ
目覚めて【朏明】を見ゆ	ひめい
推敲を重ねて【杼機】する	ちよき
拾遺六冊に著して、来戴【梨棗】に上せんとす	りそう
人間を苦しめる【貪瞋痴】の三毒	とんじんち
惨禍の【焚燼】の香、四陲に遍し	ふんじん
涼風や【檐鈴】撫でてゆくえなし	えんれい
愁な【浣洒】で泥も取れない	かんさい
蝗虫を除き【禾莠】を芟る	かゆう
柳岸の【鶯梭】、巧みに藍を織る	おうさ
宰相を見ゆるに【靴笏】を具せず	かこつ
高林に【霽靄】として雨声簇がる	しょうしょう
夥しい降水量で河川が【積潦】する	せきろう
老いてもなお【椿萱】並び茂る	ちんけん
円形脱毛症の原因の一つとして【禿瘡】がある	とくそう
必死の【丐命】で首の皮一枚繋がった	かいめい
躬ら【羈縛】して都邑を厭う	きく
源覺寺の【蓖蕎】閻魔像	こんにゃく
驟雨に【霑濡】する陋屋	てんじゅ
東征健児尽く、【羌笛】暮吹哀し	きょうてき
江鷗は稍しく馴れ集まり、【蟹叟】はすでに還往す	たんそう
白日すでに【傾仄】す	けいそく
酒後に【哺啜】し、箸を折るも休めず	ほせつ
虎目にして【豕喙】	しかい
冬は【羔裘】し、夏は葛裘するも	こうきゅう
これを封緘するに【膠粘】す	こうでん

忽ち【梏桎】せられて楚囚とならん	こくしつ
この【秉鈞】の諍いは賀賀として息まず	へいきん
間歇泉が烈しく【迸出】する	へいしゅつ／ほうしゅつ
【妍蚩】黑白本態を失ふ	けんし
征矢の飛び交う旌旗【卷舒】の世	けんじょ
【宦情】は元詩情に似ず	かんじょう
心の奥底から本音を【迸發】する	ほうはつ
【痃癖】で腕が上がらない	けんぺき
主に【霖潦】に因る災害であった	りんろう
嘲笑を被り【羞赧】の念に堪えない	しゅうたん
必ず貌下に謁して【謝忱】を述ぶべし	しゃしん
罔固に【憾恚】する	かんい
ただ仰臥して【暎日】する	かいじつ
みな王に【赴愬】せんと欲す	ふそ
鼓吹【戛擊】、声縹渺の間に在るが若し	かつげき
虎を檻中に【羈絏】す	きせつ
今昔【餒斃】目前に在り	だいへい
笠沢の老龜蒙、【蛹臥】して糸自ら裹む	ようが
諸侯に【淵謨】を獻ず	えんぼ
西域の朝貢を【遏絶】す	あつぜつ
【投杼】の疑い	とうちょ
藩史を忠実に【纂輯】した史書	さんしゅう
【戸牖】を鑿ちて以て室となす	こゆう
先生八十、【蔗境】、美なること飴の如し	しゃきょう／しょきょう
釈迦【牟尼】真身の舍利	むに
互いに反駁すること【聾暗】の如く	ろういん
百年【淬厲】して電光開く	さいれい
【春牘】を打ち鳴らす	しょうとく
乱れた詩を【訂譌】する	ていか
六朝時代傑作の【駢文】	べんぶん

土匪誅せんば余孽【肇釁】の緒とならん	ちょうきん
【遺佚】せられて怨みず、阨窮して憫へず	いいいつ
氣も鬱ぐ【氣霾】の空	ふんぱい
点心として【鼈羹】を出した	べっかん／べつかん
代北の寒齋、【堇萍】を擣き奇苞零落して晨星に似たり	きゅうへい
この自然は【覆載】の恵みである	ふうさい
史乘を逐字に繙訳して【鑄喻】する	せんゆ
鐵に【黍稷】を盛る	しょしょく
骨董品の【瓶嘴】に罅がある	へいし
ただ坐して【圜宰】へ憂える	えんさい
【垠崖】は劃として崩豁たり	ぎんがい
荊棘を剪り、【葺牆】を作す	しゅうしょう
【奠菜】して敬虔に默禱する	てんさい
贅沢な居宅を構え、【婢妾】を蓄えている	ひしょう
杖をつく【癱兵】を慰藉する	はいへい
書架からその【縹帙】を選る	ひょうちつ
悠悠然と鑿を研ぐ【垢穢】の衣を着た爺	くえ
富と権力を【矜縱】する	きょうじょう
兄弟【靠幫】して貧困を凌ぐ	こうほう
徒に志を【弭忘】すべからず	びぼう
利に溺れて五倫【悖亂】す	はいらん
雄武は【犖犖】たり不羈の士	らくらく
嫁は【侈靡】を貴ぶ	しび
草芥も惜しんで【芟蕘】する能わず	さんてい
舍生取義の心を以て【佞姦】の吏を黜く	ねいかん
浅学菲才【挈瓶】の智	けつべい／けっぺい／けつぺい
活潑敢為の気象、千度の【蹇躓】に悩まず	けんち
二人の賓客互いを【譏揣】す	きし
狐有り【綏綏】として、彼の淇の梁に在り	すいすい
三足の【鉄鎧】で米の粥を炊く	てっそう

皆才猜を用て駆使し、【砌墳】に専らならず	せいてん
朝廷を【匡翊】し、崇く功名を立つるに暇あらんや	きょうよく
喝食は【斋粥】の時に致す	さいしゅく
京師に旅食し、以て【斗斛】の禄を求めたり	とこく
人馬どもは【銜枚】して進む	かんぱい／がんぱい
【暉暉】として蒼穹に燃え盛る聖火	ようよう
往来【翕忽】、游ぶ者と相樂しむに似たり	きゅうこつ
【枕簟】清涼なり八月の天	ちんてん
法を飾えて師を脩むれば、則ち威徳【翕赫】たり	きゅうかく
傲慢【矜驕】たる惡漢	きょうきょう
【沛乎】として蒼冥に塞がる	はいこ
寵姫【鸞軫】に召す	らんしん
水質調査で川を【沿泝】する	えんそ
いまだ【浹辰】を踰えざる	しょうしん
官軍を【覘伺】する	てんし
愛馬の【貝勒】を取る	ばいろく
虎の【驍悍】勁厲なる質を修むる	ぎょうかん
上国を【蝎蠹】するを目論む	かつと
閨閣の【熦釐】を恤れむ	けいり
駿馬は石磧に放たれ、【蹇驢】はよく堂に至る	けんろ
【臚句】の職に就く	ろこう／ろく
日本の【俚諺】を英語に訳す	りげん
子曰く、【麻冕】は礼なり、今や純にす、儉なり	まべん
毎朝に【讚仏偈】を誦経する	さんぶつげ
文を綴る【蹇跛】の者	けんぱ
他の科学者の説を【剝襲】した疑惑がある	そうしゅう
女人の身には、猶【五礙】有り	ごげ
幼気な【嬌娘】の含羞	きょうじょう
生涯【譴咎】無し	けんきゅう
【貧窶】には倉卒たること有り	ひんく／ひんる

幅巾【縞褐】、楞迦を誦す	しかつ
【椽桷】皆化して龍鳳と為り	てんかく
姦佞【鞅罔】の輩	おうもう
終身両りながら【酸嘶】す	さんせい
我が子の大成を【祈嚮】する	ききょう
波のように起伏している【阜垤】	ふてつ
大木に【蹙縄】を吊るす	しゅくじょう
子を視ること猶【蚤蝨】のごとく	そうしつ
虫蝗稼穡を枯瘁し、【弥亘】すること千里	びこう
緑林白波を坊門にて【邀研】せん	ようしゃく
悪懲を【闇研】して君側を清む	あんしゃく
主君の零落【恫痛】の至り	とうつう／どうつう
皇靈を奉じ、【逼窄】する所に処らしむ	ひっさく／ひょくさく
その【駅站】の事を主司して是を治む	えきたん
【翳薈】有り、必ず謹みてこれを覆索す	えいわい
客、【驪駒】を歌う	りく
天の余瀝まさに悉く【淹漬】す	えんし
主従隔たり【讐釁】生ず	しゅうきん
彼の恪勤に【摯忱】なるを思う	ししん
予を賢人の間に【俎豆】せんと欲す	そとう
【陶猗】の富を以て与した	どうい
【白朮】を探る	びやくじゅつ
善く【翫袖】折腰の舞を為す	ぎょうしゅう
篝火擲ち【薜幄】燃ゆ	へいあく
客の来たるを聴いて【紅妝】を整う	こうしょう／こうそう
【讒佞】の徒は、国の蠭賊なり	ざんねい
流森は【櫺檻】に激す	れいかん
【竦企】して鳥のごとくうずくまる	しょうき
それ【圉絆】の身と雖も餓虎の如し	ぎよはん
斯くの如く【翫彥】なる者なり	ぎょうげん

【俛仰】して身世を悲しむ	ふぎょう
【図讖】を以て光武に説く	としん
【邨巷】歓欣して迎う	そんこう
長江の【河濱】に築く	かこ
俊乂至りて多く、【耆碩】咸く有り	きせき
【縉笏】して朝は日わく	しんこつ
淑女は能く【綰髪】す	わんぱつ
【綏馭】の才なし	すいぎよ
腐儒、百年【麤糲】を食らう	それい
【觜爪】弊れんと欲すと雖も、心力疲れを知らず	しそう
常に商販を通じ、糧食を【貿糴】す	ぼうてき
【皴皺】は老耆に縦横す	しゅんしゅう
懈怠が【髀胝】を生ず	ひち
【鳧舫】に乗りて歌う	ふほう／ふぼう
密勿として【雛雉】を鞠育す	すうち
賢兄小姑哭して【嗚嗚】たり	おお
一家【内郤】して紛乱斯界に及ぶ	ないげき
将相【緝穆】し、未だ一朝に定むべからざるなり	しゅうぼく
鳥合の衆を【綰轂】する鶴の一聲	わんこく
旧勲をたてた【耄耋】と雖も陋見を垂れる	ぼうてつ
鳥の【嚙嚙】たる、伐木の丁丁たる	おうおう
趯趯（てきてき）たる【阜螽】	ふしゅう
巨觥の如き【恬豁】の懷	てんかつ
禪師から【鉢盂】を貰う	はつう
詩文の【郢斧】を請う	えいふ
穆穆たる文王、ああ【緝熙】して敬止す	しゅうき
今年は【孛彗】が見れるらしい	はいすい
蛇蠍の【噬螫】を危惧して退く懦夫	ぜいせき
王莽の世に当りて川瀆【枯竭】す	こけつ
【韋篋】錦囊、綵毫鮮やかなり	いきょう

田圃に【葦艾】相和す	てつがい
帝は会する者全てに【飴漿】を献ず	いしょう
好んで人を【詆訐】しては追い詰める	ていけつ
喧しく【髦鬢】撃壊す	ぼうちょう
渡らんと【艘楫】を両手に握る	そうしゅう
【太簇】は十二律の一つ	たいそう
【蒼旻】も高からず、海も深からず	そうびん
【月暈】、天風ふきて霧開かず	げつうん
【蹲鷗】を羊と為す	そんし
巻耳を采り采るも、【頃筐】に盈たず	けいきょう
先ずは盥沐して【櫛梳】する	しつそ
【鋤犁】を以て草刈る	じょれい／じより
伝聞する所に全くの【訛舛】無し	かせん
芻秣以て【豢圉】を蓄う	かんぎよ
【黃檗】を黄色染料に利用する	おうばく
家郷すでに【盪尽】し、遠近理また斎し	とうじん
愈々【笄冠】の礼をあげる	けいかん
叟叟（しょくしょく）たる【良耜】、ここ南畝より倅む	りょうし
悪人を【糾黜】して国を夷らかにする	きゅうちゅつ
その破竹の勢いを【沮遏】せん	そあつ／しょあつ
【涎蝣】塩に怯える	せんゆう
空に【鳶唳】響けば則ち晴れる	えんれい
【水獺】はかわうそのこと	すいだつ
王座の左に【閹尹】侍る	えんいん
【澆訛】の浮世を嘆む	ぎょうか
【閑澹】に得有り、貪懨に禍有り	かんたん
桑榆に至れば杜は【黝黝】として在る	ゆうゆう
槁木を前に【灑泣】する	さいきゆう
一半の魚蝦、【鶉獺】に属す	ていだつ
弥年【艱蹇】、孺弱餓死するに至る	かんく

【蓼穂】咲く秋の山	りょうすい
戦時の【刲傷】を誇る	そうしよう
その徳を崇び【頌歎】の声が挙がる	しょうたん
飲食を禁じ甚だ【艱屯】す	かんちゅん
徹夜明けで思わず【呵欠】する	かけん
妬婦は冷然として【鼻晒】した	びしん
【碩鼠】、我が麦を食らうことなかれ	せきそ
幹部らが【啜汁】する	せつじゅう
【喟焉】として耒を釗てて歎ず	きえん
蠱惑的な【倩眄】に魅せられる	せんべん
【酣豢】のひと時を暮らす	かんかん
【耿耿】として寐ねられず	こうこう
空いた腹に【艾餅】を放る	がいへい
角灯を提げて【黯湛】を探る	あんたん
頭髪上指し、【目眥】尽く裂く	もくし／もくせい
子の口が【酥酪】で香うを嗅ぎ付けて	そらく
口は開かずただ【頷頤】するのみ	がんい
天稟は適所にて【耿燿】する	こうよう
金銅【花鬘】の輝き	けまん
流れ悪しうして【蓬艾】壯なり	ほうがい
国家安康、国勢【黯澹】にあらず	あんたん
牧児【堯豎】、其の下に薪刈りするに至る	じょうじゅ
賤民にして【乞丐】の徒である	きっかい
兄弟【龜筭】の術に長ず	きさく
【蟾酥】は漢方の強心剤の一つ	せんそ
艱難凌げず思考【龐錯】たり	ほうさく
戈を執って昼夜【徼循】する	きょうじゅん
【耆艾】の言を与る	きがい
【松蕈】は雌松より生ず	しょうじん
東海道の【乞食】行脚に徹する	こつじき

中心【悵惄】たり	えんえん
【惶悚】に任せず	こうしょう
徐に現る【芝艾】の社会格差	しがい
香菇や【香蕈】とは中国でシイタケのこと	こうじん
【俄頃】風は定まりて雲は墨色	がけい
羸兵に【追蹤】する要無し	ついじょう
情を【搢殺】して知を主とす	やくさつ
朝廷綱紀【頽弛】す	たいし
千秋万歳の声、【聒耳】して一日の寿も人に徵なし	かつじ
【鍼艾】を以て身を癒す	しんがい
【蠡實】はネジアヤメの漢名	れいじつ
煙雲【杳靄】の間に出入す	ようあい
少くして書を喜ばず、【劄青】を嗜好す	さっせい／とうせい
隣家より【軋伊】の響きが聞こえる	あつい
【榜笞】もて租賦を督す	ぼうち
【賈衒】の多い市塵	こげん
親の【欠債】を返済する	けんさい
泥で【簪裾】を贊す	しんきよ
国難に【猖獗】の性で為政するべからず	けんあい
これを芟夷し【蕪崇】す	うんしゅう／うんすう
奸計を企む【倅式】	さいじ
水【湍悍】にして、以て平地を行く難く	たんかん
好物の【酙柿】を齧る	りんし
【潸焉】として涙出だす	さんえん
叛乱の【鬨声】を上げる	こうせい
【颯灑】として花落つ	さっさい
尽く【蠹蝕】した古書	としょく
先例に鑑みるに今【匯兌】する時ではない	かいだ／わいだ
衣服を悪しくして美を【黻冕】に致す	ふつべん
『二十二史【劄記】』	さっき／とうき

大壇に【醢醯】満つ	かいけい
【糜鎖】の跡、なお今存す	びさ
【黼座】に御座すは幼子	ふざ／ほざ
順風満帆の業績に思わぬ【咎殃】が生じる	きゅうおう
林木【薈蔚】として、煙雲掩映す	わいうつ／わいい
不合格で【啜泣】し崩れる	てっきゅう／せっきゅう
古びた戸牖は【鴉軋】して煩い	ああつ
【鬱鬯】は百艸の華	うっちょう
生命の流れは【曠劫】より来る	こうごう
かの華胄の【妹倩】は懦弱と聞く	まいせん
諸仏もこの【追責】を隨喜し給う	ついひ
見え透いた【妝幺】を以て才を衒う	しょうよう
我が壺に【醪醴】無し	ろうれい
我が名声は世に【洽浹】す	こうしょう
【縲醪】を觚に酌む	ひょうろう
不當に【鬻壳】することを赦さず	いくばい
【卦筮】を以て世を寧らかにす	かせい
先王の子、民に【聿懷】す	いっかい
民は【芻豢】を食らう	すうかん
従者【怛然】として色を失う	だつぜん
遊蕩【狼恣】の臣	こんし
溘亡を聞いて【輫悼】に勝えず	しんとう
長じて馳馬擊劍の技を喜び、【肄習】して怠らず	いしゅう
卒然として【軼材】の獸に遇う	いつざい
詩歌、【篋笥】に盈つ	きょうし
初詣に【揄袂】する	とうべい／ゆべい
濁穢は【阨巷】より出づ	あいこう
夜光の【荊璞】を剖くに似る	けいはく
祖母の宅にて【賽饌】を御す	さいせん
三度の【賺騙】、由無し事	たんへん

【鬱擎】憂う枕戈待旦の兵	きんげつ
【暈縹】の錦の茵を重ねて着座した	うんげん
阨巷に【飄泛】とする	ひょうはん
【藪纏】の屏風	ろうけち／ろうけつ
公室は豊碑になぞらえ、三家は【桓楹】になぞらう	かんえい
碌に仕事もせずに【喋囁】する輩	ちょうしょう
【瞿麦】は秋の七草の一つ	くばく
【籀篆】の書体を学ぶ	ちゅうてん
連累の【疵釁】を憂う	しきん
人外毒手に困頓【窮阨】す	きゅうやく
一世は【飄塵】の若し	ひょうじん
風俗【苟偷】にして、辺備廢弛す	こうとう
泰壇い於いて【燔柴】して天を祭るなり	はんさい
【薜蔓】は壁を遮るに任せ、蓮茎は臥して盆に枕す	へいまん
公の声音を聞かば、【熙怡】悦懌す	きい
鴛鴦の衾に【愆釁】を生ず	けんきん
児輩、僕に【繞膝】して相悦ぶ	じょうしつ
地球の【坤垠】を徒で移動する	こんぎん
仏前で【偈頌】を唱える	げじゅ／げしょう
【贊敬】束脩を納めて門に訪れる	しけい
【涌湍】たる瀑泉は行雲を搖るがす	ようたん
【誅讐】を作り、以て懿德を昭らかにする	るいさん
一時の功を【偷取】してその後を顧みず	とうしゅ
嗣子として【贅婿】する事を許可される	ぜいせい
それ日月星辰は、民の【瞻仰】する所なり	せんぎょう／せんごう
潦水を【坡塘】に灌ぐ	はとう
雌雄【績繙】として日へ発つ	ひんぱん
中医学では鼻出血を【鼻衄】と呼ぶ	びじく
【齧米】とは菱擬の漢名である	せいまい
自ら【銜鬻】し、人に斟酌を頼む	げんいく

生前に【偷盜】を重ねて地獄に墮つ	ちゅうとう／とうとう
太古の【瓷器】を発見する	じき
先生の諸作を【繙覈】して参考にする	はんかく
威儀に淑しくして、【誨猷】過たず	かいゆう
小花を傘状に【攢簇】す	さんそう
一点に【倚藉】すれば崩落の種	いしゃ
豪雨が【甃砌】を削る	しゅうせい
困乏を【賑贍】す	しんせん
この荒凶ぶりに【饑餒】を懼れる	きだい
その男は【襯衫】を普段着とする	らんさん
天子に仕える【帝傅】	ていふ
童は無邪気に【餉啜】す	ほせつ
西の書肆を【藐玩】し、東の書肆を覇領する	びょうがん
のさばる【贓蠹】を討つ	ぞうと
自ら【矜伐】して君父に求めず	きょうばつ
春光の変化は【擲梭】の如く	てきさ
風雲長く為に【儲胥】を護る	ちょしょ
【衰職】が統治する地域	こんしょく
靈験灼な【嵩岫】にて修行する	すうしゅう
塵里端直にして、【甍宇】齊平なり	ぼうう
雷霆を聞いて、鳴弦【暫輶】す	ざんてつ
【莞簾】無きを愧じ、藁席を席く	かんてん
自然を【戡殄】する程の環境被害	かんてん
【蟹胥】を好む物好きな男	かいしょ
日月互いを【齧噬】す	げつぜい
紅顔【涅歎】の巾幘	でっし／ねっし
【僉謀】の場を茲に設けよう	せんぼう
【甕牖】の子らを恤れみて閑せず	おうゆう
農夫は【輶耕】して容与す	てっこう
【簷楹】星斗を掛け、枕席風水を響かしむ	えんえい

孤独の【瀬潭】に沈吟す	しゅんたん
十有二山を封じ、【瀬川】す	しゅんせん
【胥蠹】の罪を暴く	しょと
半空の【赤幟】は霞光を耀かす	せきし
賓客食するときは則ち王の【胙俎】を徹す	そそ
人は【鯢桓】の審を知らず	げいかん
何ぞ能く【来茲】を待たん	らいじ
柔和【忍辱】のかたちを作し、慈悲を先となす	にんにく
【袗衣】を被り、琴を鼓す	しんい
狡猾不道、大臣を【誣愬】す者	ふそ
壁に【凭肩】して転寝している	ひょうけん
【勍勍】と煮え滾る市場	けいけい
華胄の巖かな【簽押】が羅列する	せんおう
天下の【禍篡】は人寰の疎慢に生ず	かさん
彼【胝肩】繭足、以て升合の利を求む	ちけん
森風暴雨總て至り、【藜莠】蓬蒿並び興る	れいゆう
土工の【搏埴】に刮目す	はくしょく
【誣譖】せられて遐く謫せらるるに遭う	ふしん
諸生親ら【畚築】を執り、土石竹木を搬運す	ほんちく
春光射す【苔砌】の道	たいせい
首肯【拱揖】して謝す	きょうゆう
祖父は【餧麵】を啜る	うんめん
六十有余の【老嫗】、身の丈抜群にして	ろうう
子孫【孳息】し、今千を以て計う	じそく
京都の【閨尹】	かんいん
【岑蔚】に棲む珍生物	しんうつ／しんい
金翅の【峨鬢】、暮雲に愁う	がけい
隸人【溷廁】を涅（ふさ）ぐ	こんし
国中を【存恤】して政教を修む	そんじゅつ
笑話を約四十篇【撰輯】する	せんしゅう

【僕秀】なる当代の碩学を招聘した	しゅんしゅう
【夾纈】染が施された屏風	きょうけち
賃屋、【陰】にして湫やかなり	あい
野犬を【撻笞】して追い払う	たっち
輝煥【斌蔚】、辞義觀るべし	ひんうつ
舞女【趁節】して体自ら軽し	ちんせつ
堰とめて筏ひたせり【枸杞】の雨	くこ／こうき
結婚式の【柬請】を送る	かんせい
人と【諍論】を好むことなけれ	じょうろん／そうろん
翠髪【趙瘦】の皇后	ちょうそう
丘に【石碣】建つ	せっけつ
貴人【簪纓】を抛つ	しんえい
源流【泓涵】として流れる	おうかん
州人家家、坐して【嵐岫】に対す	らんしゅう
【眩泯】として陽を睨む	げんべん／げんびん
衆心【塵涓】の如く弄し	じんけん
鬢靚にして既に【岐嶷】の情を垣間見た	きぎょく
【脩袂】の裏に手を入れて弄る	しゅうべい
忽にして舟は【杳茫】として涯なき大海の上に出でぬ	ようぼう
主人の帰りに【跂踵】する犬	きしょう
妾樞の木に【辜磔】される	こたく
自由の【牙纛】を樹て	がとう
資産【饒贍】なり	じょうせん
【脩袖】を翳して延佇す	しゅうしゅう
直縄なれば則ち恩旧を【虧喪】し	きそう
善く馬を御する者は【銜勒】を正し、轡策を齊う	かんろく／がんろく
その【耆叟】は矍鑠たり	きそう
【磔禳】を俗習としていた	たくじょう
【粵犬】雪に吠ゆ	えつけん
【麼虫】の這う漏屋	まちゅう

糗糒 (きゅうび) 【脯脩】を貯えて帝に供す	ほしゅう
【薜荔】の落蕊を貫く	へいれい
靄然として在る【茨棘】の莊	しきょく
高きに登り首を回らせば【坡壘】隔たる	はろう
我が子の為にと何一つ【恪惜】せず	りんせき／りんしゃく／りんじゃく
【栖鴉】、眈眈として死屍を狙う	せいあ
蜥蜴は【跂跂】脈脈として壁に縁る	きき
【貪姪】極まる荒耽の臣	たんいん
宛ら【嫗煦】の如く燮理す	うく／おうく
罪の是非を【莅決】す	りけつ
辺鄙を【蚩眩】す	しげん
瘴氣を放つ【岫幌】を鎖す	しゅうこう
崑崙に【縫罅】無し	ほうか
吾【恂恂】として起ちて、その缶を視る	じゅんじゅん
升降上下、周還【裼襲】は、礼の文なり	せきしゅう
樽前に【慷慨】し誰が為にか舞はん	こうがい
その青銅器には【饕餮】が刻まれている	てつとう
事多聞に及ぶことを恐れて【懾憚】する	しょうたん
慘き【脯醢】の刑	ほかい
流れに找し【鳬鴨】乱れる	ふおう
颶風来り、【掀掀】たる巖	きんきん
子、【迪哲】を以て政を称える	てきてつ
各地の【雋乂】集まる饗堂	しゅんがい
【罂粟】殼は鎮咳等に用いられる	おうぞく
冬木立に群れる【寒鴉】の声	かんあ
【汰侈】甚だしきは、身の災いなり	たし／たいし
自らを愧じ、【櫟櫟】にして器に非ず	れきちょ
長弓を構えて【雉兎】を逐う	ちと
【嫩蕊】、商量して細細に開け	どんずい
二樽の【罍罍】を積む	らいおう

【阜莢】とはサイカチのことである	そうきょう
憤ること【湍滻】の声の如し	たんろう
【鹿寨】を張り巡らす	ろくさい
羹が尽きたと詐り【櫟釜】する	ろうふ／れきふ
【辱餓】無き此の国	ひょうが
富者に【佞諛】せず、貧者を救恤する	ねいゆ
一撮【鎚錘】の水	しそい
【滂湃】たる濁流に呑まれる	ほうはい／ぼうはい
飛ぶ【駄隼】は天に至る	いつじゅん
過失を認めて【瀝忱】した	れきしん
【荼蓼】は朽ち、黍稷が茂る	とりよう
自ら【粹掌】を課して鞭打つ	さいしょう
【旻天】に玄鳥を見る	びんてん
手紙に【惻怛】の意を綴る	そくだつ
土塊炸裂して【澆灌】し職田と為す	ぎょうかん
斜雨雪庇を【滌溉】す	できがい
湛然たる【碧潭】に橋梁を架す	へきたん
【祁祁】たる幽歌（ひんか）に傷む	きき
猛獸眈眈と【叢薈】に伏す	そうわい
天の【牖民】は壠の如く篋の如く	ゆうみん
曙光射し丁男【犁鋤】に揮う	りじょ
取り付く【疽腫】を剔刲す	そしょう
少彦名神の申し子、その【癱疾】の呪縛を解く	はいしつ
この雨は神からの【矜恤】か	きょうじゅつ
釜を洗いて【黎祁】を煮る	れいき
御前に【祗候】して拝顔の榮に浴す	しこう
君子の徳を脩むるは【笄卯】に始まる	けいかん
茱萸の樹が【簇生】する	ぞくせい／そうせい
旧態依然として有る因習を【簸却】する	はきゃく
躍如として文化革命に【翊贊】した	よくさん

燁燁たる旻天、【耨耕】に精励す	どうこう
矯激【噪聒】の語を談ず	そうかつ
駿駿としてその疆を【聿越】す	いつえつ
斜光に照る【蜀葵】の絳い花	しょうき／しょくき
君子の肺腑を【臆揣】する能わず	おくし
令尹の【縱曳】の言に従わず	しょうゆ／しょうよう
文章を【芟正】して潤色する	さんせい
候鳥鳴く【荀柳】の林	ほうく
奸臣に謀り財利を【辜較】せん	ここう／こかく
雪消して現る【梵砌】駘蕩なるかな	ぼんぜい
遺文を【綴緝】して永く世に貽す	ていしゅう
【蝴蝶】とはニナのこと	らら／から
混混【汨汨】として、濁れども徐に清む	こつこつ
【什麼】の処にか去る	じゅうま
双袖に【隣種】として涙墜つ	りょうしょう／ろうしょう／ろうしゅ
【闖闖】として魚は萍に隠る	ちんちん
禄山の反するに当り、【哮噬】前無し	こうせい
芸閣にて独り【懊恨】して夜半に至る	おうこん
煤だらけの【堡寨】址	ほうさい／ほさい
隘路に【城堡】を築く	じょうほう／じょうほ
固着した【垢漬】を滌除する	こうし
災火まさに起こり、民人を【滌盪】せんとす	できとう／てきとう
畿内とて奸惡は【蠹居】棊處の如く在る	ときよ
一編の【蠹簡】を懷く	とかん
獺祭魚の如し、あるいは【蠹魚】の如し	ときよ
浩瀚な詩書を【書蠹】に説く	しょと
愛を銛いて鳩毒を抱き、腹にも【蠹毒】を懷く	こどく
兵燹の犠牲者が安らぐ【丘隣】の地	きゅうろう
老爺の菜圃【麦隣】は菁菁と茂る	ばくろう
茅苦一月、【隣上】に宿す	ろうじょう

糟糠の妻なればこそ能く【娟雅】なるぞ	けんが／えんが
【便娟】たる躊躇は觀衆を蠱す	べんえん／べんけん
憤懣遣る方無く、我が胸膈は【噎鬱】たり	えつうつ
孫の【穢行】を鄙しむ	わいこう／あいこう
阿諛追従は【醜穢】と思え	しゅうわい
端倪すべからざる【黠兒】と一手指す	かつじ
その情固より【狡黠】にして、その状頗る猖獗なり	こうかつ
彼の【剽疾】なる伎倆は鷺梭の如し	ひょうしつ
その子の俊邁にして【軽剽】なるを見る	けいひょう
千鎰の国帑を【剽掠】せんと欲す	ひょうりやく
名論卓説を窃んで【剽賊】を働く	ひょうぞく
この山道は【剽盜】が罷り通る悪所だ	ひょうとう
蠹動する国蠹を【剿滅】せん	そうめつ
入内雀が稻を食らうと雖もそれを【勦滅】するなけれ	そうめつ
征伐するに、枝葉に拘泥せず根柢を【勦絶】せよ	そうぜつ
【勦説】するなけれ、雷同するなけれ	そうせつ
國歩艱難を極め、倍日并行して【運籌】す	うんちゅう
廁上に孑然として【籌略】を運らす	ちゅうりやく
扱、この迺公に乃が【氣魄】を示せ	きはく
惟れ一月の壬辰、【死魄】に旁（ちか）し	しさく
顔を披き争うて【倩倩】たり	せんせん
【齧髪】にして師資相承の器を持つ	しんちょう
愛い【髪髮】の娘、孝悌を為す	ちょうはつ
それは蛇蝎の如く【諱忌】されている	きき
君に誣言なし、民に【諱言】なし	きげん
【匕首】を執りて公衙を劫かす	ひしゅ
【顧眄】すれば光彩を遺す	こべん
彥弱の子に【眷眄】の愛を予える	けんべん
【一眄】して一舉手一投足を見逃さず	いちべん
【簞門】閨竇の人、蓬戸甕牖の人	ひとつもん

遏雲の曲を聴き、【眷眷】として郷愁に耽る	けんけん
紅極まって【緑礬】の輝きを閃かす	りょくばん
【眷想】すれば斯学炳として易し	けんそう
侃侃諤諤たる下ancockの諫諍に対し長頸【鳥喙】の臣が君に左袒する	うかい
鳥獸戯画などの【鳴呼】絵が保管されている	おこ
左輔【右弼】兢業として万機に臨む	ゆうひつ／うひつ
恬然として觴詠し、【雋永】の詞と師は曰く	せんえい／しゅんえい
螽斯の羽、【揖揖】たり	しゅうしゅう
人間都に輻輳し、以て【紜紜】として旁午す	うんうん
饕戾の奸を【庇蔭】したことによる帮助罪で縲縲の辱めを受ける	ひいん
【饕戾】の蛮族、大賈の財を剽掠せん	とうれい
親戚を封建し、もって周を【蕃屏】す	はんぺい
晩年【竺学】研究に携わる	じくがく
宸襟は憐憒としてこの【孽牙】を憂える	げつが
【孽子】は貧賤、甥姪は富貴	げっし
憲法は必ず【秉公】して国の為にすべし	へいこう
一家の【權秉】に圧されて癪に障る	けんぺい
羈寓の【椅几】に撓垂れ掛る	いき
街は【卉然】として殷賑を極める	きぜん
鼎臣は文を以て主君に【謗諫】する	けっかん
【羶血】飽くまで膏せん	せんけつ
野豊かなれば百物【殷阜】たり	いんぶ
その謬説を悉皆【剽剥】して匡しくする	ひょうはく
萱堂【丐子】に恵む	かいし
日に群行し、市に【丐取】して嗿（あ）かず	かいしゅ
その妃嬪を【丕子】の傳育の任に置く	ひし
忠臣我が【丕基】を弼く	ひき
天下の壯觀にして、王者の【丕業】なり	ひぎょう
【丕顯】なる皇祖考の遺訓を明徵にす	ひけん
尺一の文より【右丞相】の任に就く	うじょうしょう／うしょうじょう

玉簾の内に【卯童】坐す	かんどう
肇國より已に六十余年、天下【乂寧】なり	がいねい
操觚界の【俊乂】に聘問の礼を修める	しゅんがい
【頃之】して客、予と対局せんと謂う	けいし
謨訓に【乖違】する謬見を垂れる	かいい
天に【乖背】し社稷に寇なす	かいはい
官吏ら、此処に【于役】するなりという	うえき
采女の丁ら、頻頻【于帰】す	うき
病勢が次第に【亢進】する	こうしん
紛諍は【亢傲】せらるる心より起こる	こうごう
この説が私が【仄聞】したところである	そくぶん
寝つけず席の上を【反仄】する	はんそく
この詩は【仄韻】を踏んでいる	そくいん
平声と【仄声】を交互に置く	そくせい
【虧芥】を疎かにすれば賊子となる	たいかい
【穎慧】神の若きも、僅かに齠齧に至るのみ	えいけい
宮中の檻を【黝堊】にす	ゆうあく
瓦屋を【赭堊】にするを許さず	しゃあく
醴を陳ねて【悴顔】を発く	すいがん
世俗の説を為す者曰く、堯舜は【擅讓】すと	ぜんじょう／せんじょう
姪風に【很忤】して匱乏を選ぶ	こんご
世人の【忤逆】を受く	ごぎやく
善く【磬控】し、善く縦送せよ	けいこう
玉石混淆の属吏、正邪【雜糅】の廟宇	ざつじゅう
壯士毎に【角觝】を好む	かくてい
一枕【黒甜】の余	こくてん
明朗にして【愿朴】なる者、この労苦を厭わず	げんぼく
大塊群生稟け、【洪鈞】万類を陶す	こうきん
檄文を読み、【轂下】へ馳せ参じた	こっか／こくか
絶讚【推轂】して枢要の職と為さしめる	すいこく

巧緻の略を帷幄に【周匝】せん	しゅうそう
炊爨の暇あらず、【掣挈】として東下す	けつけつ
膂力を縦にして石巖を【掣起】す	けっき
国事多端、【官銜】夙に起き遅く臥す	かんがん
厩舎で【馬銜】を整える	ばかん
胄子の【蚤夭】、その巫医を聴さず	そうよう
河水清くかつ【漣猗】たり	れんい
官海已に【柔毳】の如く衰憊したり	じゅうぜい
風は【瀉莅】として簷鐸を盪かす	りゅうり
刪潤を要する【舛駁】な詩稿だ	せんばく
無道を為して社稷を溺らし、【井竈】を汚す	せいそう
咎を悔いて其の譴黜に【自歎】す	じけん
乾徳孔だ【照懲】にす	しょうぼう
危嶺其の上に【屹屹】として挺立す	きつきつ
怡怡として親長に奉じ、敢えて【驕易】を生ぜず	きょうい
太祖の為人は【佻易】にして威重無し	ちょうい
之を【竊易】して堅白同異の弁と為す	ざんえき
沖寔【勿罔】として隠見せる嶼なり	ぶつもう
靈泉に浴して【沈痼】を養めん	ちんあ
駘蕩たる春光に【拘櫓】の花を見えたり	くきつ
主客相搏ちて山川【震眩】す	しんげん
要津に【商估】薈萃して洶洶たり	しょうこ
【碧梧】棲み老ゆ鳳凰の枝	へきご
心の貞確を【蒼昊】に誓う	そうこう
太后の【嬖倖】が事を用う	へいこう
彼等に【倭寇】の鎮撫を囑した	わこう
草樹【溷淆】し、枝格相交わる	こんこう
幽壑の【潜蛟】を舞わしむ	せんこう
急湍の如し【諠囂】から遁れる	けんごう
齡既に酣と雖も其の【花臉】暉けり	かけん

一人【蹕】を犯す、罰金に当たる	ひつ
【立縷】の冠を差した内裏雛	りゅうえい
璧を完うして【趙】に帰らん	ちょう
長袖善く舞い、多錢善く【賈】す	こ
【暘谷】より升り、虞淵に落つ	ようこく
【便辟】を友とするは損なり	べんぺき／べんへき
情【紆軫】して、其れ何くか託せん	うしん
【檀欒】空曲に映じ、青翠漣猗に漾う	だんらん
法吏多くは少年たり、【磨淬】して角圭を出だす	まさい
【臀】株木に困しむ	でん
羸兵皆戻を【瀉】して潰走す	しゃ
車馬から【攘臂】して出でて衆を悦ばす	じょうひ
【告訐】を以て誠直と為し、同徳を以て朋党と為す	こっけつ／こうけつ
社稷【墟】となる	きよ
【疇曩】に殉じた者に謚する	ちゅうのう／ちゅうどう
細鱗は釣綸を為すべし、【蜚禽】は弋繳を為すべし	ひきん
玄鶴の【觜翅】儀たり	しし
放飯する母れ、【流歎】する母れ	りゅうせつ
【苑囿】以て禽獸を擾らす	えんゆう
姦なる【檻牢】を計いて禁廷に告ぐ	かんせい
洪濤【瀾汗】として万里際無し	らんかん
【榜掠】すること千余、痛みに勝えずして自ら誣服す	ぼうりょう／ぼうりやく
【金榜】に名を掛く	きんぼう
胸中【悸悸】として周章狼狽する	きき
羽檄【旁午】して寧日なし	ぼうご
日月の【旆旌】を建つ	せんせい
灼灼【暉暉】たり下春の刻	きき
虎【嵎】を負う	ぐう
【槍杆】毀れ讐敵と駢死す	そうかん
父兄【殲殪】すば子弟群起す	せんえい

檸檬【一顆】を手にする	いっか
稟性虛弱にして、【嬰孩】以来連りに篤痼に罹る	えいがい
花は上苑に明らかにして、軽軒【九陌】の塵に馳す	きゅうはく
その身【老懶】にして久しく鉛槧の事をせず	ろうらん
冽風栗烈として【鴛衾】重し	えんきん
扈從【鮫函】を帶ぶ	こうかん
府に赴くを【餞】す	せん
皇の赫戯たるに【陟陞】す	ちょくしょう
婦人は【繡珍】の吾妻袋を提げる	しゅちん／しちん／しちん
千金の子【堂陲】に坐せず	どうすい
箸を控えて【餉饋】を待つ	しょうき
積氷の【礧礧】たるを行く	がいがい
耆婆【扁鵲】の薬	へんじやく
【乾鵲】噪ぎて行人至る	かんじやく
超然として萃を抜く【英絢】の姿	えいけん
権争は天の【恫喝】以て鎮む	どうかつ
その者祚の【胤裔】と称せられる	いんえい
庭中に異香を【燠】じ、虚空に花が降る	くん
鳶肩【偃背】の姿容	うはい
窖中に土窓を為して【蛹化】する	ようか
一掬の雪を以て【霧瘴】を消さん	むしょう
高熱で頻りに【譖語】している	せんご
汎びる【縑流】の跡爰に在り	しりゅう
鶏を濡（に）るには【醢醬】にて蓼を実たす	かいしよう
【杳窕】たる青雲を望む	ようちょう
弔辭を告げ、【贈賻】の礼を致す	ぞうふ
稻株が育って【分蘖】しあじめた	ぶんけつ／ぶんげつ
【欹危】として楫師の趾	きき
獮祭の如き書机の傍らに【溲瓶】一つ	しゅびん／しづん／しゅうへい
木索【頸枷】を掛けて囹圄に磨ぐ	けいか

軍師の禁を犯す有れば、杖して之を【枷】す	か
夢笑【嬌靨】を開き、眠鬟落花を圧す	きょうよう
豪宕【莽蒼】の氣を領する	もうそう／ぼうそう
この【嚮背】は二国の強弱に大いに關係する	きょうはい／こうはい
舟楫を【港澳】に容れる	こういく
斬衰し【苴杖】し、倚廬に居り粥を食らう	しょじょう
防空壕の【掩蓋】に風穴があく	えんがい
史記石室【金匱】の書を紿（つづ）る	きんき
國權を制し【府帑】の濫費を防ぐ	ふど／ふとう
離婁微かに【睇】す、瞽は以て明無しと為す	てい
礼義無くば【鸚猩】に異ならんや	おうじょう／おうせい
本門と【迹門】に勝劣を付ける	しゃくもん
小さな腫瘍が【橈骨】にあつた	とうこつ
地平の上にあるは【褪紅色】の月	たいこうしょく
手足が【癱瘓】する	まひ
【褶曲】山脈が連なる	しゅうきょく
【秤量】二十匁の衡	しょうりょう／ひょうりょう
【麻病】と瘡氣の無い者はない	りんびょう
狂人【瘋癲】跋扈す	ふうてん
【絏臍】分娩が可能である	けいちつ
甚く【悔悛】を覚悟する	かいしゅん
【羚羊】、角を掛け、迹の求むべき無し	れいよう
【蕷蘿】とはアカザ科の植物である	はろう／ほうれん
【瘻管】を形成する	ろうかん
人の苦痛と【苦患】は量り難し	くげん
書を読みて聖賢を見ざれば、【鉛槧】の傭と為る	えんざん
季節の料理を腹一杯に【堪能】する	たんのう
和尚と【副司】が酒を交わす	ふうす
幼少時に【瘰癧】の経験がある	るいれき
【南鎌】二朱銀が發行される	なんりょう

隠れて部下に私事を【吩咐】する	ふんぶ
その僧侶は【還俗】して淨瑠璃を語る	げんぞく
関心から【阿含】の研究に耽る	あごん
蝮酒は【肺癆】を治し、娼妓の疲れ痩せたるを復す	はいろう
梅雨に【癰風】を患う	でんぷう
一心に浄土を【欣求】する	ごんぐ
飛鳥大樹に【圓遡】す	いにょう／いじょう
衆生尽く慈しむ【救世】の闡提	くせ／ぐせ／くぜ／ぐぜ
一部の【靺鞨】が渤海（ぼっかい）を建国した	まっかつ
遠くに【棹郎】の謳を聴く	とうろう
【鞨鼓】の曲を聴く	かっこ
赫たり【愷】たり	けん
宮女は【鞞靫】に腰掛ける	しゅうせん
二種類の【契丹】文字で書かれた墓誌	きっとん
及ばずながら私が【媒妁】の労を執ります	ぱいしゃく
署名と【拇指】を押す	ぱいん
【橙黄色】の色鉛筆	とうこうしょく
嬪御の弾く清らかな【箜篌】の音	くご／こうこう
頭部に白い【繻帶】を捲く	ほうたい
近海に【颱風】が発生する	たいふう
若くしてその方の【伎倆】を深くしている	ぎりょう
相生を吉とし【相剋】を凶とす	そうこく
【肩胛骨】辺りに痛みを感じる	けんこうこつ
酒味は既に【冷冽】、酒氣はまた氤氳（ふんうん）	れいれつ
【喇嘛】はチベット仏僧の称	らま
高炉の火中、【坩堝】足煉す	かんか
赤っぽい唐棧の【靽纏】	はんてん
多量の【砒素】が検出された	ひそ
【硅素】は地球の主要な構成元素の一つ	けいそ
【茯苓】を服すること十八年、玉女之れに従う	ぶくりょう

女、我を【疚心】せり	きゅうしん
出産の報に【逸】早く駆け付けた	いち
改札口に簡易【入鉢】器が設置されている	にゅうきょう
神聖にして【影向】の地と謂われる	ようごう
本地【垂迹】の地	すいじやく
戦地の【瘡痍】をして戸諫を進める	そうい
【関礙】と成り得るものを排斥する	かんがい
蛙蛇【蜒蚰】の三虫鬪争す	えんゆう
【襁褓】の籠に包まれた捨て子	きょうほう
【汀葭】、晦きこと秋の若し	ていか
晨光の【熹微】なるを恨む	きび
弦管夜に【鏘鏘】たり	しょうしょう／そうそう
【罟客】、自ら魚を求む	こきゃく／こかく
一群の【鷓鴣】が舞い上がる	しゃこ
灼熱地獄の【曠呻】を聞くが如く	ひんしん
【螟蛉】に子有れば、蜾蠃（から）これを負う	めいれい
歳を守る【阿咸】の家	あかん
春眠暎を覚えず、处处に【啼鳥】を聞く	ていちょう
旗幟並び建ちて【鎗錘】啾啾たり	そうこう
砂漠にて【白坱】を見つける	はくふ
【蜻蛉】の滝	せいれい
【刊改】を繰り返し彫像を彫る	せんかい
弾丸【黒痣】の地	こくし
【祠祀】の官を置く	しし
【荳菽類】の種子	とうしゅくるい
【蛔虫】の感染を危惧する	かいちゅう
【褪英】雨潤に浮かび、残蕊風潮に漾う	たいえい
搏飯を呑んで【痞結】する	ひけつ
【粢糲】な饗膳が並ぶ	しけい／しらつ
各駅【駛足】を募る	しそく

尾張の【葱冬】酒	にんとう／にんどう
憂いある心の【悄悄】として、群小に慍まる	しょうしょう
【惱惱】としたる子等を奮わす	もうもう／ぼうぼう
貧巷、【瘞蹶】の人の累累たる	いけつ
【砲熗】関連技術に長ける	ほうこう
金色に輝く【金鷂】が刺繡されている	きんし
刃相軋して【菱菱】たり	せんせん
【早蛩】啼いて復た歇む	そうきょう
倭國の至る所に【禎祺】の神仏有り	ていき
厳しく【拊口】の事を命じられる	かんこう
奴婢に【捶撻】して苦役を強いる	すいたつ
櫻樹もって【搗臼】を成す	とうきゅう
銅壺で【燉酒】をする	とんしゅ
貓狸に餌啗し、獲ようと【羈挂】す	けんけい
【擂槌】で胡麻を擂る	らいつい
【膚腠】を温めて今日を凌ぐ	ふそう
【鳩鵠】とは五位鷺のことである	こうせい
【蝗旱】相仍り歳すでに荒す	こうかん
四方の民、その子を【襁負】して至る	きょうふ
彼の美なる淑姫、与に【晤歌】すべし	ごか
右手に剣、左手に【羈索】を持つ	けんさく
白頭翁、【梃杖】突き徒弟に寄る	ていじょう
酒は【胸膈】を緩める	きょうかく
我が家に【鴿書】が届いた	こうしょ
【潟湖】の畔に生まれた漁村	せきこ
【矛槊】を天に向ける	ぼうさく
【春祺】、駘蕩たる春光	しゅんき
忠義の下に【殞命】する	いんめい
瘴氣は滌除し、【豺狼】は竄伏す	さいろう
急拵えの【毬灯】を提げて行脚する	きゅうとう

【沢陰】極まる土地	ごいん
軒に憑りて【涕泗】流る	ていし
奇怪千万な【謎語】が綴られている古書	めいご
【渝溢】する滻壺	ゆいつ
【桀紂】に比すべき暴君	けっちゅう
一生を【羈寓】に送る	きぐう
山色【空濛】として雨も亦た奇なり	くうまう
【箕稗】一石、吾が二十石に当たる	きかん
五百年にして【蜃蛤】と為る	しんこう
七色【眩燿】、心を晴らす	げんよう
月吐いて脣【冏冏】たり	けいけい
齷齪と働く【袒跣】の小女	たんせん
この者の【禹甸】の済るを聽さず	うでん
【鉢瓈】累累として珮珊瑚たり	でんえい
【嗔訶】を以て長成す	しんか
論の【紕繆】を穿り弁駁する	ひびゅう
その声【铿鏘】として聞く者耳を欹つ	こうそう
【珠瓈】炫転（げんてん）して星宿搖らぐ	しゅえい
鞚（き）を以て【駢突】を御す	かんどつ
花袴は【萃蔡】として秋塵に歩す	すいさい
先づ期す汗漫【九垓】の上	きゅうがい
腫瘍を【剔刲】する	てっけつ
【奚奴】を従えて訪れる	けいど
昨夜からの【霏霏】たる雨	ひひ
【娵隅】を捌いてそれを饗す	しゅぐう
艷めく【嫖子】の一瞥	ひょうし
【鶻鵠】樓に登る	かんじやく
【蜻蜓】の頭を西向の戸下に埋め	せいてい
【桴筏】海に浮かぶ	ふばつ
酒氣を帶び、【誕謾】を放言する	たんまん

一月を以て【癪疾】する	ゆしつ
【徇国】すること勿れ、親族を慈愛せよ	じゅんこく
兎有りて【爰爰】たり	えんえん
筑陽は頭を垂れて碧に、【秧苗】は意を満たして青し	おうびょう
水平に【泥鎧】を動かし塗装する	でいまん
【慊慊】として天を仰ぎて歎ず	けんけん
【鶻視】して先を争い、龍驤して並び駆く	がくし
百戯を弔して衆口【誼譁】す	けんか
【瘡疾】に罹ったように酷い寒氣がする	ぎやくしつ
【測鍾】で距離を測る	そくれん
簷滴は【霑槽】一個に中のる	りゅうそう
【駢驥】は一日に千里も走るといわれる	きりん
【仟佰】は交わり通じ、鶉犬相聞こゆ	せんぱく
草鞋を穿かず【踝跣】にして旅する	かせん
赤漆で塗られた【夾紵】棺	きょうちょ
【霪雨】霏霏として連月明けず	いんう
【羯羶】を味と為し、我が情を枉遏す	かっせん
収穫は【蛤蜊】一艘有るのみ	こうり
善行を積んで【价人】となる	かいじん
【灯檠】ごと崩して火を熄む	とうけい
地に【蹠蹠】して天籟を聞く	ききよ
鐘楼の【欒櫨】	らんろ
【彭殤】を斎しうするは妄作たり	ほうしょう
しかるべく【羯磨】して隔離される	かつま
臙脂に涙の【沁痕】有り	しんこん
漁網の【泅泳】する此の海	しゅうえい
【蜥蜴】とはトカゲのことである	せきえき
認可を【踟躇】して三日経つ	ちちよ
県官日に【廩稍】の供有り	りんしょう
氣も鬱ぐ【溟濛】の時	めいもう

【絳脣】珠袖両つながら寂寞	こうしん
晴楓【蕩漾】して、落花飛ぶ	とうよう
月が【皎皎】と輝く	きょうきょう／こうこう
【羲景】の煌めきが降り注ぐ	ぎけい
肘腋【臂膊】に汗滴る	ひこう
殯柩その郷土に【堋】す	ほう
士卒【諱謔】して門に赴く	かそう
一枚目と二枚目の【綜綻】を交互に通す	そうこう
【萍蘋】一浪の草、菰蒲片池の栄なり	へいひん
【皖】たり天の明星	かん
【遑遑】として奔走する	こうこう
四苦あれど【騫騫】として生謳歌す	けんけん
東閣の賢に【叨陪】す	とうぱい
【苣茗】、冬に生ゆ	きよとう
伈伈（しんしん）【倪倪】として民治める	けんけん
天然で【劭美】なる宝珠	しょうび
紅紫の【綉襖】	しゅうおう
【媚雅】な立ち振る舞い	かんが
人衆えて【蜩螗】沸羹たるを生む	ちょうとう
【蘆苻】とはヒヨリのことである	ろふ
家畜の背に荷物を【佗負】する	たふ
【宴犒】を尽くす	えんこう
長身體軀の者【驂乘】となる	さんじょう
大きな【鶴】が沼の鮨を狙っている	ばん
【蜚蠊】以て家内囂囂たり	ひれん
【蒔蘿】とはイノンドのことである	じら
臘月【遘愍】多し	こうびん
大觀衆の期待に【懔慄】する	りんりつ
【蝙蝠】とはコウモリのことである	へんぶく
議員を辞して此地に【遨遊】す	ごうゆう

サーベルを佩帶する【驃騎】兵	ひょうき
【佶屈】なる句は貴からず、平凡なる句はなかなかに貴し	きっくつ
獲物を【坎窔】に陥れる	かんせい
頭に【碼瑙】の冠を戴く	めのう
【桴鼓】の音に邦賊憚る	ふこ
熱帯に繁る【椰樹】	やじゅ
砂泥に【蛤蠣】有り	こうれい
崇牙の状、【樅樅】然たるを言う	しょうしょう
鍛接や【鑄接】で金属を溶接する	ろうせつ
四角【号碼】は王雲五により考案された	ごうま
銀光万頃、【淒其】たる風露	せいき
談論、【譴諭】して正子に及ぶ	かんそう
偏体【疥癩】の病人	かいらい
春に【魚滬】で漁獲する	ぎょこ
痴人は【鑪冶】を好む	ろや
霖雨壤に【滲漓】して泥濘と成す	しんり
【漑濯】の衣を服す	かんたく
徐に行り、【翔佯】して帰る	しょうよう
【墨瀋】を飲むことを令す	ぼくしん
【頑癱】の痒さで眠れない	がんせん
【集蘂】雄蕊が取り巻いている	しゅうやく
この形勢は【逆覩】し難い	ぎゃくと
到底【剗心】する能わず	こしん
【綵舟】に雲は淡く、星河に鷺は起つ	さいしゅう
家中の物を【搶奪】せられし	そうだつ／しょうだつ
一銀に父は【慷慨】、子は放蕩	けんりん
累雪の下に竹蔭猿声を【覩聞】す	とぶん
【什佰】の兵をして鳳翼を為す	じゅうはく／じゅうひやく
【狐貉】の厚き以て居る	こかく
【芻秣】時を以てせば、則ち馬も車を輕とし	すうまつ

【歛楯】もて前と為し、戟弩もて後と為す	ろじゅん
宴の中独りで【独侑】する	どくゆう
予想外の現象が【倨起】する	くつき
忠直の乱心も【佯狂】にすぎない	ようきょう
【崛崎】する富士の山	くつき
【雲鑼】の奏でを聴く	うんら
鶴鳴、【堂廡】に白鶴鵠居る	どうぶ
長眉月に対して【彎環】を闘ふ	わんかん
諸侯四夷、遠近【驩洽】す	かんこう
【鑾輿】廻かに出づ仙門の柳	らんよ
【蝘蜓】とはヤモリのことである	えんてい
先生の次回作を【俟望】する	しほう
水難者を【拯溺】する	しょうでき／じょうでき
【皎月】いまだ升らずして星天に満つ	こうげつ／きょうげつ
中庭に【竚立】するなり	ちよりつ
情理を【矯揉】す	きょうじゅう
昼は茅刈り、宵は【索綯】す	さくとう
申椒と【箇桂】とを雜う	きんけい
【擣鎗】とは火縄銃のことである	たいそう
【麁麁】として人衆夥多なり	ごご
其処彼処に【蛞蝓】這う	かつゆ
【讒慝】の口を間執せん	ざんとく
何事も【初桃】を確立して進むべし	しょこう
【屋榾】で一時雨宿りする	おくろ／おくりよ
【蜩蛻】とはザリガニのことである	らっこ
焱涼（えんりょう）極に達すれば花卉【櫟絶】す	そうぜつ／しょうぜつ
衣は【骭】に至り袖腕に至る	かん
親昵なる【甥舅】、啓處するに皇あらず	せいきゅう
【蠅蠅】とはイモリのことである	えいげん
【浙東】学派と浙西学派	せっとう

影は南山を浸して青【滉瀁】たり	こうよう
金壘【緑綬】が授けられる	れいじゅ
【鹹瀉】の地、作物は実らず	かんろ
我にその【革韁】を履せよ	かくとう
邪は清水を沐して【澡雪】せよ	そうせつ
運命の【骰子】を擲つ	とうし
青蕃は【翠激】に蔚れり	すいれん
私室に【蓆藁】して、以て斧鉞の誅を待つ	せきこう
凱歌の【讐虜】の声が聟する	かんぐ
【面皰】とはニキビのことである	めんぼう
質実【躋勇】なる快男児	きょうゆう
砂漠に鏤められた【骸骼】の道	がいかく
【笊籬】持ち河へ馳す	そうり
我独り【邱園】に四春を坐す	きゅうえん
小人者共【匱匱】たり	きょうきょう
酸を得れば則ち【縮縊】す	しゅくけん
俳諧を見渡して終始【咏歎】する	えいたん
決して【羲和】は弭まず	ぎか／ぎわ
旁は【笆籬】を織りて護る	はり
竹帛に書し、【槃盂】に琢る	ばんう
諸将皆【嘸然】たり	ぶぜん
神明素より【麵麯】を喫せず	めんぼう
【坎】が月、離の日の光明の精神を表す	かん
備え無くば山麓に【闌殫】す	らんたん
悲しき【胡笳】の声を聞く	こか
澗谿【沼沚】の毛	しょうし
一里に及ぶ【郛郭】が囲繞す	ふかく
心に疚しき事無くば、【縲縶】の縄目も辱ではない	るいせつ
【公廨】の造畢を祝う	くがい／くかい／くげ／こうかい
疾く【舡艇】に乗ず	ふてい

皆【蔬筍】を食らい葛藤を帶ぶ	そじゅん
【沟駭】愁苦して、以て其の帰るを忘る	きょうがい
出土の異なる二つの銅鐸は【同範】であった	どうはん
当今の政は【淑慝】を旌別するの時なり	しゅくとく
既に亀貝積しく寝み、【縉纏】専ら用いらる	びんきょう
君子胡ぞ【慥慥】爾たらざらん	ぞうぞう
兵を磨き、士を養い、日日【拊循】す	ふじゅん
岩壁を【縋登】して脱する	ついとう
叢叢頻りに【鹿盧】を引いて澆ぐ	ろくろ
【榆枋】を以て車と成す	ゆばう
ペリカン科は全【蹠足】である	ぼくそく
祖父の【殯柩】を前に歔く	ひんきゅう
【艤棹】して帰き、稍蒼波に赴く	ぎとう
【蠻衍】地に這う	いんえん
清漣の先に【淙潺】たる潤いを聴く	そうせん
北嶺には【紫筍】長ず	しじゅん
【蘿蔔】は春の七草の一つ	らふく
白蟻【朽梧】を虫食む	こうご
【玫瑰】はハマナスの別名	ばいかい／まいかい
水渢も【沝涸】する極寒	ごこ
英風を【海甸】に布き、令誉を京邑に馳せる	かいでん
【皓白】として広がる大雪原	こうはく
【敦厖】の瞼に涙する	とんぼう
水無月、【顛蕪】は花を咲かす	てんきょく
【俐亮】な声で話す	りりょう
雲樹立つ【榧檜】の廈屋	ひかい
口【噤閉】して言わず	きんpei
楚館の【蓀華】、能富翁の産を蕩す	しゅんか
【我們】が起す所の心象は如何	がもん
城中蛾眉の女、【珠珮】珂珊瑚たり	しゅはい

心身【躊躇】して焦らず	ちゅうちょ
土地【兼并】を禁ずる	けんぺい
出車【彭彭】、旗旄（きちょう）央央たり	ほうほう
十二宮と【躰次】に造詣がある	てんじ
【竹筍】に甘泉を分けて、石鼎に茶の湯を立ち置きたり	ちっけん／ちくけん
神氣【傲誕】にして、竟に賓主の礼無し	ごうたん
居る所は【聆聆】なるも、背きては得ざるが若し	れいれい
貯財は【巖然】として在る	えんぜん
簾外に雨は潺潺たり、春意【闌珊】たり	らんさん
蓬戸に【病歿】していた	びょうぼつ
その言は【洸洋】自恣にして以て己に適う	こうよう
与え尽くす輿窓【一纏】の錢	いっきょう
今一度【假裝】して赴く	しゅくそう
朋友には切切【偲偲】たり	しし
剣を抜いて【自剄】せんとす	じけい
物、【昭誓】として互いに進む	しょうせつ／しょうせい
将相は【聳昧】の民を思わず	しょうまい
府廷に【听听】す	きんきん／ぎんぎん
【縵帛】を茵となし、蔣席は頗縁にし	まんばく
【薑桂】の性	きょうけい
滂湃たる波濤は【堆墻】に激す	たいき
【菟裘】の地にて休む	ときゅう
膺の鼎を取り出して諸侯に【夸耀】した	こよう／かよう
昆弟【妻嫂】目を側めて敢えて視ず	さいそう
忠臣、【惓惓】の義なり	けんけん
【惷愚】の子、化して聰哲の人となるべし	しゅんぐ
高く猿啼を作して【箭箙】を揺るがす	せんぶく
田を為りて【阡陌】を聞く	せんぱく
王妃の【璇室】にて謁見する	せんしつ
天下を【闡并】し、災害は絶えて息む	せんぺい

大国と雖も般楽【怠敖】すべからず	たいごう
【曙曦】天門を開く	しょぎ
歳十一月【徒杠】成る	とこう
【幽篁】の裏、琴を弾じて長嘯す	ゆうこう
冥闇に潜むは【鼈鼈】の類か	ゆうご
【薇蕨】漸く春栄なり	びけつ
前庭の【榕樹】荘かなり	ようじゅ
紅玉のような【朱櫃】を賜る	しゅき
【渟膏】碧を湛う	ていこう
甘露、其の壌に遊び、滋液【滲漉】す	しんろく
海上の綈帆を【浪濤】に立って見据える	ろうじん
貴人は【繖蓋】を差す	さんがい
河口港に【濬標】を立てる	れいひょう
衣服を漑濯して【烙鑊】を当てる	らくまん
【阮咸】は竿上の褲を手向く	げんかん
我が疚心を【諤弄】する	ちょうろう
【瞽言】忌諱に触れる	こげん
大廈を建てる時は【基址】を確とせよ	きし
夜の【夢魘】、悄愴として眠られず	むえん
【哢吭】清かに聞こゆ	ろうこう
熟した【蘋果】に譬いし眼	へいか／ひょうか
樵叟の【大哥】と称される	たいか
【壙壙】たる天下に我一人	こうこう
紅葉散ること【懽懽】たり	せんせん
犬に論語、【瞳矇】に説く能わず	どうもう
【囮場】に投じて鳥有の悦を為る	かじょう
門を潜れば【嫣紅】の薔薇が迎える	えんこう
牀に臥して【嬾架】で読書する	らんか
【孰慮】して判断せよ	じゅくりょ
九霄の【靡靡】として其の園在り	ようよう

【苜蓿】の焼跡蔽うことをせず	もくしゅく
人の手癖を【倣倣】する癖がある	ほうこう
客【愀然】として前非を悔いる	しゅうせん／しょうせん
暗潮枕打って【篷窓】に泣く	ほうそう
丁丁たる【鋸鋸】の音、樵歌壮快なり	きんきょ
荒寥とした【陌阡】が続く	はくせん
【懈惰】は勉強の過ぐるに孰若ぞ	かいだ
【扎扎】として機杼を弄す	さつきつ
笙や簫篥を【撥捩】する能わづ	はつれい
人民を【簧鼓】するを抑制して敵情を和らぐ	こうこ
粗鬆なる筆法、【陝隘】なる規模	きょうあい
甍は【齷齪】として続いている	ぎんがく
【鯊魚】の如く口を開く	さぎよ
幾群の【薹笠】、暑耘の人	たいりりゅう
傾国の【嫋妖】たる色香に惑う	かんよう
天命を【亟務】とせよ	きょくむ
彼の門檻は斫られたり、彼の【石矼】は毀れたり	せっこう
【鳳簫】吹断して水運間かなり	ほうしょう
腹を裂いて【尸諫】を進める	しかん
九月、紀の【裂繻】来りて女を逆う	れつじゅ
寸かに【刺謬】有りて以て相和せず	らつびゅう
その人に手厚く【餽遺】す	きい
倒れながら【呻然】として笑う	こうぜん
天然水を【蒸餾】する	じょうりゅう
濯濯たる鱗、彼の【靈峙】に遊ぶ	れいじ
【纊絃】充耳は、聞く所多きを惡むなり	こうこう
これを毀疵し、前に出でて【嬾趨】して言う	せんすう
【僵尸】千里、血を頃畠に流す	きょうし
水底に潜む【鯢鯉】の姿	ていり
城塁を増し、【池隍】を深くする	ちこう

則ち古人の祭服を制して【旒纊】を設くる	りゅうこう
薄暗い【鰯鬚】の内	かしゅ
【鰯域】は朝鮮の別名である	ちょういき
すでに映す洲前【蘆荻】の花	ろてき
【悽愴】たる涙が滂沱として流れる	せいそう
鮎魚【頬尾】、王室燬くが如し	ていび
【鉗口】結舌、敢えて所天に上訴せず	けんこう／かんこう
【峻層】たる磴道を躋りて景勝なり	りょうそう
ただ酒を飲み、【鰐魚】を啖らう	ふくぎょ
逆軍に【斧戎】が下される	ふえつ
【袍襖】の制、三品以上は綾を服す	ほうおう
中なれば則ち従うべく、【崎】なれば則ち為すべからず	き
玉の【鼎鉉】大いに吉なり	ていげん
その【造構】堅牢なり	ぞうこう
【跨股】の間に猫が寝る	ここ
良い実のみを採び【扱排】する	きゅうはい
雲霧【晦暝】に迷い惑う	かいめい
跣足の【轎夫】は山路を往く	きょうふ
これ皆【摂籬】の臣の御子息	せつろく／しょうろく
青山【巖巖】として松籟索索たり	ぎぎ
蝶鮫の【魚鰓】の好む	ぎよひょう
【敦樸】は直言に能う	とんぼく
彼は【檸檬】の汁を好む	ねいもう／どうもう
林巒戸に当りて【蔦蘿】暗し	ちょうら
褥の上の亡骸は、白生絹の【桂袴】を纏っていた	けいこ
囹圄に一年、被髮【僂互】たり	ざんご
錫を削り【鉋花】落つ	ほうか
【碨礧】や牧場を有する莊園	てんがい
碑碣に【剗刻】す	きこく
茫茫たる【原隰】、祁祁たる士女	げんしつ／げんしゅう

諸友に飲御して、魚鼈（ほうべつ）【鱠鯉】あり	かいり
怠惰は【咎災】を呼ぶ	しさい
【萼萼】たる城門と番兵	がくがく
冬日は【麿裘】、夏日は葛衣	げいきゆう
【疥壁】を繰り返す惡餓鬼	かいへき
思わず【曖氣】する	あいき
綏県に【蜈蚣】多し	ごこう
先聖の【壺奥】を究む	こんおう
【中毒】へ招かれる	ちゅうこく
【姨母】に可愛がられる	いば
炉を擁して【酒缸】を開く	しゅこう
【嬌閨】枕冷やし、風に吟ずる曉	そうけい
珍生物の【儻來】する嶼	どうらい
湖水で洗面して【塵痴】を去る	じんか
【磅唐】として臼搗く	ほうとう
金闕の【西廂】に座す嬪娥	せいしょう／せいそう
始皇【惺悟】し、世間の必ず仙道有るを信ず	せいご
六年西を顧みて空しく【吟哦】す	ぎんが
【惺惺】として水平の嶼を見る	そうそう
民、【蚌蛤】を食らう	ぼうこう
天子のいるところを【楓宸】と呼ぶ	ふうしん
牙齦の疼痛は【牙疳】なり	がかん
古樂器の【揩鼓】を張り合わせている	かいこ
赤く【銹錆】した太い鎖	しゅうせい
兵戈【搶攘】、未だ靖寧なることなし	そうじょう
新苗の【新苔】を観る	しんがん
【蚯蚓】は内に筋骨の強無く	きゅういん
下は黄泉に飲み、上は【晞土】を墾ぐ	きど
戎機赴くこと【暨暨】たり	きき
親属【協和】す	きょうわ

煌びやかな【禰榎】に包まれる	りょうとう
崔嵬不崩、群士【樞樞】たり	きょうきょう
長年の痼疾を癒やす【愈扁】の術	ゆへん
淑やかの内に隠る【鋒鎌】が露になる	ほうぼう
堤防波濤を【雍塞】す	ようそく
世に【母望】の福あり	むぼう／ぶぼう
学童【罕傭】の才媛	かんちゅう
【汪肆】浩渺として、三方に環浸す	おうし
六月、【莎鶴】羽を振う	さけい
二子の名の天下に在ること【蛆蠅】糞穢の如し	しょよう
【檮昧】を以て至福とす	とうまい
険難の路に【磴棧】を架ける	とうさん
薬の副作用で【溏泄】を催す	とうせつ
仆れて【脯糒】にも垂涎する	ほび
機辟に中り、【罔罟】に死す	もうこ
小正月に【綵棚】を設置して明るくす	さいほう
乃ち憚懶惰は文学の【褊隘】を生む	へんあい
金銀銅鉄の【范熔】を掌る	はんよう
この【功勳】を胸膈に銘じる	こうせき
人をして【悽惻】の情を動かさしむ	せいそく
【撥鐙法】は現在の双鈎法に類似している	はっとうほう
草木はすでに【槭然】として黄たり	せきぜん
左右の官婢、服飾【樸陋】なり	ぼくろう
簡牘に【歇後】の文多し	けつご
晨に覚寤すれば【澡漱】に早速励行せよ	そうそう
率土之内、みな【雍熙】を致さしむること能わず	ようき
【矇瞽】牆に面するも悟らず	もうこ
阿に吽に【笙簧】撼く	しょうこう
空山に【洞簫】の声を聞く	どうしょう
【糲粢】の食、藜藿（れいかく）の羹	れいし／らっし

筆を呵して【絳帳】に居る	こうちょう
春日に【翦綵】の簪を飾る	せんさい
蟻虫【緼襡】に入る	こんとう
糸は繁（めぐ）り【縺縷】のごとし	れんる
子は【纏袴】の中に在り	きょうほう
【耙耨】を以て犁耕す	はじょ
政は【蒲盧】の如し	ほろ
【蔣茅】を燃して烽燧と為す	しょうぼう
猪牙舟の【艤声】、白鷗の嚶鳴	ろせい
軽快さに優れる【苧麻】製の麻靴	ちよま
蕭蕭たる【茄花】の池	かか
棹歌を聞き【蒲蓆】に寝る	ほせき
清澄なる【葦汀】に鶴鳴き渡る	いてい
列卒は沢に満ち、【罿罔】は山に弥れり	ふもう
鬢と雲はわたらんと欲す【香顎】の雪	こうさい
周原膾膾（ぶぶ）として、【董荼】飴の如し	きんと
甕中【糁粒】無し	さんりゅう
親【襁褐】着て、子は紳衿を着るが如く	おんかつ
禽獸求めて【脩罝】を張り廻らす	しゅうびん
和して歌い、【変徵】の声を為す	へんち
之に【干姜】を混ぜ煎じる	かんきょう
恋情の【混淪】たるを披瀝する	こんろん
【子子】は蚊の幼虫	げつきょう／げつきょう／けつきょう
【寒燠】の先に効を知る	かんいく
頭の中は【焙炉】の如く火照っていた	ほいろ
【蛞蝓】鳴き蚯蚓鳴き	かつろう
その村の稗史【怪祟】多し	かいすい
酒醴を作るとせば爾はこれ【麴蘖】なり	きくげつ
【蘖特】が愚痴も文殊の知恵	はんどく
螵蟟も群がれば人馬【逗撓】す	とうどう

礎石は変じて瑜瑾と成り、【貞莠】は化して芝蘭と為る  
弥生の上巳に【祓禊】を行った  
奸吏を【糺彈】する  
味方を言い包めて利を【菴婪】していた  
剛力【椹質】を碎く  
驍名を馳せる【熊羆】の士  
庖厨へ赴き【袒膊】する  
大帝の暗噁叱咤に【痿痹】縮栗す  
磴道万里、【跟腱】疼く  
【溥博】淵泉にして時にこれを出だす  
薪を【鍋竈】に入る  
時代の進化に【跟隨】する  
姦慝を【糾逖】し四国を縫んずる  
鞚を【縫紉】して赤脚を脱す  
その樹皮青白にして【駭聳】  
潮が引き【鹹渉】現る  
【尼甫】の儒を修めよ  
平安時代に敷かれた【仮寧】制度  
蔡を居き、節を山にし【藻悅】す  
飯を放り【噫噎】する  
薄物の【禪襦】で臥す  
兵士を【窪坎】に布陣させる  
【亶亶】とした道  
則ち【瓠落】にして容るる所無し  
【菘藍】は大青の漢名  
据え膳あれど【匙箸】はなし  
老措大と謂う者は【褶襞】の多い外套を着ている  
儀仗の兵、【嶢闊】を回る  
韓八座の事芸、【襪綫】を拆くが如し  
【篠籬】の中に蔬圃有り

ろうゆう  
ふっけい  
きゅうだん  
あんらん  
ちんしつ  

---

ゆうひ  
たんぱく  
いひ  
こんけん  
ふはく  

---

かそう  
こんずい  
きゅうてき  
ほうじん  
はくらく  

---

かんせき  
じほ  
けにょう  
そうせつ  
あいえつ  

---

たんじゅ  
わかん  
たんたん  
かくらく  
すうらん  

---

しちょ  
しゅうへき  
ぎょうけつ  
べっせん／ばっせん  
しょうり

【性懶】にして信ならざるものを、吾はこれを知らず	こうこう
幼時に【瘧疫】罹る	おんえき
小人敵前に【逗橈】す	とうどう
それあに蝦と【蛭蠅】に従わんや	しついん
刀を佩びる【番番】たる浪士	はは
【扱腰】する者には説法せず	さよう
仲【拆裂】して鬭ぐ	たくれつ
門庭を掃灑して【牀几】を払う	しょうぎ
【秬鬯】を献饌して巫祝が祈禱する	きょちょう
倫理に背き是非を【撓乱】す	どうらん／こうらん
【膾俎】を丈夫に致さず	はんそ
【鶉鷄】北へ飛ぶ	こんけい
梅檀【乾闥婆】の調べを賜る	けんだつば
婀娜たる【姫姜】に謁見する	ききょう
泰【緬甸】連接鉄道は死の鉄路とも呼ばれた	めんでん
山道を【暮匝】して詠う	きそう
【秣粟】の詰まったく桶	まつぞく
妖星一閃、叛旗翻翻たり【桀黠】の奸徒	けっかつ
駕籠を二【梃】呼ぶ	ちょう
【菠蘿】とは鳳梨のこと	はら
【尼父】無き世に自律無し	じほ
時利あらずして、【駢】逝かず	すい
弋人、矢を執り【貫弓】すれば狩る	わんきゅう
江南は【瘴癘】の地、遂客消息無し	しょうれい
短簫【鐃吹】功ある諸侯に賜う	どうすい
その輿丁【臂膊】を役して昇く	ひはく
酒に【湛湎】し、君臣別たず	ちんめん
【佚宕】なる情況などを写しいだすに適わず由あり	てつとう
【鷹鵠】の豢養を禁ず	ようよう
大【監物】の官に就く	けんもつ

軽い声音の【嘶嘆】を来す	せいき
誣言を陳じ、戚然として【給告】す	たいこく
【犁旦】を迎えて兵火熄む	れいたん
【瘻癟】を已し、死肌を去り	ろうれい／ろうらい
叨に【僭踰】の罪を犯す	せんゆ
棺の両辺に大銅【鎧鉢】有り	かんちゅう
子供が【佝僂】病に罹る	くる
千軍【蹠躍】して鬼神愁う	ようやく
【母慮】数千羽の鷗	むりょ
子貢【瞞然】として慙じ、俯して対えず	もんぜん
兄は【駿馭】の臣に属する	さんぎよ
嗚呼哀しき哉【鵠羽】の嗟	ほうう
沃饒の年、【蒜齋】甚だ美味	さんせい
風信子や【貝母】が花壇の土を裂いて葉を出す	ばいも
朝鮮人参を煎じて【蓼精】を造る	じんせい
山に【蹊隧】無く、沢に舟梁無し	けいすい
蛔虫や【條虫】は寄生虫である	じょうちゅう
夜半の【鐺鐺】に偲ぶ	とうとう
虎の尾を履む、【憩憩】たらば終に吉なり	さくさく
日常の【覃祺】なるを幸いに思う	たんき
貴嬪の【蟬蜎】たる御姿	せんけん
昏以て期と為せしも、明星【哲哲】たり	せいせい
風に臨む【杪秋】の樹	びょうしゅう
【枳枸】の籬を植えて塁域と為す	きこう
一騎の駒驥は千騎の【駢驥】を凌ぐ	らろ
煌びやかな【鸞輶】に駕する	らんろ
【欅柳】禁せず、朝暮の久しきを	きよりゅう
堂を前に鳥合【遶弄】す	じょうろう
儀礼を苟せず、【歛肩】する能わづ	きゅうけん
我【殯殮】して蠹瞿（あぼう）を零落す	いんえい

果たして穀城山下の黄石を見、取りてこれを【葆祠】す	ほうし
動くときは【幡葆】を飛ばすが若し	はんぽう
符采【彪炳】、暉麗灼爍たり	ひゅうへい／ひょうへい
林薄、杳として【阡眠】たり	せんべん／せんめん／せんみん
天子の大駕の後に【祫輶】有り	こうろ
聴衆【狎恰】して浮萍を排す	こうこう
門を闔じて【鑰匙】を掛ける	やくし
その土地元来【磽瘠】である	こうせき
その丈夫は【翔畋】を好む	しょうでん
驥驥の駕より【駢鸞】の駕	さんらん
悩み事を【傍輩】に諮る	ほうぱい
銀の【鑷子】で毛を抜く	じょうし／せっし
矢一束を【鞴鞬】に入る	ほさい
交靈に太鼓や【倭琴】を用いる	わごん
【蝗螽】孳漫し、我が百穀を残なう	こうしゅう
君主と臣民の【嘐恚】	がいい
紅陽侯立の父子、姦猾亡命を【臧匿】す	ぞうとく／そうとく
一斉に逃亡犯を【圜繞】する	かんじょう
【培塿】に建つ別墅	ほうろう
【浴沂】の楽しみ	よくき
ああ小子、いまだ【臧否】を知らず	ぞうひ／そうひ
酒を以て同僚と【親串】する	しんかん
問い合わせに【逡遁】して答えず	しゅんじゅん
蛮人の【酋渠】を俘とせん	しゅうきよ
閃く【幢牙】の威光	とうが
七つの【腔綫】が二十二時で一回転した	こうせん
童蒙【竹 笒】に放縱として書く	ちくせん
一家は歓談【串狎】して囂囂たり	かんこう
鷺鳥搏たず、【蝮薑】蟹さず	ふくたい
【昆侖】として不詳の文字群が刻鏤されている	こんろん

我が子は【筱驥】を玩弄す	しょうさん
麦秀でて漸漸たり、禾黍【油油】たり	ゆうゆう
昼は【橡栗】を拾い、暮には木上に栖む	しょうりつ
名要らずんば【掏摸】厭わん	とうばく
田を捨て【鍬鎬】を擲ち都会に走る	しょうかく
【鞋轡】を履いて各地旅する	あいべつ
麓まで【昇送】する	よそう
蓍薪を刈りて吾が【蓍簪】を亡う	ししん
草鞋【釘鞋】を作して售る	ていあい
皐月に生える【柞櫟】	さくれき
老人【芒鞋】を履す	ぼうあい／ぼうかい
【鉦鎌】大小甚だ異なる	しょうどう
奸臣に【躊躇】に比す悪評を牽強され	せききょう／せっきょう
半ば【綸巾】を脱し翠籜に臥す	かんきん
開錠し、【横門】が抜かれて扉は開く	おうさん
宅市に近くして、【湫隘】囂塵なり	しゅうあい
【陸陸】勉強もしないで試験に臨む	ろくろく
【耆欲】を節して、心気を定む	しよく
碧巖に坐して穆穆【撫鬚】す	ねんしゅ
【呂鉅】たる王は謀を貽さず	りょきょ
秦王【悖然】として怒る	ぼつぜん
我が都へ【躊躇】する客人多し	じょうきやく
危に瀕して【呼吸】を乱す	くきゅう
温風始めて至り、【蟋蟀】壁に居る	しつしゅつ／しつしゅつ
峭寒、膚【蟬裂】す	くんれつ
他と著しく【倬詭】した成績	たくき／たっき
これ【夬夬】たる制詔なり	かいかい
士夫ら高亢として【軾闇】する	しょくりょ
死生【契闊】、子と説を成せり	けつかつ
常に【元亨】利貞の徳に乖らず	げんこう

全身【惴慄】して跼蹐す	すいりつ
寂寞たる【谿澗】の林	けいかん
疆域を守らんと【徭戍】は堵列す	ようじゅ
これを以て抗弁を【訖了】す	きつりょう
【豈弟】の君子は民の父母なり	がいてい
臣【雍闊】せられて聞することを得ず	ようあつ
大きな声に阻まれた【韞価】の絵画	うんか
荒寥とした【畛畷】が続く	しんてつ
【蚕蔟】を設けて繭を成す	さんぞく
忠諫聞かざれば、【蹲循】して争う勿れ	しゅんじゅん
学問に【搏心】する	せんしん
夜に響く【擣砧】の音	とうちん
鋭い【鰐棘】に恐れる	ききょく
旭【榑桑】より発る	ふそう
上枝に八本の【鯢耙】がある	さいは
草薙してこれを【禽獮】す	きんせん
床には中国【緞通】が敷かれている	だんつう
【縕袍】を着ても恥じず	おんぼう
波【浹渫】たり、山崔嵬たり	しょうちょう
酒色に【酲溺】する	たんでき
儒学の【縕奥】見難し	うんおう／うんのう
巨大な【靿鎌】を振るう	じょれん
僻地の【岬岫】に潜む	こうしゅう
首相に【訝賓】して公命を行う	がひん
謂れのない噂話が世間へ【縕綜】する	さくそう
蓆に【尻坐】して酒を酌む	こうざ
短袖【參縕】として整わず	しんし
【銚耨】を推引して、以て剣戟に当つ	ちょうどう
名声闔国に洋溢して以て【蛮貊】の邦に及ぶ	ばんぱく／ばんぱく／はんぱく
【圻内】では恭しくする	きない

兄弟多ければ【甥姪】も多し	せいいてつ
一同【躰踊】哭泣の場	へきよう
これを【箱筥】に留めて有事に備える	そうきょ
感激の涙が【泪堂】に溢れる	るいどう
【羸膝】履蹠、書を負い囊を担い	えいとう
廟を祭り獻酬【醜酢】す	いんさく
【貲財】を斂めて以て其の行を送る	しがい
謹んで【天捷】に遵う	てんてい
霪雨続き【魘翳】として物見台は佇む	えんえい
白昼の【畋漁】を生業とす	でんぎょ
【婁宿】は二十八宿の一つである	ろうしゅく
木製の【丫叉】で狙撃する	あさ
食料の【醋酸】を造る原料	さくさん
豊作を祈る【藉田】の儀を執り行う	せきでん
雲天【闔闢】し、雷霆出でて地に劈く	こうへき
麗らかな【燠沐】の気	いくもく
夜な夜な【鍼黹】に励む者達	しんち
宗室を【欺詐】し、諸侯の賂を受く	ぎたい
【緊箍児】のようにキリキリと締め付けられる	きんこじ
百口偕に行き、地を【江瀆】に避く	こうふん
蘋蘩【蘊藻】の菜	おんそう
仰視すれば【參昴】耀く	しんぼう
【燭龕】を以て主を貶す	ようそう
蜂蠻の蟹も【躲閃】して唾す	たせん
米を齧れば【顛顛】動く	しょうじゅ
奇偉【倅儻】の画策を好む	てきとう
【鬪令】、觴を潤わす	きゅうれい
香氣高い【芫花】の花蕾	げんか
背きて【淤淀】を師に打つ	おでん
弓道部の【絣紺】を聞く	ほうこう

若くして才能を評価され【虎賛】に任用される  
虎は徒に【咥噬】せず  
悪靈を退ける【鬪邪】の絵画  
茲に【苦廬】を造り殯をする  
吏民頗る其の【憇急】なるを畏る  
一晩【煩懣】懊惱、輾転反側した  
【縷綵】、飛燕を成す  
【勸懃】として救恤に励む  
賀宴の席ではしたなく【抖膝】する  
些事で【捫著】を起こす  
呼吸は雲と為り、【噫欠】は風と為る  
一同【梟廬】の成すに瞠乎たり  
松籟を聆き、【楸局】を懷かしむ  
【拏轔】して頭を低れる  
歎歎流涕して【噫嗁】す  
別れに臨んで【殷勤】に重ねて詞を寄す  
【萐蔥】生菜、これを常とす  
長夜【沾湿】しては何に由りてか徹せん  
文鏤ありて、【款識】なし  
自然の【洵美】たるを貴ぶ  
最寄りの【茗肆】で寛ぐ  
先師に【舍奠】す  
賢母は四人に【兜轎】を担がせる  
【偈偈】たる鼓舞に感心する  
兵燹は【輦輶】を灰燼に帰す  
兵燹降り掛かり宅宇【齋用】失う  
伝わりて【衄蟻】瞑目を為す  
鳥貝や蛤は【瓣鰓類】に属する  
六頭の【輶馬】を以て六龍と為す  
【曰若】に古の帝堯を稽ふ

こほん  
てつぜい  
へきじや  
せんろ  
けんきゅう  
はんもん  
るさい  
きんこん  
とうしつ  
もんちゃく／もんじゃく  
あいけん  
きょうろ  
しゅうきょく  
きょしょく  
いお  
いんぎん  
わきよ  
てんしつ／てんしゅう／せんしつ  
かんし  
じゅんび  
めいし  
せきてん  
とうきょう  
けっけつ／けつけつ  
れんろ  
せいよう／しよう  
じくべつ  
べんさいるい  
ろば  
えつじゃく

【悉曇】文字の研究者	しつらん
【哇咬】に耳を傾けず	あいこう／わこう
野党の【喧噪】にも動じず	たくそう／とうそう
【一瓮】の村醪	いちおう
項王意烏【猝嗟】し、千人皆廢す	そっさ
【肓俞】を押さえる	こうゆ
蜩螗共の【坏戸】を落とす	はいこ
若くして詩韻は【贊】たり	いん
家家【釵钏】を売り、ただ春醪を献するを待つ	さいせん
横暴【陂曲】の性を恥とせず	ひきょく
自ら【酒腆】して、致すに酒を以てせん	せんてん
汽の立つ【餃餌】で饗す	こうじ
蒙古の民は【鮓苔】を尊ぶ	さとう
言を以てこれを【蹂藉】す	じゅうせき
市人皆大笑し、手を挙げてこれを【邪揄】す	やゆ
狐裘【尨茸】たり	ぼうじょう
【屏幃】を廻らす	へいい
【蛇蛇】たる碩言は口より出づ	いい
【鶯囀】に耳を澄ます	おうてん
凡そ廿の【畴圏】を備える	しけん
行く者には必ず【贖送】する	じんそう
【矜寡】を侮らず、彊禦を畏れず	かんか
粗い【鉢鍔】の方壺	ぎんがく／きんがく
伉儷、【壠篋】相和すが如く	けんち
石碑の台石剥落して【莓苔】を生ず	ぱいたい
辰精運に感じ、【昴靈】祥を発す	ぼうれい
玩具の【楮鈔】で賺す	ちょしょう
【枹鼓】を執り軍門に立つ	ふこ
帝の子孫は尽く【隆準】の人	りゅうせつ
濠に【撒星椿】を設けて侵寇を阻む	さんせいしよう

愛犬の夭逝に【愴矣】として啼泣する	そうい
動靜【険輸】して妖姿を為す	せんしゅ／せんゆ
その火光を受けたる半面は【殷紅】なり	あんこう
【繳弋】を放ち離かるを俟つ	しゃくよく
【泄泄】たるその羽	えいえい
匆匆たる【晨粧】の朝	しんそう
【袒衣】を解き、裸身にて立つ	じつい
金欄の【彪蔚】たる文りを見る	ひゅううつ／ひょううつ
【炒米】を除湿剤として用いる	しょうべい
【芸薹】は道教の五辛の一つ	うんだい
早晨に【運甓】して壯なり	うんぺき
【惇厚】遜讓にして行儀有る者を挙げよ	とんこう
鄙人の【曷鼻】を嗤う	かつび
湖畔に【鯢鱠】泳ぐ	げいしゅう
訓の卒するを聞くに至り、【吼号】せざるなし	こうごう
耳、【淫哇】に務む	いんあい
盆栽を【揃刈】して整える	せんがい
【嗄声】ながらも必死に訴える	させい
北方に【櫂行】す	きょうこう
【辯鬱】が逆も似合う少女	べんけい
【荀草】赤実、厥の状管の如し	じゅんそう
【酒壠】も溢れるほど酒を飲む	しゅたん
病褥の上に【懊儂】煩悶して眠を得ず	おうのう
【奕楸】を清潔に保つ	えきしう
【鉅卿】この壯麗を知る	きょけい
【隋鬱】して牲を逆える	ずいきん
黄鍾管の体積は【一龠】である	いちやく
宴の【蘭席】を設ける	りんせき
邪網を【擗裂】す	かくれつ
種を蒔いて【畲田】を鋤く	よでん

【鉗鎗】橐籥 (たくやく) 、心力を枉ぐ	けんつい
玉階の【嶢崕】たるを踏む	ぎょうそう
心【憤惄】として諒直なり	ほうほう
【裊袍】糟食、盈餘を求めず	おんぱう
その穴に臨みて、【惴惴】とそれ慄く	すいせい
【嚙唔】の声に耳を傾けず	おうご
中枢への路を【隘】する侍	やく
里二百五十八に【渠苔】百二十九なり	きよとう
草萊荒として【蒙蘿】たり	もうろう
君侯の華袞【斐炳】として矜嚴なり	ひへい
【赳赳】たる武夫	きゅうきゅう
度重なる土砂崩れで積まれた【砦磊】がある	はいらい
複数の權官と【掾屬】	えんぞく
峰【岑嵒】にして日蔽う	しんがん
食す際には【餧死】を危懼せよ	えっし
夏の土用に【曬書】する	さいしょ
雕鏤せずして、【沂鄂】有らしむるを謂うなり	ぎんがく／きがく
九山、【栢旅】す	かんりょ
待てど暮らせど【纓繳】せず	えいしゃく
禪客に【梶子】	しし
老吏【杉籬】の剪定を怠らず	さんり
山に【槎櫟】無し	さげつ
【桔槔】の声断えず	けっこう／きっこう
寝起きで意識が【僥僥】としている	ぼうぼう
【欹歟】と故郷を惟う	いよ
【汕碗】以て漁りする	さんわん
皓腕を神游に攘い、【湍瀨】に玄芝を探る	たんらい
邸第の【娃鬟】に礼する	あいかん
翼二風起こし、【膝六】雪降らす	とうろく
何ぞ【籟籥】の気を納れて鳴るに異ならんや	らいやく

積雪の渙兮たるは地に【泛漲】す	はんちょう
之に【潘沫】を遺り、酒肉を備え	はんもく
【纏着】仕立ての観腋袍をいつも着用している	さいじやく
相慕う心は【鰐膠】の如く	ひょうこう
【湯熨】快を取る術は誠に短なり	とうい
菩薩身に莊嚴具の【幢幡】を裝飾する	どうばん
奇抜な【鰐鯉】料理で遇す	じんこう
古い【茗謫】図録の鈔本	めいえん
七日間【斎戒】して妖邪の氣を祓う	さいかい
月汎え風淒まじく、【砧杵】悲し	ちんしょ
文武至って王位を【續緒】す	さんしょ
馬車を走らせ街中普く【咨諭】する	ししう
鳥の【噦噦】を聞く	あくあく
【積聚】とは癟瘍や胃痙攣を指す	しゃくじゅ
故郷【迢遙】として君門深し	ちょうてい
【鉛錐】の如く敵陣に穴を穿つ	せんすい
兜虫の鳩まる【檜櫟】の雜木林	ゆうれき
一刻【亭熟】し、而してこれを吟嘯して俟て	ほうじゅく
【譚名】は狸、されども顔は狸に似ず	こんめい
国家の危殆に【怕怯】す	はきょう
家畜を【笞撻】して調教する	ちりゃく
憂愁のうちに【諒陰】を迎える	りょうあん
鉦鼓や【纛旛】が並び立つ	とうばん
喧騒の中、子を求めて【裴回】す	はいかい
【磚房】の家屋が櫛比する街	せんぼう
【迴飄】の中に揺れる嶼	かいひょう
数名の【隠亡】が武家の門で待つ	おんぼう
南に【樛木】有り	きゅうぼく
辺り【礲薄】の曠野	こうはく
中宵白馬を斬り、【盟歃】氣すでに麤なり	めいそう

【属鏤】の剣を賜う	しょくる
私自身の【越度】だと猛省する	おちど
詩美人細意、【熨帖】すること平らかに	うっちょう
事に恪む【阿媽】に志那茶を拵える	あも／あま
屏風に【委虎】が描けるか	いし
築山の下に【榜櫟】の紅葉	こうれき
高山の深山【柏楨】	びゃくしん
棒杵に【歇驕】を繋索す	かつきょう
鬱然として幾年、【潭湫】繁茂す	たんしゅう
痘痕面な【福綴】の草医	へんとつ／へんてつ
雛の入る鉄鉢に【福衫】を被す	へんさん
荊棘の城市、【蘆薈】の巷	ろかい
これを嘗みるに【犁然】たる危懼を抱く	りゅうぜん／れいぜん
禍神に中り【触穢】の者と忌まれる	そくえ／しょくえ
その文飾を立つるや、【寃治】に至らず	ようや
瞰下に【陂陀】として褶襞在り	はだ
卿雲爛たり、【糺縵縵】たり	きゅうまんまん
弊袴を【紉緝】する	じんしゅう
花鳥を縫った【綾子】の振袖	りんず
鋒鏑を把り、【行縢】を履く	こうとう
鯈鱈を【罩汕】すべし	どうさん
厭厭【聶聶】として榆莢落つる	しょうしょう／じょうじょう
【苦蓑】の床にて寤寐の境を逍遙する	せんさ
鬱はその体に【龍茸】として叢がる	ろうじょう
その英雄はまさに【荀氏】の八竜を出自とする	じゅんし
繡羅の衣裳は【莫春】を照らす	ぼしゅん
春暁に山に【蒐畋】す	しゅうでん
【蓍龜】に見われ、四体に動く	しき
心を勤めて【公姥】を養う	こうば
袖珍本を【巾箱】に入る	きんそう

鼓声は兵どもに【賁育】の勇を授ける	ほんいく
深潭の【澳溟】に至り、洞室の穹崇たる有り	おうめい
貧は富の許に【蛾傳】する	ぎふ
我見ずして、我が心【苑結】す	うっけつ
懷に護身用の【榦杖】を仕込む	たつじょう
曹を分けて【射覆】すれば蠟灯紅なり	せきふ／しゃふ
仕事もなく【亡聊】を託つ	ぶりょう／むりょう
【猗儻】たる其の枝	あだ／いだ
【蜃蜃】として粉骨碎身する	きき
逆も【兌利】で清潔な包丁	えいり
万物【和兌】するが如く	わえつ
馬は忽ち【躡景】して軽軽しく馳せる	じょうえい
【樗蒲一】なら七里帰っても張れ	ちょばいち
幾百という【槧本】を藏す	ざんぽん
歯を嚼みて【刺刺】たる声を作す	せきせき
翡翠の威蕤（いすい）たるを錯え、玉綏に【繆繞】す	りょうじょう
沛公輒ち其の冠を解き、其の中に【洙溺】す	しゅうにょう／しゅうじょう
亡き父の愛読書を棺槨に【齎送】する	しそう／せいそう
【膾胷】たる丹田、白皙たり	おつどつ
【簣籜】に身を凭れる	ろうそう
【驅儻】鼓を擊ちて、長笛を吹く	くだ
戈を捨て【趣駕】して帰る	そくが
【蒲萄】の美酒、夜光の杯	ぶどう
【爰書】して訊鞠論報す	えんしょ
顧みず【拊髀】雀躍して久闊を叙す	ふひ
出生と同時に【產穢】は発生する	さんえ
有待の【穢身】を救療せん	えしん
国覓（くにまぎ）が酋長に【剽劫】される	ひょうきょう
すなわち芟し、すなわち【柞】す、それ耕し沢沢	さく
柵林で【柞蚕】を飼育する	さくさん

【胡蓋】は天目茶碗の一つである	うさん
【瓈玻蓋】は天目茶碗の一つである	たいひさん
敝笱（へいこう）梁に在り、その魚【鯈鰥】	ほうかん
絳き【柏頭】を著けて読誦す	ぱっとう
白膠木や【權萃】を護摩木として焼べる	ごんずい
永訣の淵を瞻て【隕泗】す	いんし
生民を荼毒し、万里【朱殷】たり	しゅあん
天を仰いで【長吁】する	ちょうく／ちょうう
【韻滑】にして実有り	けっこつ／けっかつ
【雍也】論語	ようや
羲和の下、下下【亟行】す	きょくこう
【楠榴】の木、相思の樹	なんりゅう
飲食を覗めて坊門に【僵仆】す	きょうふ
【午后】に参入し須臾にして退出した	ごご
大牢を饋し、【縵樂】を以て餞す	まんがく／ばんがく
【優讐】を愛し、寝食常に側に在り	ゆうこん
火山中に【槎牙】詰屈たる岩石あり	さが
妖星煌煌として【暝天】を破る	めいてん
寵兒の声援を受けて生氣の【汪溢】を感じる	おういつ
老驥【棚棧】に伏す	ほうさん
敵軍の【糧糒】を攻めて憔瘦たらしめる	りょうび
農耕をして【粢盛】を供給する	しせい
政略の宏謨、【殿廡】の上に成る	でんぶ
凄麗の【宮娃】に謁える	きゅうあい
金烏は【蚤莫】に興替す	そうぼ
車窓より【鉅偉】たる堰堤を見る	きよい
【牟槊】を杖（と）り青瑣に立つ	ぼうさく
【簾篠】は風を懷き、葡萄を陰を結ぶ	こうしょう／こうじょう
勢家【咆哮】として方命す	ほうこう
火にかけた鉄鉢の【磚茶】が煮える	たんちゃ／だんちゃ／せんちゃ

遍く【磚石】を敷き、歩行道車馬道と分かつ	せんせき
【枸木】は必ず将に隠括烝矯を待たんとす	こうぼく
南は燠暑虫虫たり、北は【寒沢】栗烈たり	かんご
彼の美なる淑姫、与に【晤語】す可し	ごご
茶肆名物の【薯蕷羹】を頂く	しょよかん／じょよかん
老鼠【生薑】を咬む	しょうきょう
大宗匠は溢然として【属纊】に就いた	しょくこう／ぞくこう
客気を扣制して【鉗楷】せんとす	けんこく
爨炊【澣洒】の労を取りて亥艾を養う	かんさい
紫紺の【佩幃】を懷中する	はいい
皆黄巾を著け、所在【燔劫】す	はんきょう
【畦蔬】茅屋を繞る	けいそ
断斬して之を【竿杪】に懸く	かんびょう
天の方に憐（いか）る、【夸毘】を為す無かれ	こひ／こび
【溥天】の下、王土に非ざる莫し	ふてん
周囲の援助を【妨礙】する	ぼうがい
刀刃【鎬鎬】鑠鑠として華やかに	こうこう
力足、【踏鞴】を踏む	とうび
【式竿】の風月、南湖に老ゆ	いっかん
これを羨み、これを【抓取】せんとしてやまざる	そうしゅ
室原川に【鮎鱈】在り	ほうれい
【鱈腸】とはタカサブロウのことである	れいちょう
【粳稻】熟すること苦だ遅し	こうとう
端午の【筒粽】を食す	とうそう
歴史【檔案】を収蔵する	とうあん
害虫に強い木と【接木】する	せつぼく
提灯を【樹榼】に懸く	じゅあ
【雖然】それは明らかな責任転嫁である	すいぜん
粘り気のある【糯粟】	だぞく
皇后の下に【抵掌】して言う	ししょう

【暹羅】はタイ王国の旧称	せんら
南西の島嶼に【鵠母】が分布している	ぼうほ
プイ族を【狹苗】と言う	ちゅうびょう
一名龍【檐子】、鼻くに二竿を以てす	たんし
濡需なる者居れば、【卷婁】なる者普く居る	けんる
【部婁】には松柏無し	ほうろう
束の間の【歇息】を設ける	けいそく／かいそく
【慷慨】をもって苦境を越えた	きょうし
よもすがら【棋】を打ち久闊を叙する	ご
木を伐りて【許許】たり	ここ
王師【驛驛】として、誅を大宛に致す	たんたん
釈迦も三度謗れば【李如】たり	ばつじょ
【蒟醬】とはキンマのこと	くしょう
嵌巉たる山道を越え、【砑然】たる幽谷を見ゆ	かぜん
死生の境を【旁皇】する	ほうこう
婦女は【施髢】し、縲綾の衣を着る	してい
懲りず【拗強】に見栄を張る	おうきょう
摧枯【拉朽】、顧慮することあらず	ろうきゅう
【楞嚴】経を読む	ろうごん／りょうごん
勇壮【鬚鬢】の士	きょくけい
辺地の【掣令】に従う	けいれい
【髻堆】面赭は華風に非ず	けいたい
帝、【式儀】を合わす	にぎ
争犬の【吽牙】を当路に聞く	ごうが
【倚魁】として僵尸墟に満つ	きかい
【猝然】と姿を消した	そつぜん
【酢漿】から蓼酸（しゅうさん）を探る	そしょう
籠鳥、忻忻として空へ【亶翔】す	せんしょう
故らに【哈哈】として笑う	こうこう
鳥集の路【晫晫】と鳴り	とうとう

輶をもって【橦城】す	しょうじょう
死臭衍り【噦嘔】を堪える	えつおう
運命の苛烈さに【吸鳴】する	きゅうび
ここに嘗て【鮀鱈】の孵化場があった	けいそん
【斬衰】は五服の一	ざんさい
瀛海を震わす【鯢鯨】の回遊	おんげい
お庭に【棕竹】を栽培する	そうちく
大命【隕隊】して、良に絶世せり	いんつい
有衆皆【壱是】に身を修めよ	いっし
秦世の【亟絶】する所以の者は、其の轍迹見るべし	きぜつ
野雁と【卉零】が優游として交錯する	けんれい
全書を取り【杷梳】して剔抉する	はそ
【橦末】の伎をもって藹藹たり	とうまつ
【蓼莪】の詩	りくが
楊柳と【拘柳】	こうだ
鳶が【瀰漫】した古家	びまん
未踏の【岔口】に標を遺す	たこう／さこう
【畜畜】磕磕の為政者	しし
陳皮も知らぬとは【艸医】に抵たる	そうい
我が籬下より野良犬の【猩猩】を聞く	せいせい
丘のごとく牡蠣【竹蟄】馬鹿貝が堆積する	ちくてい
梁上の【巨蟠】、眈眈として我を射る	きょもう
既に【禡祖】を去り、これ懷いこれ顧みる	でいそ
冒頓【单于】の勢力は強大なり	ぜんう
磐座に【跋倚】する愚か者	ひい
【荼枳尼】の法	だきに
【湯湯】として洪水、あまねく損なう	しょうしょう
【恂目】の刹那にその鳥は羽搏いた	しゅんもく
清新【跋刺】たる籠の中	はつらつ
大統領の【届満】に伴い実施された選挙	かいまん

【謗法】の罪を犯す	ほうぼう
【枳首蛇】睥むは爾の吭	ししゅだ
【禺彌】は北海の海神とされる 神社の大木が【頓仆】する	ぐきょう とんぼく
【烏瑟膩沙】、智慧深く	うしつにしゃ
【跳踉】して僮僕を趁う	ちようりょう
【桑椹】で酒を作る	そうじん
【那謨】と拝み奉る	なも
【撥鏤】細工の煙管を贈る	ばちる
陽糸の山に【鷺行】す	ぶこう
兄弟知らず、【咥】としてそれ笑う	き
蜘蛛の巣に【捉搦】されたかのよう	そくじやく
栄養の貯えた【臍囊】	さいのう
山林にて【熊膾】を採取する	ゆうどう
常に【譚笑】を以て諷諫す	だんしょう
鍋肉の【膾若】を待つ	じゅじやく
真言宗の大【譚林】	だんりん
【遶仏】にて右遶三匝する	にょうぶつ
【又隱】の茶室にて茶道を嗜む	ゆういん
蟋蟀のことを【趨織】とも謂う	そくしょく
恭敬慈愛、言語【嘔嘔】たり	くく
五世は【袒免】し、六世にて親族竭く	たんぶん
楚楚たる肢体は良く【稠適】し	ちょうてき
罪人を撻ち【摺脇】す	ろうきょう
隣に【銚弋】有り、猗儻なるその枝	ようよく
堂の東北に【亨】す	きょう
【拿翁】の侵略に遭いて国亡ぶ	なおう
之れに命けて【擲囊】と曰ふと	しゅうのう
互いの【椎結】を握り合い喧嘩する	ついけい
合図と共に【躊躇】して走る	ちゃくかい

【徒頃】として神を謳歌する	しょうよう
至って危うきを致すは、【累碁】これなり	るいき
威の徳と交わること【縹纏】の若く	きゅうてん
伏して【昭繆】を案ずる	しょうぼく
獄にて自ら【縹死】す	きゅうし
【扱衽】して鍾山藍田の上に登る	そうじん
左右【谷蠡】王は最も大国を為し	ろくり／ろくれい
意を失して【醋意】を抱く	そい
【沾沾】として自ら喜ぶのみ	ちょうちょう／せんせん
二年、市に【予賈】せず	よか
奇なる【丑果】が生る	まんか
気持ちの整理がつかぬまま【做七】を迎える	さしち
大師に【錯質】して敬う	そし
脈の大なるものは、尺の皮膚また【責】して起こる	ふん
糜を【鬻】し糊口を凌ぐ	しゅく
敵機を【徹擊】する	ようげき
荒荒しい【責鼓】の音	ふんこ
【狼復】して府を訟える	こんひょく
愛らしく【唧指】して止まない	がんし
【鳥芻沙摩】明王は炎の神とされる	うすさま
天下万民漸く【矜式】する所を知る	きょうしょく
仁心を持ち【竺摯】にして人に接す	とくし
証憑有れば【塙覗】たる言葉となる	かくかく
その中に【鮓魚】多し	げいぎょ
町人【齧齧】として工商に励む	しゅくしゅく
苗裔【茲茲】として、土を有つ者乏しからず	しし
俚しい【中茅】より出でる奇傑	そうぼう
【中躊】を沓箱に納る	そうきやく
灰湯で煮て【涎滑】を取り去る	えんかつ
嘗ての山林地帯を【焼畲】してできた畠	しょうしゃ

稚魚を掬う【数罟】の漁は海を腐らす	そくこ
鹿の子草を【纈草】とも言う	けっそう
落葉の【淹数】に感慨す	えんさく
食【餧】して餓（あい）す	い
垂轡【瀰瀰】たり	でいでい
人の気を稟くこと、【醇壺】なる能わず	じゅんいつ
往往にして【辟人】して静を求む	ひじん
埠頭は当時「【碼頭】」とも称した	ばとう
廟堂に【粢醍】有り	してい
雷滴る音【汎漣】たり	ほうしょう
智識寺には大きい【廬舍那仏】がある	るしゃなぶつ
軍に輜重無ければ【委積】も無し、則ち亡びの道なり	いし
奇術の【怎様】を訊く	しんよう
その藩主は宝永七年に【卒】す	しゅつ
紙幣を【撕破】す	しは
【蚕蛆】を駆る	さんそ
風雲に【嘯咤】して働きかける	しった
自らを咎めんと【怎生】と言う	そうせい／じんしょう／そさん
首夏、【芥耳】咲む	れいじ
【薛家】の盤石	せっか
蒸豚【膾羔】の食	じこう
車窓に地榆と【芭茅】の穂を見る	はぼう
笑うも【矧】するに至らず、怒るも罵るに至らず	しん
その短褐穿結の者は【柏腹】を服す	はふく
亦歩【亦趨】	えきすう
四瀆を【擊汰】して杭る	げきたい
四牡駢駢（ひひ）たり、周道【倭遲】たり	いち
手臂衰えて【倩人】尺牘を作る	せいじん
雄勁たる【捺筆】を歎美する	だっぴつ
多事多端の【憂懣】に勝えず	ゆうもん